

新日吉神宮 小五月会

毎年五月第二日曜日

新日吉神宮

京都市東山区妙法院前側町

① 祭礼と由緒

地域の概要

新日吉神宮は阿弥陀ヶ峰山麓に鎮座し、そこから北・西側にかけて、鴨川を挟み東山区と下京区にまたがるおよそ百か町の広大な氏子地域をもっている。氏子地区は元学区ごとに四区分され、それぞれ修道組、貞教組、菊浜組、崇仁組と称する。各組の町数は、修道地区に二十六か町、貞教地区に二十五か町、菊浜地区に二十六か町、崇仁地区に二十か町『新日吉神宮氏子地沿革と古式祭』八〇四十二ページによる。以下、本書は『沿革』と略記。氏子数は最盛期には約六千戸を数え、現在は二千戸ほどである。貞教組は、東と西に分かれており、伏見稲荷大社と新日吉神宮の氏子が混在している地域である。菊浜組でも、ほとんどは新日吉神宮の氏子であるが、一部は伏見稲荷大社の氏子の町もあって入り組んでいる。

劍鉾は、単独で保管する町が貞教地区に一か町（日吉町）、菊浜地区に五か町（上二之宮町・下二之宮町・八王子町・稲荷町・大宮町）ある。もう一本は五か町で共同管理されていたが（聖書子町・岩瀬町・早尾町・波止土濃町・八つ柳町、これもすべて菊浜地区に属している。このように鉾町の分布は均一ではなく、地理的にみると鴨川右岸沿いの狭い範囲に集中している。

小五月会の神幸祭では、氏子地域の各町が輪番で「当町（とうちょう）」を務め、祭礼の運営にあたっている。現在、「当町」は修道組と貞教組が交替で務めており、平成二十三年（二〇一一）は貞教組、平成二十四年（二〇一二）は修道組が担当した。この順は交互ではなく、両学区の戸数に応じてやや複雑に決められている。修道↓

修道↓貞教の順で、修道が二年で貞教が一年というのが基本であるが、例外もある。当町の編成には近世中期から変遷がある（後述）。なお各組からは組総代一名が出される。

平成二十三年の祭礼当町は貞教組の中の茶屋町・上塗師屋町・南塗師屋町・西之門町・大和大路一丁目・大和大路二丁目の六町。平成二十四年の当町は、修道組の中の東常磐町・西常磐町・庵町・芳野町・石垣町の五町である。平成二十四年の場合、三月ぐらいに話し合いをもち、「幸御鉾」を担当する町、「大鉾」を担当する町、「稚児」を担当する町、その他の割り当てをくじで決めた。「幸御鉾」「大鉾」にあたった町は、神幸中に行列が立ち寄る祭壇の設置も担当する。この他、当町は警察との折衝、巡行説明会、地元民との交渉などを担当する。

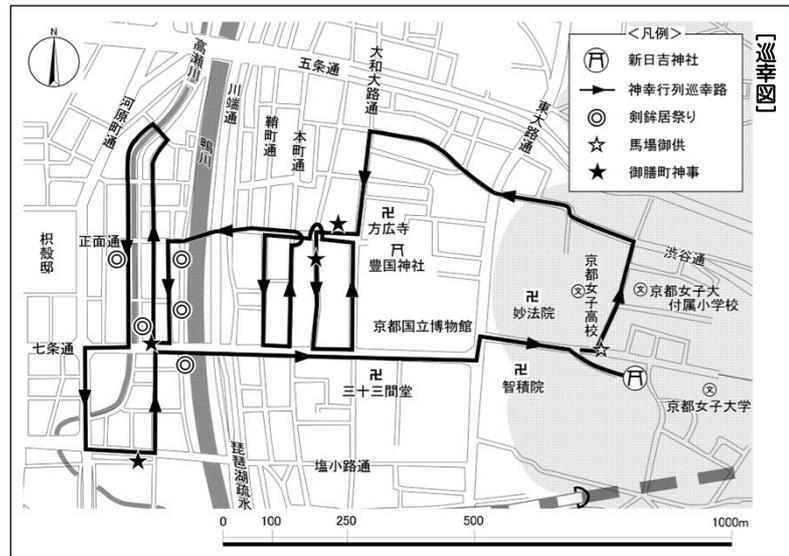
祭礼次第

祭礼の準備は、前日の午前九時半頃から新日吉神宮境内で行われる。道具類の蔵出し、神輿・大鉾の飾りつけ、清掃などである。平成二十二年より巡幸で劍鉾を差す（ここでは振ると呼ばれる）ようになり、劍鉾の仮組みも前日に行われるようになった。準備には各組の関係者多数が参加しているが、劍鉾の組み立ては当番町である貞教組の男性六名（平成二十三年の場合）が担当した。

鉾差しに使用する劍鉾は、もともと日吉町保管の第六番鉾（十禰師御鉾）であるが、組み立て作業は日吉町だけでなく、その年の当番町全体の人々があたる。ただし前日の準備では日吉町の鉾は完全には組み立てず、最終的には小五月会当日の朝、「劍鉾会」のメンバーが行う。当番町の男性たちは、小学校のころ差しているのを見た程度で、微妙なぐらつきなどは差す人間でないとわからないという。

劍鉾が組み上がると、すぐに清祓が新日吉神宮本殿前で執り行われる。神事中の劍鉾は、棹を付けず鉾頭を台の上に乗せた状態で、本殿下に安置されている。神事は、祓詞↓修祓（鉾↓参列者の順）↓祝詞↓玉串奉奠（氏子総代）↓鉾頭を台から外して脇に下ろす↓神事再開、修祓（本殿↓参列者）↓祝詞の順で行われる。神事終了後は、鳳輦・大鉾・獅子などとともに拜殿に安置される。

神幸祭の前日の午後一時頃から、神職二名が各町を巡回する。巡回先は、鉾の居



馬場御供 (中尾芙美子, 平成 23.5.8)

祭りの飾りつけをしている町、および翌日の巡幸行列が立ち寄る祭壇の飾りつけをしている町である。平成二十四年(二〇二二)の場合、神職一名は稲荷町↓下二ノ宮町↓下三ノ宮町↓崇仁組の順、もう一名は大宮町↓上二ノ宮町↓鍵山町・十禅寺町↓八王子町・新日吉町の順で巡回した。各町での神事は通常の祭式にのっとり、祓詞↓修祓(祭壇方向↓神饌↓参列者の順)↓祝詞↓玉串奉奠(神職↓参列者の順で行われる)。

小五月会の当日は、まず午前九時半頃より、「剣鉾会」の三名の手で、境内で剣鉾が最終的に組み立てられる(後述)。これに並行して、稚児大将・稚児武者大将の社参がある。稚児四名が集合したあと、本殿内で、祓詞↓修祓(玉串↓稚児↓参列者の順

焼香、妙法院門跡様御法楽、撒饌の順で行われる。この間、神幸行列は路上で待機し、馬場御供の終了と同時に出発する。

氏子区域を巡幸する際、その年の当町に立ち寄って神事が行われる。各当町では祭壇をしつらえ、前日に神職のお祓いを受けている(先述)。平成二十四年は、西常磐町御膳町神事、芳野町御膳町神事、下三ノ宮町御膳町神事、崇仁組受け所神事(塩小路通沿いのおい鯉)の四か所で行われた(地図★印)。地点は毎年固定しているものもある。神事は、宮司が到着し、鳳輦を祭壇前の所定の位置に止めたあと、献饌(各町の関係者による)↓祓詞↓修祓(鳳輦↓玉串↓町の人の順)↓祝詞奏上↓玉串奉奠(祭主↓関係者の順)↓撒饌の順で行われる。神事が済み次第、飾りはすぐに片づける。

↓祝詞奏上↓玉串奉奠(稚児四人)↓撒饌の順で神事が行なわれ、稚児に御守が授与される。平成二十四年の稚児は石垣町一名・東常磐町一名・西常磐町一名・芳野町一名で、その他の稚児二十六人とあわせて合計三十名が修道学区から出された。

境内では、剣鉾の組み立てのあと昼休憩を挟み、正午から神幸出立祭が拝殿前で執り行われる。神事は、参会者・神職らの整列のあと、祓詞↓修祓(拝殿正面↓神饌↓神職↓参列者全体の順)↓献饌↓祝詞↓玉串奉奠(神職)↓山王総本宮による桂の奉納↓氏子総代による献酒札の奉納↓撒饌の順で進められ、十分ほどを要する。この間、剣鉾は拝殿前の所定の位置に立てられ、「剣鉾会」の三人が支えている。

神幸出立祭が終わるとすぐに神幸行列が出発するが、ほどなくして馬場御供とよばれる神事が僧侶を交えて執り行われる。妙法院は後白河法皇の開基になる門跡寺院で、代々新日吉別当に任じられてきたことから、神仏分離を経た今日でも馬場御供の儀には門跡が参列し、御法楽を修する習いになっている。地点は新日吉神宮参道入口の路上で(地図★印)、まず妙法院より僧三人が到着したところに、出立祭を終えた祭主が加わる。神饌など儀式に必要なものが入った唐櫃を神職が神社から運び、鳳輦が神事地点に着いたところで開始となる。神事は、献饌(鳳輦の前の八足に、祭主祝詞奏上、

午後五時頃、御鳳輦が神社へ還御してくる。境内で火をまたぎ、拝殿裏へ回る。ご神体を人目に触れないようにするための傘に下がりをつけた錦蓋を鳳輦に接して安置すると、宮司が錦蓋の中に体を入れて神体を取る。神職が大きないひつゝの声をあげ、それに先導されて宮司が錦蓋に体を隠した状態のまま、本殿まで敷かれた布の上を歩いていく。宮司は本殿に上がり、神体を安置する。つぎに本殿内で神事が行われる。宮司による神事の説明のあと、祓詞↓修祓↓献饌↓祝詞奏上↓玉串奉奠（神職、稚児大将、氏子総代ら）の順に進められ、最後に神職が本殿前から人名の札の付いた三方を持って下り、それぞれの子供に渡したところで終了となる。

行列次第

平成二十三年の祭礼行列は以下の順で構成された。

先振れ（先駆） 劍鉾組総代 先太鼓 — 先頭列（祭礼幟組総代 神宮旗 神宮高張 大麻 大麻付朱笠） — 獅子列 — 菊浜列（猿田彦神輿 神饌唐櫃 菊浜組総代） — 崇仁列（崇仁組旗 崇仁組高張 崇仁組竹引 崇仁組総代） — 幸御鉾列（貞教組旗 貞教組高張 幸御鉾 町代表） — 大神列（竹引 大神 町代表） — 大太鼓列（大太鼓 町代表） — 武者稚児列（婦人 稚児 保護者） — 大将列（武者大将 保護者） — 御神宝列（神宝盾 盾付朱傘 手鉾 神宝弓 弓付朱傘 神宝矢 矢付朱傘 — 神宝剣 剣付朱傘） — 楽列（宍鼓 荷太鼓 楽人） — 鳳輦前列（紫翳 隨身 綱） — 鳳輦列 — 鳳輦後列（綱 隨身 膏鬘） — 錦蓋菅蓋列（錦蓋 鸞鳥 膏蓋） — 宮司 — 役員列 — 伴走車（平成二十三年五月八日付「平成二十三年度新日吉神宮神幸祭行列書」による）

劍鉾の神幸列への参加は、昭和三十年代までに順次中止され、各町の居祭りとなっていたが、平成二十二年より一基の劍鉾差しが復活している。

由緒と歴史

永暦元年（一一六〇）十月十六日、後白河法皇の院御所、法住寺殿の鎮守として、近江国日吉社（現大津市）から勧請された『百練抄』など。社地は現在より南方の今熊野瓦坂にあったと推定されているが、明暦元年（一六五五）までには智積院の北に移り、現在地に社地が確定したのは明治三十年代である『京都市の地名』『新日吉神宮略史』（以下、本書は『略史』と略記）による。

小五月会は、勧請後まもない十二世紀の日記類に五月九日の祭りとして記事がみ

え、競馬・流鏑馬や種々の芸能が催されている。近世には四月三十日↓五月九日（明和五年）↓五月十四日（天明元年）と変遷し、その後も維持されてきたが、昭和三十八年に神幸祭の日程変更に関する氏子のアンケートをもとに協議の結果、五月第二日曜日に変更となった『沿革』五十八〜六十九ページ。

小五月会における当町の制度には次のような変遷がある。寛保三年（一七四三）、神輿一基が四十五か町へ永代預けられ（寛保三年四月「新日吉御神輿当町預り請書」『略史』九十四〜九十七ページ）、翌延享元年には、数か町を一グループとして十年周期で順番が定められ、この順で御輿当町を務めることになった（延享元年四月晦日「毎年当町番定」『略史』九十七〜百ページ）。明和元年（一七六四）からは各グループが造物（つくりもの）当町も務めることとされ、年々趣向が凝らされたが、明治三年（一八七〇）、経費の關係で造り物は中止された『略史』百一〜百三十一ページ。

さらに明治七年（一八七四）に神事見習当町の順番を定め、一か町ごとに当町にあたることとして、二十七か町の順が定められた『略史』百三十一〜百三十二ページ。これは見習当町として幸御鉾を捧持して供奉し、その翌年に神事当町として大神を中心には大太鼓・武者稚児・奴などの行列を立てて供奉するという方式であったという『略史』百三十二ページ。この一か町当町制は昭和二十三年（一九四八）まで続けられたが、昭和二十四年からは五か年輪番制となり、修道と貞教の両当町組を五班に分け、修道三回、貞教二回の五年一サイクルによる運営となった。その後、修道と貞教の交替サイクルはその都度見直しが行なわれ、現在に至っている『略史』百三十二〜百三十三ページ。

② 劍鉾と組織

新日吉神宮小五月会では、近世以来、第一番鉾から第七番鉾まで七基の劍鉾が各町で管理され、祭祀に供奉してきた。もとはすべて差し鉾で、近世中期にはこの七基が祭祀前に「くじ取」で順番を決めていたことが知られている（福原敏男「近世新日吉社劍鉾祭り」二十八ページ）。

現存する鉾の歴史について、『略史』には「毎年五月、新日吉小五月会、神幸祭礼を齎行するに当り、畏くも禁中より女房奉書を下され執り行われる例であるが、今度新日吉七柱の大神に、夫々威儀のものとして、寛政四年より十一年に至る間に禁裡御所を始め、仙洞、女院及び、中宮の各御所より七本の振鉾、並びに吹散が御寄進せられ、特に日吉社の社名を町名に戴く、菊浜学区の産土町に保管せしめられ、年々の神幸列に供奉するよう、仰せ下された」(二二ページ)とある。寄進年と寄進者をまとめると以下のとおりである『略史』(二二～二三ページ)。

- | | |
|--------------|---|
| 第一番鉾 (大宮御鉾) | 獅子牡丹紋、大宮町保管、寛政四年五月禁裡御所・女院御所御寄附 |
| 第二番鉾 (二宮御鉾) | 立葵紋 下二之宮町保管、寛政六年五月中宮御所御寄附 |
| 第三番鉾 (聖真子御鉾) | 菊橘紋 上二之宮町保管、寛政八年五月仙洞御所御寄附 |
| 第四番鉾 (八王子御鉾) | 菊紋、八王子町保管、寛政九年五月禁裡御所御寄附 |
| 第五番鉾 (客人御鉾) | 竜三本杉紋 稲荷町保管、寛政十年五月中宮御所御寄附 |
| 第六番鉾 (十禪師御鉾) | 牡丹輪宝、日吉町、寛政十一年五月禁裡御所御寄附 |
| 第七番鉾 (三宮御鉾) | 菊桐鳳凰紋、五か町 (聖真子町・岩滝町・早尾町・波止十濃町・八ツ柳町) 保管、寛政十一年五月、禁裡御所外御所々々御寄附 |

このように現在の新日吉神宮小五月会の七本の劍鉾は、いずれも寛政年間に相次いで寄進されたもので、同年にはそれぞれ吹散も寄進された記録がある。小五月会の祭礼は、これに先立つ天明年間以来、女房奉書を賜って執行する習いとなっていたことが劍鉾寄進の背景にあるものと考えられている(『福原敏男「近世新日吉劍鉾祭り」二十九ページ)。後述する箱書等からみても、劍鉾が一貫して「御所寄附」という朝廷権威を体現するものとみられていたことは想像に難くない。

このほか八王子御鉾では、寛政八年四月、劍鉾の作り替えに合わせて銚受(額に彫り込む銘の染筆を妙法院一品真仁親王より賜っており、現在の鉾の銚受にも「新日吉大権現」(表)、「寛政八辰年四月廿七壬寅日／一品親王書」(裏)の銘がみえる。

同様に文化四年三月には、大宮町が閑院一品彈正尹宮美仁親王から、やはり鉾の額の神号の御染筆を賜った記録がある(以上、寛政八年五月「御鉾御額御染筆一件」新日吉神宮文書)。

これらの鉾の中で、平成二十二年より差し鉾として出されているのは第六番鉾(十禪師御鉾)の一本である。新日吉神宮の鉾差しは約五十年間中断していたが、平成二十二年以後は、平成二十三年、二十四年にも継続されている。

このほか第四番鉾(八王子御鉾)は居祭り町内の曳き鉾巡行に供されているが、第一番鉾(大宮御鉾)・第二番鉾(二宮御鉾)・第五番鉾(客人御鉾)は各町の居祭りのみである。第三番鉾(聖真子御鉾)は紛失して久しく、第七番鉾(三宮御鉾)は管理・祭祀とも途絶している。

鉾を差すのは「劍鉾会」のメンバー三名によって行われる。「劍鉾会」とは、外部から来る鉾差しの集団を指す地元と呼称であり、実際にはそのような組織は存在していない。鉾差しの手配は毎年、東山系の鉾差しを束ねている人物の一人である藤田造園の藤田修氏に依頼し、その差配で一乗寺劍鉾保存会の大西邦夫氏らが派遣されている。

当日の朝、「劍鉾会」のメンバーは最終的な組み立てを行い、出立祭から神事に参加する。鉾の組み立てに使用する劍挟の竹など、一部の材料はメンバーが持参する。衣装は新日吉神宮には備えられていないので、栗田神社のものを使用する。鉾は、馬場御供の催行時から還御後の拝殿裏まで適宜繰り返し差され、平成二十三年には計三十九回、鉾が差されている。ただし巡幸中、居祭りを行っている劍鉾については、そこに行列が立ち寄るといったことはない。

これらの鉾町で、もともと鉾を差していた時期は一定していないが、大宮町(第一番鉾・大宮御鉾)の場合、昭和三十六～三十七年頃、一乗寺の人に差しくれるよう頼みに行ったのが最後である。下二之宮町(第二番鉾・二宮御鉾)では、戦前までは、祭礼当日に鉾をたずさえて巡幸に加わっていた。町の者が袴を着てお供としてつき、吹散の箱も持って行った。稲荷町(第五番鉾・客人御鉾)でも、昭和二十七～二十八年頃までは行列の時に鉾を差していたという。



第一番鉾 (村上忠高, 平成 24.5.12)

概要

第一番鉾 (大宮御鉾) (大宮町)

現在は居祭りのみ。『沿革』によると、「新日吉祭礼には、寛政四年五月、禁裡御所及び女院御所より御寄附の振鉾「第一番鉾」、大宮御鉾(獅子、牡丹)や、見送り籠を町内に保管せるを、毎年祭礼の際、第一番鉾として、七本(百吉七柱大神)の鉾の先頭に供奉することになっている(四十ページ)とある。

飾られた剣には「昭和三十一年申年五月吉日新調」、倉庫に保管されていた留守鉾の剣の茎には「昭和九戌年拾月吉日新調 大宮町」の銘がみえ、剣を納める箱の裏書には「明治四拾四年五月拾四日調之 大宮町」とある。

大宮町は戸数三十三軒(以前は四十軒)ほどで、全戸が新日吉神宮の氏子である。飾りの道具は、トンネル状の路地口二階にある町内の倉庫で保管され、「こ本体」(小さな神棚状のもの)のみ町内の一軒で預かってお守りしている。普段は水と榊を、一日と十五日には洗い米と盛り塩をお供えする。お飾りをする際には正面の観音開きの扉を開けるが、内部を見たことはないという。吹散のことは「見返り幡」といい、鉾には付けず、毎年屋内に飾る。剣は他にもう一本が倉庫に保管されている。棹の所在は不詳。

鉾祭りの次第

飾りつけは、町内の丁氏が長く町会長を務めている関係で、毎年、同家の表座敷と土間を利用して。平成二十三年は、祭りの前々日の午前中、丁氏宅にて、鉾

の組み立てや神饌の準備が行われた。祭りの飾りの道具を倉庫から出すのは町内の男性で、飾りつけは一時間ほどかけて町内の女性三〜四名が担当した。神饌として、塩、米、水、餅、りんご、バナナ、柑橘類、かまぼこ、なす、きゅうり、人参、大根、キャベツ、するめ、海苔、高野豆腐などを供える。飾りつけは、二十年くらい前までは町内の家で持ち回りしていた。玄関があつて人や物の出入りがしやすい家が適しているが、家屋の構造などが変わり、他に飾る場所がなくなっているのが現状である。

前日の午後に神職を迎えて前日祭が執り行われる。平成二十三年の前日祭への参加は町会長・組長ら五名ほどである。当日の神幸列と鉾町との関わりは特になく、祭りの行列が通つたら片づける。

概要

第二番鉾 (二宮御鉾) (下二之宮町)

現在は居祭りのみ。『沿革』によると、「新日吉社祭礼には、寛政六年五月、中宮御所御寄附の振鉾、第二番鉾即ち二宮御鉾(立菱)及び吹散を捧持して、毎年供奉をして来たが、近年鉾指の不如意の為か、町内にて飾り居祭をしている」『沿革』三十六〜三十七ページとある。

下二之宮町の軒数は二十三軒ほどである。かつて道具類は町内の家々に分散して保管されていたが、マンションへの建て替えなどで古い町家が解体されるにつれ散逸したため、現在は例年町内のH家ですべて預かっている。棹は失われている。

鉾祭りの次第

平成二十三年は、前日の午前中、H家で、町会長・組長三名および有志らにより、鉾の組み立てと神饌の準備が行われた。飾りつけは例年、H家選ばれている。お供えとして、にんじん、さつまいも、大根、昆布、干しいたけ、するめ、高野豆腐、ポンカン、紅白の餅、バナナ、赤飯、塩、水を準備し、祭礼後は町内で分配する。前日の午後に神職を迎えて前日祭が執り行われる。終了後に親睦会がもたれる。当日の神幸列と鉾町との関わりは特になく、神幸列が橋本家の前を通り過ぎたらす



第二番鉾（佐藤直幸，平成24.5.13）



第三番鉾（村上忠喜，平成24.5.12）

ぐに片づけを始める。

第三番鉾（聖真子御鉾）（上二之宮町）

概要

劍鉾は明治期に紛失しており、神社の蔵の天井に棹のみ保管されている。現在は鉾なしで祭壇を組み、居祭りをしている。紛失の時期は明治十年代とも、蛤御門の変で焼失かともいう。『沿革』には、「新日吉祭礼には、寛政八年五月、仙洞御所御寄進の振鉾、即ち第三番鉾、聖真子御鉾（菊、橘の紋様）を差しながら供奉していたのであるが、明治の初期紛失せしに依り、今は真榊一対を捧持して、お供している」（三六ページ）とある。

第四番鉾（八王子御鉾）（八王子町）

概要

曳き鉾として町内のみを巡行する。『沿革』によると、「新日吉祭礼には、寛政九

年五月、禁裡御所御寄附の振鉾、第四番鉾なる八王子御鉾（菊）及び見送り旗を奉じて、神幸列に供奉していたが、昭和の中頃、鉾の棹を切りて台鉾となし、今は車を付けて新日吉町と交代にて祭礼にお供している」（三八ページ）とある。ここで台鉾とあるのは、曳き鉾のことである。

道具を納めた箱の一つに「妙法院一品親王御筆／寛政八丙辰四月廿七日」（蓋裏、吹散箱に「仙洞御所御寄附」（蓋表とある。このほか前述のとおり、鋳受（額）には「新日吉大権現」巻、「寛政八辰年四月廿七壬寅日／一品親王書」（裏とある。御神体の掛軸にも「寛政八辰年四月廿七壬寅日 一品親王書」とある。鉾の台車には「昭和三十五年五月 前川金属謹呈」とある。

鉾の管理や曳き鉾の巡行は、新日吉町と八王子町の二町が共同で行なっている。現在、両町とも戸数三十軒ほどを数える。鉾の台車は町内の一軒のガレージで保管している。箱の保管は、一番から十番までが新日吉町、十一番から十五番までが八王子町である。八王子町では以前は各戸で分担していたが、現在はトンネル状の路地口二階を倉庫としている。ただし劍鉾の保管は交替ではなく、八王子町の側で担当している。

鉾祭りの次第

平成二十四年は、前日の朝七時から、新日吉町のM氏宅で鉾の組み立てや神饌の準備が行われた。作業は八王子町と新日吉町両町が協力し、両町の町会長と組長、そのほか手の空いている人々によって行われる。ほかに屋形（劍鉾をのせる台車のこと）の四隅につける御幣を作る。台車はもと木製、現在は金属製である。

祭りの費用は、八王子町と新日吉町とで折半する。飾りつけは一年交代で、場所は各町ともだいたい決まった家を選んでいく。新日吉町では、改築などで適した家が少なくなり、ここ二十年ほどは敷地の広いM氏宅に落ち着いている。八王子町でも、もとは別の家であったが、平成二十一年からはK家に飾りつけをしている。

祭壇の最上段には「新日吉大権現」と書かれた少祠を祀り、祭壇向かって左側に鉾、右側に菊の紋の入った旗と竿（鈴が付く）を置く。神饌の内容は塩、水、米、りんご、バナナ、にんじん、なす、紅白の餅、昆布、大根、するめ、甘夏などである。



第四番鉾（長谷川燐悟 平成23.5.8）



第五番鉾（内田みゆ子 平成23.5.7）

概要

現在は居祭りのみ。『沿革』によると、「新日吉祭礼には、寛政九年、禁裡御所よ

前日の午後には神職を迎えて前日祭が執り行われる。平成二十四年の前日祭には、八王子町と新日吉町両町の町会長、組長、および有志の者が参列した。祭礼当日は、まず午前八時ころ、お飾りをしている場所の前に大人たちが参集する。呼び込みの鉦を鳴らして回り、子供たちも参まってくる。鉦を台車に乗せ、十一時ころ巡回に出発する。子どもが引つ張って、西木屋町通りを往復する形で八王子町・新日吉町を回る。もとの地点に戻ったところで子供たちが解散、続いて大人たちも解散する。

当日の神幸列と鉦町との関わりは特になく、居祭りの飾りは午後三時半ころ、行列が七条通りを通過したところで片づけを始める。

第五番鉾（客人御鉾）（稲荷町）

鉦祭りの次第

平成二十三年は、前々日と前日午前、稲荷神社の社務所で、役員の女性二名によって神饌の準備などが行われた。鉦頭は屋内ではなく、鳥居の柱の脇に安置する。昔は吹散を社務所で飾ったこともあったが、ここしばらく出していない。社務所では、祭壇の最上部にオヤシロを飾り、お供えとして山の幸（バナナ、みかん、大根、なす、にんじん、高野豆腐）、海の幸（ずるめ、昆布、ちまき、酒をあげる。尾頭付きの鯛、紅白の餅は、新鮮さを保つため還幸祭の当日に用意する。神は新日吉神宮より持つてくる。神の水は境内の手水から汲む。還幸祭が終わるとこれらを氏子で分配する。

前日の午後には神職を迎えて前日祭が執り行われる。当日の神幸列と鉦町との関わりは特になく、神幸列が神社の前を通り過ぎると片づけを始める。

り御寄附の振鉦「第五番鉦」客人御鉦（三本松）並びに吹流しを当町内に預けられしを、捧持して毎年神幸の行列に供奉している」（三十九ページ）とある。

鉦の茎に「寛政戊午十歳」の銘がある。箱の一つに「禁裏御所御寄附」蓋表、別の箱に「寛政四年／壬子五月吉日／年寄 大兵衛／五人組 庄兵衛」（身・外底、「龍御鉦」（側面）とある。

稲荷町の氏子が多いときで四十軒余り、現在は二十軒ほどになっている。飾りつけするのは鉦頭だけである。棹は稲荷神社の社務所の軒先に置いてある。鈴は所在不詳。



第六番鉾（渡部圭一、平成23.5.8）



第七番鉾（原晃、平成23.5.7）

第六番鉾（十禅師御鉾）（稻荷町）

概要

差し鉾として神幸列に参加する。『沿革』には、「江戸後期、寛政時代に、禁裡御所御寄附の振鉾を町内預りとして、毎年祭礼に供奉している」(二三ページ)とある。平成二十二年から差し鉾を再開して現在に至っている(前述)。

吹散箱に「禁裏御所御寄附」(蓋裏、剣箱に「明治三十三年五月」身・内底、ほかに箱の墨書として「寛政九巳年 川東／日吉町」など)とある。

もとは町内、現在は神社倉庫にて保管する。

鉾祭りの次第

当屋飾りは行なわれていない。祭礼前日の午前、当番地区の役員男性によって、神社境内の倉庫からの部品の取り出し、同じく境内の蔵から棹の取り出し、鉾の仮組み立て、および剣をお祓りする神事が行われる。当日の午前、最終的に「剣鉾会」のメンバーによって組み立てられる。

巡幸行列における位置、鉾差しの実態については先述参照。

概要

第七番鉾（三宮御鉾）

（もと五か町：聖真子町・菟瀨町・星尾町・波止土濃町・八つ柳町）

巡幸への参加や飾りつけは中止。『沿革』には、「寛政十一年五月、禁裡御所外、各御所より新日吉社に御寄進になった振鉾及び吹散を、上記聖真子町より岩瀨町に至る五か町に預けられ、毎年祭礼には之を捧じて輪番で供奉することになった。此の鉾は第七番鉾で、三宮御鉾と称し、菊桐鳳凰の模様の飾金具が附けられている」(三十四ページ)とある。

鋳受に「新日吉大権現」(裏、剣箱に「天保十三壬寅年 五月中旬／町作事 大工利助」(蓋裏、「早尾町／米屋源兵衛寄附」(身・内底)とある。このほか箱の墨書として

「吹散入／七條新地／五町組」などとある。神社倉庫に梱包保管されている。

（渡部圭一）



巽組十二灯巡行 (村上忠喜 平成 17.5.8)



西濱組船鉾巡行 (村上忠喜 平成 17.5.8)

③ その他の鉾

鉾鉾ではないが、下京区崇仁地区より新日吉神宮の祭日に曳き出される祭屋台として、船鉾と十二灯がある。同地区では現在、船鉾二基、地元でダンジリと称する十二灯一基を所有しており、現在の新日吉神宮の祭礼日に合わせて、西濱組船鉾と巽組十二灯の二基が崇仁の地域内を巡行する。そのルートは毎年微調整されるが、おおむね午前中にJ R東海道線軌道南側の南部地域を巡行し、午後には軌道より北側の北部地域を巡行するというものである。鉾には子供たちが乗り込み、鉾上でお囃子を奏でる。また鉾の周りでは、六斎念仏で使用されていた豆太鼓で拍子を取りながら随行する子供たちの姿もみられる。こうしたにぎやかな巡行は、「崇仁春まつり」として、平成十年に再興されたもので、いわば新日吉神宮の付け祭りといえるものだが、実際のところ、新日吉神宮本体の祭礼行列とは連動していないように見える。新日吉神宮の祭礼行列は、先述のように、この日の午後遅くに、「うるおい館」

に神輿が到着すると、そこで神事が行われるのみである。「うるおい館」のエントランスには祭壇が設けられており、これを崇仁組受け所という。

さて、これらの祭屋台のうち二基の船鉾は昭和三十年代後半以後、十二灯はアジア太平洋戦争がはじまってから以後中絶していたものであり、現在みられるのは、地元有志が中心となって、かつて使用されていた木彫や金工品などを利用して復原されたものである。復原は段階的に行なわれ、平成十年に西濱組船鉾、続いて巽組十二灯、碓組船鉾の計三基が復原された。

現崇仁地区は、明治二十二年（一八八九）の町村制によりできた柳原町にほぼ該当する。柳原町は、本郷、六条村（七条郷）、水車村（七条裏）、銭座跡村（八条七、六条村大西組（小堀郷）の五つの集落に分かれていた。本郷以外の四集落はそれぞれ移転により成立したが、その経緯は次のとおりである。

- 六条村 松原東洞院の集落が、寛文三年（一六六三）六条河原へ移転し、さらに正徳三年（一七一三）に七条以南の高瀬川流域に移転し、六条村となる。
- 水車村 正徳三年に、南京極町高瀬にあつた集落が、七条大橋西南へ移転して水車村となる。
- 銭座跡村（元銭座村） 享保十六年（一七三二）に、天部・六条両村の申し出により住宅地として開発された。
- 六条村大西組 天保十四年（一八四三）に天部村によって開発された。

これらの集落の移転を進めた開発は、いずれも妙法院の関与が大きい。妙法院は、新日吉神宮の再建（明暦元年（一六五五）に完成）をはじめ、三十三間堂や方広寺といった近辺の宗教施設の管理を行っていた。そのことから、崇仁地区の人々は、自らを新日吉神宮の氏子であると自認していたようである。

現在の祭屋台の初発は、提灯台、いわゆる十二灯であったと推測できる。天保十年（一八三九）に、元銭座村および同村南組から妙法院に対して、新たに造った五基の提灯台を新日吉神宮の祭礼当日、村内に限り曳き廻ることについての許可願

が出されている。それによれば、提灯台はいずれもほぼ似通った形状であったようで、約一メートル四方の台の上におそらく複数の横木のついた柱が立ち、横木には合計十二張の提灯と、四から八個の鈴をつけ、「新日吉」と記された横長の扁額を掲げ、柱の先に花傘や瓢箪、神楽鈴、籠傘といった頂花を飾った〔早稲田太字所蔵「万広寺関係文書」〕。元銭座村は南北に分かれ、北は中組、東組出村、西組の三組に、南は西組、東組の二組の計五組に分かれていた。この組はおそらく近隣組的なものであったと推測できるが、それぞれが提灯台を出仕したのである。

戦前には、十二灯は異、夕顔、竹馬の三基と、それ以外に名称不詳のものが一基、計四基あったと伝えられている。復原にあたっては、これら四基の残された部材を利用して、異組の十二灯一基が復原されたという。

一方、船鉾は、伝承によれば明治初期に作製されたといわれ、実際に船鉾の部材と考えられる金工品に明治前期の銘が入るものがあるもの、定かではない。先述のように船鉾は現在、西濱組船鉾と碓組船鉾の二基存在するが、前者は下之町、後者は西之町の所有であったと伝えられているものの、いつどのように作製され、伝承されてきたかについては明確にし得ないのである。

昭和五十六年（一九八一）に京都市史編さん所が行った聞き取り調査の記録である「崇仁学区座談記録」には、地域の古老の方々の記憶から、その当時まだ復興していなかった崇仁の祭礼について記載されている。それによれば、ダンジリは、下之町西部と車之町にそれぞれ一基、西之町に二基の計四基あったこと。船鉾は十二日に組み立て、十三日が宵宮、十四日が本祭りで、十四日の夜にはお地藏さんの前で屋台を組み、ロクサイバヤシ（六斎囃子）をしていたこと等が語られ、ダンジリと船鉾は明治後期か大正期頃には、同時に出土されていたようである。

碓組船鉾の木組み底部の板材に、大正四年（一九一五）十一月吉日の年号と、「碓組若中」として十九名の人名が墨書されている。この連署が何を意味しているのかは不明であるものの、少なくとも大正四年には「碓組若中」という祭礼組織が存在していたことは確かである。また明らかに西濱組の船鉾の装飾品とわかるものについては、昭和初期のものが多い。船鉾は碓組が先行し、後により大型の西濱組の船

鉾が作られたと考えるのが妥当であろう。

船鉾、十二灯とも、崇仁南部地域を中心に出仕されていた可能性が高いものの、伝承母体の変動が激しい上に、祭礼自体がたびたび中絶し、どのように引き継がれてきたのかを復原することは至難である。現存する遺品類も、復原に際して加工して再利用されており、それぞれの時期の復活に際してそれ以前の部材がどう使われていったかが不分明であることも、今となつては祭礼の歴史を知る障害となっている。ただし、装飾品それぞれの造作は、同地区の祭礼に対する強い意識を示す遺品であることに違いはなく、平成十八年に「崇仁船鉾・十二灯装飾品」として、京都市の有形民俗文化財に登録されている。

（村上忠喜）

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

藤島益雄著『新日吉神宮略史―神殿・社宝・祭礼・行事並に由諸記』（新日吉神宮、一九七二年）

藤島益雄編『新日吉神宮氏子地沿革と古式祭』（新日吉神宮、一九七六年）

福原敏男「近世新日吉社劍鉾祭り―御所ブランドの飾り―」（『京都市の文化財』第二十三集（同書の翻刻された近世史料に劍鉾関係史料あり））

京都市文化観光局文化財保護課『崇仁地区祭礼調査概要』（一九八四年七月）

山王神社 大祭

毎年五月第二週日曜日

山王神社（清閑寺山王神社）

京都市東山区清閑寺池田町

① 祭礼と由緒

地域の概要

氏子地域は清閑寺池田町（以下、池田町）の一町、九十九軒となる。そのうち八十数軒が神社奉賛会に入り、祭礼を運営している。五条バイパスが全通する昭和四十二年（一九六七）頃までは、東隣の清閑寺山ノ内町（以下、山ノ内町）も氏子地域であり、祭礼の際には神輿が山ノ内町内の清閑寺前まで出ていた。しかし、バイパスの開通によって、清閑寺など山ノ内町の多くはバイパスを挟む形となり、神輿巡幸が難しくなった。さらに山ノ内町内の戸数も年々減少していったことから、池田町一町のみが氏子地域として祭礼を担うようになったという（祭礼時に設置される境傍示の櫛〔氏子地域の境界を示す櫛〕も池田町のみ）。

神社奉賛会の運営費は、加入者からの寄附（二か月あたり一口「百円」以上）で賄っている。ただし、大祭などの運営費は、別途町内からも助成金が出るほか、祭礼ごとに寄附も募っている。また、奉賛会運営の中心となる神社役員は、平成二十三年（二〇一一）から従来の固定化を改め、奉賛会加入者が順繰りに務めるようになった（平成二十四年現在、神社役員は七名。うち三名は女性）。

また、神社奉賛会とは別に、池田町寿敬会（老人会）が毎月一日と十五日に神社境内の清掃を行っている。今回の大祭にあたって、寿敬会が自主的に参集殿のお守りをするなどしている。

なお、山王神社の参集殿は、町内会の集会所としても機能している。ただし、町内の方の信仰上の問題もあるため、神社の鳥居をくぐらなくても参集殿に入れ

るよう、工夫がなされている。

祭礼次第

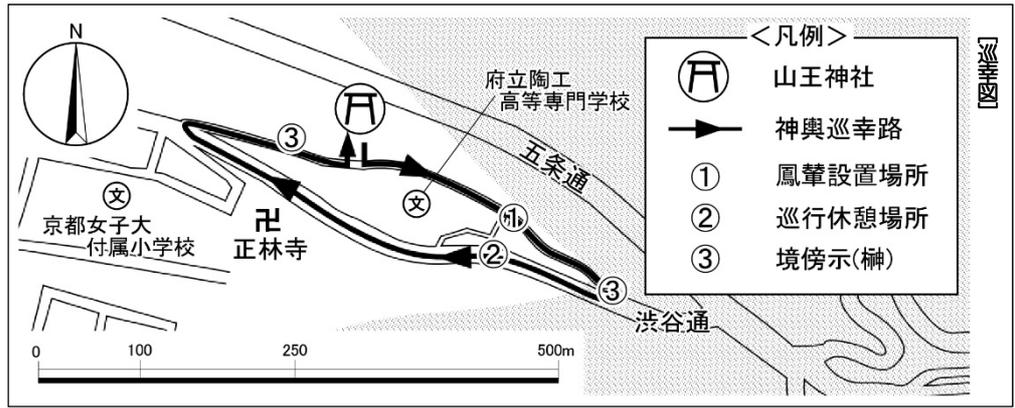
平成二十四年（二〇二二）は、前日祭が五月第二土曜日である十二日に、大祭が翌十三日に行われた。

前日祭は午前九時頃から神社役員らを中心に十数人の氏子によって準備が進められる。まず、参集殿内にある倉庫から祭礼道具を出し、境内に飾り始める。昼前にその作業を終えると、参集殿内で昼食を取り一時解散する。そして、午後五時頃から氏子は再び境内に参集し始め、午後七時から境内にて神事（祓詞・修祓・祝詞・玉串奉奠・稚児授位）が執り行われる。その後、稚児を先頭に町内の子供（外孫含む）による「お迎え提灯」と呼ばれる提灯行列が行われる。この「お迎え提灯」は氏子地域である池田町内を一周するもので、翌日の神輿の巡幸のルートと同じである。「お迎え提灯」が終わると、神輿を含めた境内内の祭礼道具を再度片づけ、参集殿倉庫に入れる。ただし、「鳳輦（一剣鋒状の形態。後述）は、雨などが降らない限り所定の場所に置いておく（地図① 後述）。祭礼道具を片づけた段階で、参集殿で直会が始まる。

次に大祭当日であるが、前日祭同様、午前中から祭礼道具が出され、参集殿内の昼食をはさみ、午後一時から神幸祭が執り行われる（祓詞・修祓・祝詞・玉串奉奠・（神輿へ）御霊移し）。



山王神社所蔵の山王曼荼羅の軸
（鈴木耕太郎、平成 24.05.13）



神幸祭終了後、神輿の巡幸行列の準備が始まり、午後二時前から巡幸が始まる。この時、祭礼道具の多くを子供が持つ。なお、面などの老朽化により参列を見合わせていた「天狗」(サルタヒコ)が平成二十四年(二〇一二)は十数年振りに参列

この神幸祭に先立ち、正午前には神社役員により本殿・拝殿の開扉が行われる。また、献饌と同時に宮司が本殿に山王曼荼羅の軸をかける(写真参照)。詳細は不明だが、この軸は絵解き曼荼羅として用いられたと伝えられており、山王神社所蔵ではあるが、現在は管理を山科区の日向大神宮に依頼し、この大祭時に限り山王神社本殿に掛けられ使用される。



右から【幸鉾】二本、【天狗】(鉾を持つ)、【ホコ】二本 (鈴木耕太郎 平成24.5.13)

とこの保護者らがひく形態となっている。
由緒と歴史
 元禄年間(一六八八―一七〇三)成立の『山州名跡志』巻三には「清閑寺鎮守ノ社」として「祭ル所山王」とあり、「案ズルニ、當山初メ天台ニシテ山門ニ屬ス」とある。
 また、享保二年(一七一七)頃の成立といわれる『京都御役所向大概覚書』巻五には、「神輿之無し」「四月晦日神事、神幸之無し」と見えることから、神輿が作成されたのはそれ以降と考えられる。また同書では氏子の境について「南ハ妙法院御門跡領山を限、北ハ清閑寺領を限、東ハ山科花山村を限、西ハ大佛境内澁谷町を限」とあり、現在よりもやや広範囲にわたっていたと考えられる。
 さらに大正四年(一九一五)に刊行された『京都坊目誌』下京第廿八学区之部では、「始め天台清閑寺の鎮守として(中略)同寺境内にありしが、明治六年村

することとなった。この「天狗」は「ヤリ」と呼ばれる道具を持つ。巡幸は約一時間(途中で休憩も挟む)で町内を一周し、その後、すぐに還幸祭が行われ、十五分ほどの神事で大祭は終了する。「鳳輦」や神輿を含めた祭礼道具は、参集殿倉庫内に収納されるが、剣などの道具は簡単に片づけ、一週間後に磨いてから収納するという。収納後は、神職を囲み参集殿内での直会が始まる。
 なお、三十年ほど前から前日祭・大祭の神事は日向大神宮(山科区日向一切経谷町)の宮司と権宮司が行っている(それまでは山王神社住み込みの神職がいたという)。また稚児は、毎年子供会を通じて三歳以上の子供を対象に募集をかける。人数に制限はない。
行列次第
 巡幸行列は、神・御幣・太鼓・町旗・社旗・【幸鉾二本】・【天狗(サルタヒコ)・稚児・【ホコ】二本・弓四張・盾四枚・矢四束・神輿・神職(権宮司)の順で行われる(なお、「」は町内での呼称。【】は町内で呼称がないため、執筆者が補った)。神輿は台車に乗せられ、台車に括りつけた長い紐を子供

に列し、同三十四年現在の地に移す。(中略) 清閑寺町の産土神と爲す。」とある。また祭神についても、「祭神 大名牟遲命、國常立命、正哉吾勝々速日天之忍穗耳命、國狭槌命、伊邪那岐大神、瓊々杵命、惶根命」の七柱を祀っていると記されている(ただし、現在の神社の案内板に記されている祭神とは異なっている)。

② 劍鉾と組織

概要

山王神社のものは、「劍鉾」と称するに相応しいか、なお慎重な検討が必要である。過去に「差し鉾」として使用された形跡はなく、剣をしならせるような構造にもなっていない。また氏は、劍鉾を台車に載せ、剣を含めた台車全体を「鳳輦」と称しており、劍鉾、あるいは鉾といった認識はなく、あくまで神社所蔵の祭礼道具の一つと見なしている。ただし、構造上は剣や剣挟、鋸、鋸受、受金、吹散(氏は単に「鳳輦の蓋」と呼ぶ)などが一揃いある。京都の祭礼における劍鉾の影響力を検討する上では、この山王神社の「鳳輦」は興味深い考察対象であるといえよう。

なお、この「鳳輦」がいつ頃から祭礼に用いられるようになったか、など詳細は町内にも伝わっておらず、不明である。

トウヤ飾り

参集殿でのお守りはあるが、当屋制度そのものはなく、飾りもない。

(鈴木 耕太郎)



鳳輦 (鈴木耕太郎, 平成 24.5.12)



鉾頭 (溝辺悠介, 平成 24. 5.12)

菅大臣神社 例祭

毎年五月第二日曜日

菅大臣神社

京都市下京区菅大臣町

① 祭礼と由緒

地域の概要

社伝によると、菅大臣神社は菅原道真・尼神・大己貴命を祭神としており、鎮座地は菅原道真の旧宅（紅梅殿・白梅殿）や「菅家廊下」と呼ばれる学問所の跡であるとともに、道真生誕の地と伝えられる。仏光寺通りを挟んで北側には、道真の父である是善を祀る北菅大臣神社が鎮座している。

この地が菅家廊下の跡地であるかについては桃裕行により疑義が呈されているが（「紅梅殿と菅家廊下」、仏光寺通り北側の土地は、鎌倉期までには道真の旧宅「紅梅殿」跡地として、北野社領とされていた。鎌倉末期には、この地の施設を「聖廟在世之靈跡当宮最前之末社」である「紅梅殿社」とする北野社と、在地の敬神の族が維持していた「菅大臣社」とする地域住人との間で争論が発生したが、北野社側の主張が支持されて曼殊院門跡に継承されていく。その後、南北朝期になると、南側の土地が「白梅殿」と称されるようになる（桃裕行前掲論文）。

それが、十六世紀から十七世紀にかけて、北側の社が菅大臣社として広く認識される一方、「雨神」などと呼ばれた南側の社はほとんど知られていなかったとされる（桃裕行前掲論文ならびに村上紀夫「京都の町と神社」）。しかし、十八世紀に入ると両社の立場は逆転し、南側の社こそが菅大臣社とされ、北側の社は単に「天神」と呼ばれるようになったという（村上紀夫前掲論文）。また、このころになると、北側の社の祭神を菅原是善とする記述も見られるようになる。江戸期を通じて、天明八年（一七八八）と元治元年（一八六四）の二度にわたって大火に被災しているも

の、いずれも同じ位置に復興されている（桃裕行前掲論文）。

近代に入ると、神仏分離によって、明治三年（一八七〇）に曼珠院門跡から独立を果たし、南北両社ともに町預かりとなった。これ以降、南側の社が菅大臣神社、北側の社は北菅大臣神社として現在まで続いている。また、これと時を同じくして、菅大臣神社に賀茂社の社殿が移築され、本殿とされている。

現在の氏子地域は、菅大臣神社と北菅大臣神社の所在地である菅大臣町と、隣接する堀之内町、本柳水町の三か町である。

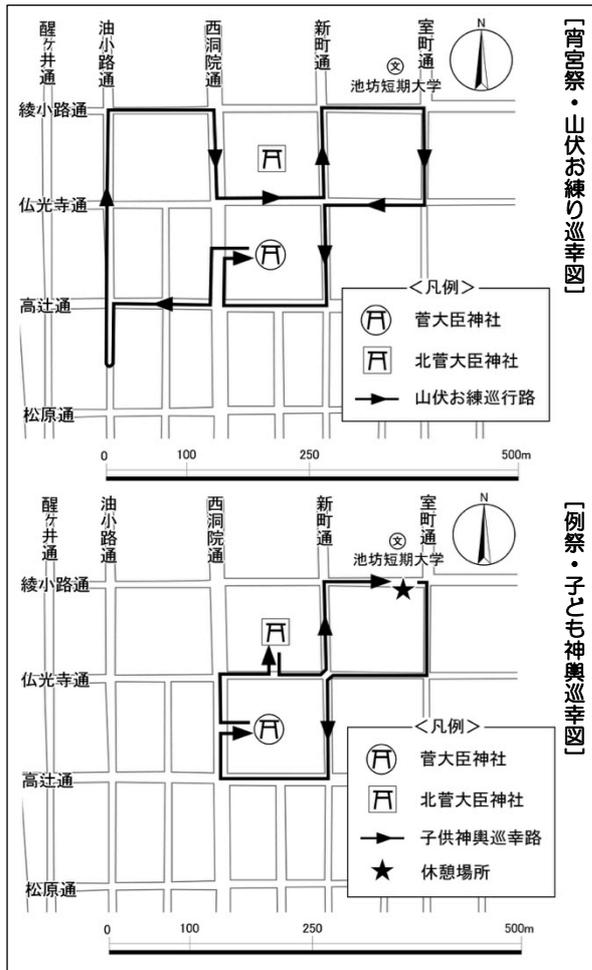
祭礼次第

祭礼の準備は、毎年五月三日に行われる。菅大臣神社の本殿内には主神である菅原道真と、その父是善の木像が飾られ、柱には観音を中尊とする懸仏が掛けられる。神輿と子供神輿は幣殿北側の一間に上げられ、飾り付けが行われる。二基ある劍鉾も組み立てられ、幣殿正面の両脇に安置される。いったん解散の後、午後七時半になると境内の照明がすべて落とされ、「御霊遷（おうし）」もしくは「おいで祭」と呼ばれる儀礼が行われる。本殿で神事が営まれた後、宮司以下参列者は一列となって、北菅大臣神社へ神霊を迎えに行く。菅大臣神社に戻り、神霊を本殿に遷すと、儀礼は終了となる。

宵宮祭は例祭前日の土曜日に行われる。準備の後、午前十時から本殿にて献茶式と観音供養が営まれる。献上されるお茶は、菅大臣町に住む茶道蕉菴流の林蕉菴宗匠によって点てられる。観音供養は清水寺の僧侶によって行われる。

宵宮祭当日の午後二時から、山伏お練りが行われる。聖護院の山伏と参加を希望した山伏稚児（先着二十名、衣装代有料）が列をなし、南は西洞院通りから北は綾小路通り、東は室町通り、西は油小路通りの間を、法螺貝を吹きながら四十分ほどかけて練り歩く。お練りの行列が終わると、午後三時から境内の鳥居前において大護摩供養が執り行われる。

例祭当日は、午前十時から本殿において神事が営まれ、雅楽が奉納される。神事が終わり、午前十一時になると、子供神輿の巡幸となる。その間、宮司らは北菅大臣神社へ向かい、北菅大臣神社の例祭を執り行う。その帰路には、菅大臣町



の当屋に立ち寄る。当屋には祭壇が設けられており、神事が営まれる。菅大臣町の当屋を担当する家は毎年異なる。さらに午後二時から三時にかけては、幣殿にて茂山千五郎社中による奉納狂言が行われ、午後三時から天神知恵餅が配られる。またこの日は、一日を通して、参集殿に野点の茶席が設けられる。

午後四時を過ぎたころから片付けが行われ、いったん解散となった後、午後七時半から「御霊遷（おうし）」が執り行われる。今回は、菅大臣神社から北菅大臣神社へ神霊を遷す。この神事をもって、すべての祭礼は終了となる。神輿や剣鉾の片付けは、翌日の午前中にも行われる。

近年では、町内の子供たちのために、氏子総代や町内会長が中心となって、菅宮祭と例祭の二日間、境内に出店やゲームコーナーを設けている。

行列次第

例祭当日の巡幸は、現在、子供神輿だけの行列となっている。午前十一時に菅大臣神社の参道を出発し、西洞院通りから仏光寺通りに入り、新町通りを北上し

て綾小路通りを東進する。室町通りを南下して仏光寺通りへ向かい、西進してから新町通りを南下し、高辻通り・西洞院通りを通って、表参道から菅大臣神社に帰着する。

由緒と歴史

菅大臣神社の例祭がいつごろから行われているかについては、詳らかではない。『都名所図会』巻之二には、祭日が八月十六日であると記されている。江馬努は、『華實年浪草』や『月令博物筌滑稽雑談』に鳳輦一基と剣鉾五本が巡行しているという記述があることを示しながら、祭日は五月一六日で午前中に例祭が施行されていること、明治二十年（一八八七）ごろから居祭りになったことなどを伝えている。

氏子によると、祭日はもともと五月十六日であったが、後に十六日に近い日曜日に、さらに近年になって五月第二日曜日へと変更されたという。それに伴って、かつては祭日の一週間前に行っていた御霊遷も、五月三日に固定されるようになった。

また、昭和四十年（一九六五）ごろまでは、枠に載せた剣鉾が巡行行列に加わっていたともいう。

② 剣鉾と組織

剣鉾（堀之内町）

概要

現在、菅大臣神社には二基の剣鉾が現存しているが、かつては三基あったとも伝えられる。現存する二基は、普段はともに菅大臣神社の倉に収められているが、うち一基が堀之内町の所有する剣鉾である。剣を収めている木箱に「剣鉾」と記されている以外、名称などは特に伝わっていない。鍔受の額には、表に「天満宮」、裏に「明治十二年／堀之内町／卯八月吉日」と記されている。鍔には菊の意匠が施され、中央に梅鉢紋が配されている。



堀之内町護持の劍鉾（今中崇文、平成 24.5.13）



菅大臣神社護持の劍鉾（今中崇文、平成 24.5.13）

かつてこの劍鉾は、杵に昇棒を付け、昇いて巡行に参加していたという。杵に掛けていた胴懸も残っており、各所に明治十五年（一八八二）新調という墨書が見られる。現存している杵は、昭和三十七年（一九六二）に新調したものである。杵の新調に際しては、町内の意向により、北野天満宮の松鉾と梅鉾が参考にされた。

さらに、この劍鉾には、久邇宮朝彦親王の手による菅原道真の「月の夜に梅花を見送る」と題した詩が染めぬかれた吹散（見送り）が付属している。神社の説明によると、表は厚手の塩瀬に縁が紺地金華山織りで通し一枚裂であり、裏は紅地梅鉢模様入り立涌で上部に天の字が錦糸で織り込まれているという。また、この吹散を収めた箱の蓋裏には、明治十八年（一八八五）五月の墨書銘があるとされる。祭礼中は、久邇宮家から「菅大臣社初掌西池季利」氏に宛てられた「菅大臣社鉾旗」に関する明治十六年（一八八三）四月十六日という日付の入った書状とともに、社務所内に飾られている。

菅大臣神社の二基の劍鉾は、例祭だけでなく、五十年に一度の「大萬燈会」や二十五年に一度の「半萬燈会」にも出されているという。

鉾祭りの次第

劍鉾の組み立ては、毎年五月三日に堀之内町の氏子によって行われる。組み立てられた劍鉾は、幣殿正面の南側に飾られ、その奥の間には胴懸が掛けられる。祭礼翌日の片付けまで、劍鉾が動かされることはない。一方、前述のように、吹散は社務所に飾られる。

劍鉾（菅大臣神社）

概要

この劍鉾はもともと本柳水町のものであったが、戦後の混乱の中で流出していたものを、後に菅大臣神社が買い戻したものであるという。現在では神社によって管理されている。特に名称などは伝わっていないが、鋳には松の意匠が施され、中央に梅鉢紋が配されている。鋳受の額には、表に「天満宮」、裏に「寛政五壬丑年／白梅講／八月吉祥日」と、劍鉾を収めた箱の蓋表に「第拾號／劍鋳／本柳水町」と記されている。

この劍鉾に付随する吹散（見送り）は、赤地に梅鉢紋がちりばめられた生地に、金の梅鉢紋が入っている。

鉾祭りの次第

劍鉾の組み立ては、毎年五月三日に菅大臣神社の官司か関係者によって行われる。組み立てられた劍鉾は、幣殿正面の北側に飾られ、祭礼翌日の片付けまで動かされることはない。こちらの吹散も、堀之内町の劍鉾の吹散とともに、祭礼中は社務所に飾られている。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

江馬努『日本歳事史 京都の部』（内外出版、一九三二年）

桃裕行「紅梅殿と菅家廊下」（『史跡名勝天然記念物』第十六卷二／五号、一九

四一年、のち『桃裕行著作集 第二卷』思文閣出版、一九九三年に収録)

竹内秀雄『天満宮』(吉川弘文館、一九六八年)

馬田綾子「中世都市の民衆世界」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅲ 人』

東京大学出版会、一九九〇年)

森茂暁「北野天満宮所蔵『紅梅殿社記録』にみる訴訟と公武交渉」(『史学雑誌』

九十九編十号、一九九〇年)

海津一朗「中世の国家権力と悪党」(『歴史学研究』六百四十六号、一九九三年)

村上紀夫「京都の町と神社——一六・一七世紀における菅大臣社の動向から」(『新

しい歴史学のために』二百八十二号、二〇一三年)

剣鉾祭礼記録・古文書

『菅大臣神社文書』(京都市歴史資料館蔵)

なお、本稿の執筆にあたっては、村上紀夫氏の京都民俗学会第二百六十二回談話会における「幕末維新期の菅大臣社——京都の「小社」をめぐる人びと」と題する報告を参考にさせていただいた。また、報告者から史料のご提供もいただいた。(今中 崇文)

市比賣神社 いちひめまつり

毎年五月十三日より前（神事始奉告祭）

五月十三日（春季大祭）

五月十三日前後（奉祝祭）

市比賣神社

京都市下京区市姫通下寺町東入本塩竈町

① 祭礼と由緒

地域の概要

市比賣神社の氏子は、菊浜学区内の都市町・南京極町・平居町に散在している。田中緑紅によると、同三町は宝暦年間（一七五一―一七六三）より家が立ち並ぶようになり、上七軒より株を譲り受けたことが始まりで、五条橋下と呼ばれる花街が形成された。明治年間以降、五条橋下は少し南にあった花街の七条新地と合併し、七条新地と呼称された。その後、昭和三十三年（一九五八）三月三十一日を限りとして同新地は廃止に至った『亡くなった京の廓 上』。現在もその名残から、三町には大小さまざまな規模のお茶屋の跡が点在している。

市比賣神社は創建以来、国家の市座（常設市場）である東市の鎮守とされてきたことから、本来は氏子自身が存在しないと伝えられている。現在では、伏見稻荷大社と氏子圏が重複している影響もあり、神社と関わりのある氏子は減少しつつあるが、神社は今もなお京都市中央卸売市場の守護神であり、市場関係者をはじめとする奉賛会・崇敬者により厚く信仰されている。

昭和五十五年（一九八〇）にはいちひめ雅楽会が設立され、各地で公演を行なう。また宮司・禰宜を中心に、京都市内で雅楽の後進の指導にあたっている。

祭礼次第

市比賣神社の祭日は五月十三日である。同社では同日の春季大祭の催行にあた

り、神事始奉告祭と奉祝祭とを加えた三つの神事を「いちひめまつり」と総称して実施している。祭礼の準備・後片付けは、神職のほかいちひめ雅楽会の協力のもとに行われる。

「いちひめまつり」は、春期大祭の約一週間前に行われる神事始奉告祭から始まる。本殿には御弓・斎弓が、社務所内には劍鉾・吹散が飾られ、吹散の前には花が生けられる。

春季大祭は五月十三日の午後一時より催行され、修祓・開扉・献撰並献茶ノ儀・斎主祝詞奏上・試し弓ノ儀・神楽奉納・斎主玉櫛奉奠・参列者玉櫛奉奠・祝電披露・撤撰ノ儀・垂蓮・御鈴・斎主一拝・退下の順で行われる。続いて午後二時ごろより、社務所において直会がある。参列者には、「霊爾の幸の御札」が下付される。

また春期大祭に近い日取りで奉祝祭が行われる。御霊を祝い奉る神賑行事であり、いちひめ雅楽会による雅楽・舞楽の奉納が行われる。奉祝祭と春期大祭の催行順序は、年によって入れ替わることもある。

由緒と歴史

創建は延暦十四年（七九五）に藤原冬嗣により、左右の市に守護の祠を勧請したことに始まる。天正十九年（一五九一）における豊臣政権の京都改造時に、現在の西本願寺が位置する地から現在の地へと遷社した。明治二十八年（一八九五）に記された『京華要誌』によれば、当時の祭日は三月十四日であり、人々から「市姫大神」と呼ばれ崇敬を集めていることが知られる。昭和二年（一九二七）、京都



中央卸市場の開設にあたり、構内に「市姫神社」が勧請され、現在でも毎年四月に京都中央市場春祭が催行される。

御旅所は、昭和四十年ごろまで都市町・南京極町に位置していた。また神社によれば、時期は不明だが東本願寺の庭園である涉成園に置かれた時期もあるとされる。

『京の祭歳時記』によれば、当時は五月十二日に宵宮の催行があり、神輿への御霊移し・子供神楽・神輿渡御・献茶式が行われ、十三日には試し弓の儀が執り行われていた。また、女人守護の社にちなんで、昭和五十年半ばより約二十年にわたって女性による神輿巡行「ギヤルみこし」が行われていた。現在では御旅所の維持が難しいことから、神輿巡幸は行われていない。

② 劍鉾と組織

龍菊鉾（市比賣神社）

概要

劍鉾は社務所の上座に飾られる。鉾の背後・左右にそれぞれ吹散が飾られる居祭りの様式をとる。劍鉾の準備・片付けは宮司・禰宜を中心に行われ、春季大祭・奉祝祭が終わるまで、劍鉾は社務所において飾られる。

劍鉾の銚は龍をモチーフにした装飾で、額には市比賣神社と刻まれている。受金は菊紋である。劍鉾の背後には、天保二年の作とされる緞子の菊紋の吹散が飾られ、劍鉾の左右には近年新調した二幅の菊紋の吹散が飾られる。また大祭の際には、劍鉾の前に氏子・奉賛会からの御献酒が供えられる。

劍鉾が保管されている木箱裏には、墨書で「天保二年（一八三二）と記され、「平居町」「京極町」の年寄・五人組らの連署を確認することができる。劍鉾を差す棹も神社内の倉庫に保管されている。

なお昭和五十五年（一九八〇）頃までは、氏子総代らが中心となり、劍鉾を車に載せ神輿とともに巡行していた。

その他

先行の調査報告によると、一時期、当社の龍菊鉾が新日吉神社の神幸祭に供奉していたとされる『京都神社誌』『若葉の京都』。また田中緑紅の報告によると、明治三十年ごろより新日吉神社の神幸祭への供奉が始まり、同書が執筆された昭和三十三年頃には供奉の慣習は廃れていたとされる『若葉の京都』。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

京都市編纂部編『京華要誌 上』（京都市参事会、一八九五年）

藤田由章編『京都神社誌』（社寺研究会、一九三四年）

田中緑紅『亡くなった京の廓上』（京を語る会、一九五八年）

田中緑紅『若葉の京都』（京を語る会、一九五八年）

横山健蔵『京の祭歳時記』（佼成出版

社、一九九三年）

飛驒富久『頑張れ』より『大丈夫』。

そんな神社でありたい。』（『京都』

二十五、石田大成社、一九九六年）

羽田美智子『私のしあわせ 京都あ
るき』（集英社、二〇一一年）

（東城義則）



社務所に飾られる龍菊鉾（東城義則、平成23.5.13）

金札宮 春季例大祭

毎年五月十五日

金札宮

京都市伏見区鷹匠町

① 祭礼と由緒

地域の概要

金札宮は、伏見九郷の一つ、久米村の氏神であったといわれる。久米村をはじめとする伏見九郷は、豊臣秀吉の伏見築城にあたり大きな地域変容を遂げる。久米村の集落は、現在の御駕籠町や鷹匠町あたりに位置していた。秀吉は濠川を伏見城の外濠とし、濠の郭内に武家を集住させる目的で、もとあった久米村を、郭外にあたる濠川の西側、現在の久米町あたりへ強制移転させる。金札宮とその神宮寺である西方寺も、この時期集落とともに移転した。

慶長元年（一五九八）、徳川家康は旧久米村の南方に位置する風呂屋町に土地を与え、西方寺を移転させる。と同時に、金札宮を旧地である鷹匠町へ戻す。金札宮・西方寺とも金松氏が管掌していたのであるが、『金札宮沿革誌』によれば、金松氏は西方寺の住持として風呂屋町へ移住し、それを契機に金札宮に対する管掌力を消失したという。そしてこの頃、喜運和尚という者が鷹匠町に喜運寺を建立し、境内に金札宮を遷座して自ら宮守となり、祭儀を整えたと記される。

『日次紀事』（二六七六年刊）には、九月九日条に伏見御香宮祭と並んで「金札社祭」という名が見えるので、江戸時代前期には重陽の節に祭礼が行われていたようである。いつ九月十五日へと祭日が変更されたかは定かではないが、江戸時代後期には九月十五日に斎行され、明治期は一か月遅れの十月十五日になり、昭和四年（一九二九）には五月十五日に変更された。

『金札宮沿革誌』によれば、明治十四年（一八八一）に有志による頼母子（たの

もし）を始め、十年後に不

動産を取得、その賃料を

金札宮維持の基本財産とする

ことになる。さらに大正十三年（一九二四）

には金札宮の保存の目的をもった伏見白菊会が、

また昭和二年（一九二七）には祭礼の充実を目的とした金札宮賑會が結成さ

れている。こうした金札宮の祭具や祭礼の充実には、氏子地域である東組

に住まう酒造家の中氏が果たした役割がすこぶる大きかったと記されている。

昭和初期、神輿に供奉した飾馬当番町は、北は丹波橋通、南は大手筋、東は新町通、西は濠川と竹田街道あたりまでというかなり広範囲の地域の町内から出た。町名で記せば、鷹匠、今町、竹中、南部、新大黒、上風呂屋、東大手、下風呂屋、紙小屋、紺屋、東町、西町、東菱屋、土橋、肥後、西大手、指物、下板橋、御駕籠、石屋、東組、新町七丁目、同八丁目、同九丁目、同十丁目である。この地域は御香宮の氏子域でもあり、金札宮との二重氏子のような状態となっていたのである。

祭礼次第

金札宮の祭礼は、平成二十二年に神輿巡幸が約半世紀ぶりに復活するなど、近年活発に威儀を整えてきている。なお、剣鉾のサイズは非常に小ぶりである（計測等の結果は、資料編を参照のこと）。



〔位置図〕

② 剣鉾と組織

剣鉾は二基残されている。双方とも剣、棹ともに短い、伏見に一般的にみられるタイプである。飾りは二基とも菊花模様で、菊も同一のデザインである。加えて、剣下部に「寛政六年甲寅九月 下板橋二町目中」、別の剣には「寛政六年甲寅九月」と年のみ陰刻されている。寛政六年（一七九四）に同時にしつらえられていることから、この時期に剣鉾が出されるようになった可能性があるが定かではない。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

三木峰之助『金札宮沿革誌』（金札宮社務所、昭和六年）

（村上 忠喜）



右方に剣鉾が確認できる。（昭和20～30年代か、撮影場所不明。金札宮提供）

吉田神社 氏子講社大祭

平成二十三年度は五月十五日

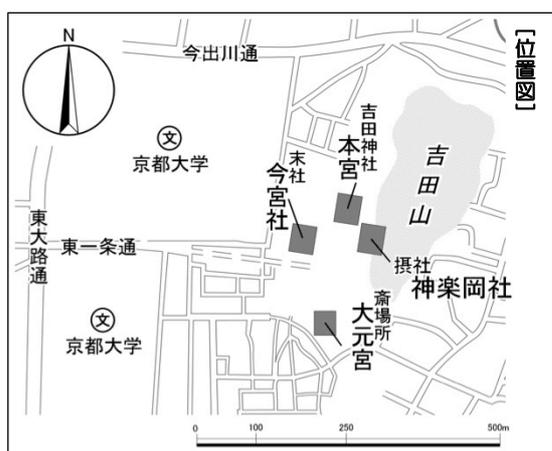
吉田神社

京都市左京区吉田神楽岡町

① 祭礼と由緒

地域の概要

所在地は左京区吉田神楽岡町。祭神は建御賀豆知命、伊波比主命、天之子八根命、比売神の四柱の神である。由緒は、社伝によると清和天皇の御代であった貞観元年（八五九）四月に、古くからの霊場である吉田山に、中納言藤原山蔭卿が平安京の鎮守神として春日の四神を勧請したことに始まる。正暦二年（九九一）には朝廷から特別な奉幣を受ける二十二社の前身である十九社奉幣に列せられた。



室町時代の中頃に神官の吉田（下部）兼俱が吉田神道（唯一神道）を大成し、山上に齋場所大元宮を造営してから、吉田流神道の宗家として明治に至るまで神道界に大きな権威を誇った。こうした経緯から、吉田神社には一般的な意味合いでの氏子がいない。吉田神社周辺の方々には吉田神社の撰社である神楽岡社や末社である今宮社の氏子である。しかし地元の人々と吉田神社のつながりは古くから当然あり、地元の方々とのつながりを形にするため、昭和三十三年に吉田氏子講社が結

成された。講社の規約には「今宮社ならびに神楽岡社の神幸祭に奉仕をし、神徳の援用をはかる」が結成の目的であると書かれている。

祭礼次第

この祭礼は吉田氏子講社の祭り、氏子講社が結成されてから行われている。劍鉾は、平成になり数年してから参加している。

当日、劍鉾は午前九時頃から吉田劍鉾保存会の方々によって組み立てが始まられ、調整のために境内で何度も鉾を差す。劍鉾以外の神賑行事の団体も午前中より準備をする。

いったん昼休みをとった保存会は、正午に再び集合し衣装に着替える。午後一時ごろより氏子講社の理事の方々の本殿へ集合し、祭典が始まる。

祭りとしては、本宮で役員による祭典が行われる以外は、神賑行事と各氏子町内の人々の福引きが行事のメインとなる。平成二十三年における神賑行事の順番は次の通りである。

近衛中学吹奏楽部

大人劍鉾（吉田劍鉾保存会）、第四錦林小学校劍鉾クラブ児童

箏曲（廣山会社中）

第四錦林小学校太鼓クラブ児童、和太鼓（吉田今宮太鼓）

ザ・ユニークス・ジャズ・オーケストラ

午後四時にはジャズも終了し、それをもって氏子講社大祭も終了となり、境内の片づけが始まる。

② 劍鉾と組織

劍鉾は吉田劍鉾保存会の方々に参加している。平成二十三年度は午後一時五十分から保存会（六名）による鉾差しが始まった。この年は日差しの関係で南から本殿に向かい、往復して差した。鉾は、唐胡麻鉾と松鉾が出た。保存会の方によれば、唐胡麻鉾は毎年メインで出ているようだが、その他の鉾は、差す人の力量

により毎年変わるといふことである。

午後二時二十分頃、保存会による鉦差しが終了すると、小学生による鉦差しが始まる。当日の分担表には五本分の鉦の名称と児童の割り振りが記されている。

平成二十三年度 第四錦林小学校鉦クラブ分担表

菊鉦 六年生三名 藍鉦(青) 五年生三名、四年生一名

藍鉦 六年生三名 藍鉦(赤) 三年生三名

竹鉦 六年生

以上のように、鉦はさまざま催しの一環で出演しており、小学生の鉦クラブにとっては披露の場の一つになっている。

(佐藤 直幸)



小学生による鉦差し



吉田鉦保存会による鉦差し
(いずれも佐藤直幸, 平成 23.5.15)

元祇園柳神社 神幸祭

毎年五月第三日曜日（神幸祭）

元祇園柳神社

京都市中京区壬生柳ノ宮町

① 祭礼と由緒

地域の概要

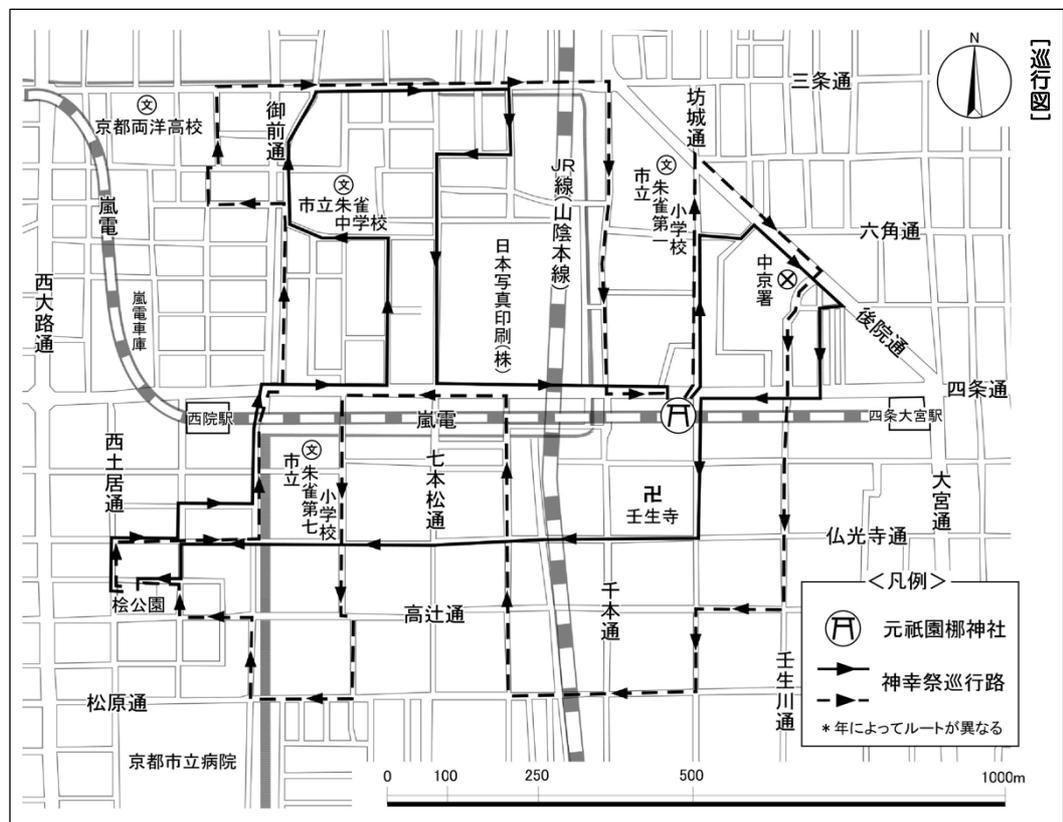
元祇園柳神社（以下、柳神社と記す）は、京都市中京区壬生柳ノ宮町に鎮座し、祭神は素盞鳴尊が祀られている。もとはこの地に祇園社が祀られていたと伝えられ、元祇園社ともいわれる。地域の人々からは「柳の宮さん」と呼ばれて親しまれている。境内には、隼神社が並んで祀られている。

柳神社の氏子地域では、①菊鉾（南相合町西部・相合町西部・相合町東部・北相合町・南相合町東部・南相合町中部）、②日月鉾（緩東町）、③橘鉾（御所ノ内町南部）、④龍鉾（松原町中部）、⑤朱雀鉾（朱雀町北部）、⑥鳳凰鉾（中材木町・北材木町・朱雀材木町・南材木町）、⑦虎鉾（東高田町西部・東松町・東土居ノ内町松部・土居ノ内町東南部・西土居ノ内町南部・西松町・松中町・松町南部・東高田町東部）という七つの剣鉾が受け継がれている（平成二十三年・二十四年調査）。

祭礼次第

四月下旬になると、柳神社の社務所において鉾町会議が行われる。平成二十四年は四月二十七日の午後七時半から開かれた。鉾町会議には柳神社禰宜をはじめ、剣鉾を持つ鉾町の代表者一名ずつが出席し、五月の宵宮祭および神幸祭について打合せが行われる。柳神社禰宜から鉾町の代表者へ説明があり、鉾や器具を神社に迎えにくる時間、各町での清め祓えの順序、神幸祭の集合場所や時間、鉾や器具を神社に納める時間などが伝えられる。

「宵宮祭」は五月第三土曜日に行われる。平成二十三年は五月十四日、二十四



年は五月十九日であった。

宵宮祭では、まず午前八時から九時の間に各鉾町の人々（町ごと）に三〜四名が柳神社へ鉾や器具を迎えに行き、午前中に各鉾町の当番町によってそれぞれの剣鉾

の飾り付けが行われる。

午後になると、椰神社禰宜が七基の劍鉾を回り、清め祓えを行う。平成二十四年の清め祓えの順序は、①午後一時に綾東町（日月鉾）、②午後一時半ごろに南相合町西部（菊鉾）、③午後二時ごろに松原町中部（龍鉾）、④午後二時半ごろに東高田町西部（虎鉾）、⑤午後三時ごろに中材木町（鳳凰鉾）、⑥午後三時半ごろに朱雀町北部（朱雀鉾）、⑦午後四時ごろに御所ノ内町南部（橋鉾）の順に行われた。また、夕方以降も各鉾町の劍鉾のもとにお参りする人々の姿が見られる。

なお、椰神社の神幸祭には、少年勤王隊（小学生と中学生約五十名、大太鼓・小太鼓・笛）が参加する。勤王隊の練習は、神幸祭の約一か月前から椰神社で行われ、一週間前には予行行列がある。また、宵宮祭の日に最後の練習が十八時半頃から椰神社の境内で行われる。

「神幸祭」は五月第三日曜日に行われる。平成二十三年は五月十五日、二十四年は五月二十日であった。

午前九時から椰神社の社殿において祭典が執り行われる。

各鉾町は、午前中に神幸祭の行列に参加するための準備を行い、午後十二時五十分までに、椰神社の北の方角にある錦坊城児童公園の入口付近（坊城四条町上ル）に集合する。劍鉾は台車に立てた状態で押していく。差し鉾はない。御神幸の行列には六基の劍鉾が参列し、橋鉾は居祭りの形をとる。鉾町以外の町はおともとして（株巻、神幸祭の行列に参加する。午後一時頃に神幸祭の長い行列は出発し、氏子の地域を巡行していく。行列が進む道順は、その年、氏子地域を時計回りにまわると、翌年は反時計回りに地域をまわるといのように交互にしている。また、氏子地域をできる限り多くまわるために、一部の場所で神輿と巡行行列の道順を変えている。その途中、松公園で休憩をとり、午後五時頃に椰神社に御還幸となる。神幸祭の行列に参列した劍鉾は随時、各鉾町に帰っていき、劍鉾の片付けを行う。

神幸祭の翌日は、午前十時までに鉾および器具を椰神社に納め、終わりを迎える。

行列次第

「神幸祭」では、午後一時頃に行列が出発する。「平成二十四年五月二十日（日）元祇園椰神社神幸祭行列書」によると、行列に並ぶ順序は次の通りである。

- 1 先太鼓（自） 先導。
- 2 竹箒（自）
- 3 社名旗（旗） 少年勤王隊隊名旗一人。楽長。笛手数十人。小太鼓十二人。大太鼓四人。（前衛）錦旗手三人。隊長 参謀 大隊長一人。司令士。隊士数十人。小隊旗一人。隊士若干。
- 4 釣台（法） 各町供奉員 湊田町二部。松原町西南部。同西北部。森町一部。同二部。同三部。同四部。御所ノ内町東部。同北部。朱雀町東南部。平和町。
- 5 釣鐘陣羽織二人。椰ノ宮町南部。同北部。供奉員 大竹町一部。
- 同二部。同三部。同四部。同五部。同六部。同七部。西坊四町。東坊四町。神明町。
- 6 獅子二人。
- 7 鉄棒素襖二人。馬場町中部。同北部。同東南部。同西北部。天ヶ池町。天ヶ辻町。土居ノ内町東部。猿田彦
- 8 御真神（自） 供奉員 高樋町西部。同中部。同北部。同東部。同南部。早乙女十人。供奉員 下溝永楽町。同大黒町。同蛭子町。同中島三番町。森前町南部。同西部。同東部。同北部。同東北部。
- 9 菊鉾 供奉員 南相合町西部。相合町西部。相合町東部。北相合町。南相合町東部。南相合町中部
- 10 日月鉾 供奉員 綾東町。
- 11 橋鉾 供奉員 御所ノ内町南部。
- 12 龍鉾 供奉員 松原町中部。
- 13 朱雀鉾 供奉員 朱雀町北部。
- 14 鳳凰鉾 供奉員 中材木町。北材木町。朱雀材木町。南材木町。
- 15 虎鉾 供奉員 東高田町西部。東松町。東土居ノ内町松部。土居ノ内町東南部。西土居ノ内町南部。西松町。松町中部。松町南部。東高田町東部。
- 16 御幣山鉾五人。供奉員 坊城町北部。同西部。八乙女八人。供奉員 森町五部。同六部。同七部。同八部。同九部。同十部。賀陽御所町四条部。同東南部。同仏光寺西部。馬場町南部。同西部。同東部。南花井町。
- 17 童花傘（童） 供奉員 中川町一部。同二部。同三部。辻町。迦陵頻伽胡蝶四人。供奉員 下溝平安町。同中部。同西部。同本町。同西南第一。同西南第二。下溝町東部。同南部。
- 18 楽人
- 19 御楯（童）
- 20 御矛（童） 21 御弓矢（童） 22 御劍（童） 23 隨身一人（黒袍）。隨身一人（赤袍）。24 紫翳直垂一人。紫翳一人。
- 25 御鳳輦（輦） 26 菅翳直垂一人。菅翳一人。齋主 供奉員 東土居ノ内町。東壬生京極町。北壬生京極町。西壬生京極町。南壬生京極町。千本上南町東部。同西部。日ノ出町。稲荷町。千本松原町。花井町。坊城町東部。壬生寺門前町。同南門前



菊鉾

町。綾西町。壬生坊城第一団地。辻町ガーデンシティ。ファミリーガーデン二条駅前。パデシオン四条壬生。27神輿高張法被。神輿少年神輿組五十数人。神職

神幸祭の行列のうち、劍鉾が並ぶ部分の順番は毎年変わる。その年の先頭を務める劍鉾は、翌年になると最後尾に回る。また、一つの劍鉾を複数の町で所有している所では、同じ劍鉾を守る鉾町の中で、鉾祭りの当番町を毎年交代で務めている。御神幸の行列に並ぶときも、その鉾町の中で先頭に立った翌年は最後に回るように決められている。このとき、複数の鉾町の中で当番町になる順序は、「神幸祭行列書」に書いてある順番のとおりである。

なお、椰神社の劍鉾は、一つの町で守り伝えている場合と複数の町の場合とがあるが、劍鉾にかかわる鉾町がどのような理由で決められたかは伝えられていない。また、一つの町で劍鉾を所持している場合でも、鉾の飾り付けを行うのは町の役員が中心になって行うため、毎年、劍鉾を飾る人が異なる。

由緒と歴史

言い伝えによると、今の祇園社（八坂神社）は、もともとこの地にあり、ここから八坂の地に移ったといわれており、そのため、椰神社は元祇園社といわれている。

る。この由来について、椰神社に古文書などは残っていない。椰神社の境内には「御供石」があり、境内にある説明板によると、「祇園祭の山鉾巡行のとき、この石の上に神饌をおき神にそなえたもので、もとは下京区御供石町（万寿寺通鳥丸西入）にあったが昭和七年（一九三二）に町内の役員・若者により椰神社境内に移した」と記されている。

② 劍鉾と組織

菊鉾

（南相合町西部・相合町西部・相合町東部・北相合町・南相合町東部・南相合町中部）

特徴

菊鉾は荷い鉾（二基）である。劍鉾の鋳の意匠は菊である。

鉾祭りの次第

菊鉾は六か町で受け継いでいる。平成二十四年の鉾町は南相合町西部が担当した。宵宮祭の日の九時より鉾の組み立てやお飾りが行われた。町内会長と副会長が飾り付けを行った。このとき、以前の劍鉾の飾り付けの写真を参考にした。

トウヤ飾り

六か町の中で、当番に当たった町の町内会長が中心となる。六年に一度の順番であるため、町内などで祭りに詳しい人々に応援に来てもらう。

日月鉾（綾東町）

特徴

日月鉾は荷い鉾（二基）である。劍鉾の鋳は日月（右側に「日」、左側に「月」）である。

鉾祭りの次第

日月鉾は一か町で劍鉾の飾りが行われている。

トウヤ飾り

綾東町では町会長・副会長・会計の三役が祭りを主導する。三役は毎年交代す

る。この三役のほかに、町内の各組の組長が参加して、劍鉾の飾り付けを行う。

橘鉾 (御所ノ内町南部)

特徴

橘鉾は飾り鉾(二基)である。劍鉾の鏝は橘である。

鉾祭りの次第

橘鉾は神幸祭の行列には参加せず、鉾飾りだけを行い、居祭りの形をとる。なお、昭和の終わり頃には神幸祭の行列におともとして参列したことがあるという。

トウヤ飾り

劍鉾の飾り付けの場所は毎年、町内の人にお問い合わせをして決めている。平成二十三年と二十四年は、同じ家で鉾の飾り付けを行った。

龍鉾 (松原町中部)

特徴

龍鉾は荷い鉾(二基)である。劍鉾の鏝は龍である。



日月鉾



橘鉾



龍鉾

鉾祭りの次第

龍鉾は一か町で劍鉾の飾りが行われている。

トウヤ飾り

劍鉾の飾り付けの場所は毎年変わる。劍鉾を迎える年は、会長をはじめ役員によつて話し合いがあり、町内で鉾を飾ることのできる家を探す。

朱雀鉾 (朱雀町北部)

特徴

朱雀鉾は荷い鉾(二基)である。

鉾祭りの次第

朱雀鉾は一か町で劍鉾の飾りが行われ、守られている。

トウヤ飾り

かつては町内の家々の持ち回りで飾っていたが、近年は同じ場所で飾られるようになってきている。



朱雀鉾



虎鉾



鳳凰鉾

虎鉾

（東高田町西部・東松町・東土居ノ内町松部・土居ノ内町東南部・西土居ノ内町南部・西松町・松町中部・松町南部・東高田町東部）

特徴

虎鉾は荷い鉾（二基）である。剣鉾の銚は虎である。

鉾祭りの次第

虎鉾は九か町で回り持ちにするので、九年に一回、剣鉾の当番が回ってくる。椰神社の剣鉾のうち、虎鉾は最も町の数が多し。以下、虎鉾の組織を紹介しておく。

鉾祭りの担当の前年を迎えると、鉾祭りに備えて今年の鉾町の片付けに立ち合い、鉾や器具を神社に納めるのは翌年の鉾町が行う。このようにして、九年ごとに務める鉾祭りの様子を学ぶ。当番の年は鉾町会議に出席する。宵宮祭の日は午前中に、役員が中心になって鉾のお飾りを行う。文書などは伝わっていないため、以前に撮った鉾飾りの写真を見ながら、二時間ほどで剣鉾などの飾り付けを行う。

正面に「椰大神」の掛け軸をかける。その前に山の幸や海の幸などを供える。平成二十四年は、お神酒・洗米・塩、紅白の餅、かぼちゃ・大根・にんじん・バナナ・リンゴ・みかん、昆布・するめ・干椎茸・ゆば・かんぴょうを供えた。飾

り付けが終わると、各町内の人々が鉾飾りのところにお参りにくる。鉾祭りの担当の町内で、鉾飾りの場所に居る当番を割り振る。また、宵宮祭の日の午後に行われる清め祓えでは、九か町の会長が参列する。

神幸祭の日は、虎鉾では午前十一時ごろ、飾り付けをしていた剣鉾を台車に差して乗せる。十一時三十分ごろ、鉾祭りの当番でない町の人々（おとも）が集合する。そして、十二時ごろに虎鉾が町を出発し、集合場所（錦坊城児童公園）へ向かう。

虎鉾の町内は、椰神社の氏子地域で最も西端にある。

午後一時に神幸祭の行列が出発すると、その行列に参列して氏子地域を回る。神幸祭の巡行から町に帰ると、鉾飾りの片付けを行う。片付けが終わると、翌年の当番町が取りにきて、翌日の午前十時までに鉾や器具を神社に納める。

トウヤ飾り

虎鉾は九か町で守っており、剣鉾を飾る場所は町ごとに異なる。鉾祭りの年を迎えると、当番町において会長をはじめ、役員によって話し合いが行われる。町内で鉾を飾ることのできる家を探して前もってお願いをしておく。屋根があつて戸締りができるなどの条件があるので、祭りの半年前頃から考え始め、平成二十四年は町の総会（三月）のときに頼んだ。東高田町西部が当番町であり、役員が中

心になって鉾飾りを行う。役員には会長・副会長・組長（七組、現組長と前組長が手伝う）がいる。

鳳凰鉾（中材木町・北材木町・朱雀材木町・南材木町）

特徴

鳳凰鉾は荷い鉾（二基）である。鉾の鍔は鳳凰である。

鉾祭りの次第

鳳凰鉾は四か町で鉾飾りが行われている。

トウヤ飾り

鉾飾り付けの場所は毎年変わる。平成二十四年の鉾町は中材木町が担当した。鉾の年を迎えると、会長をはじめ役員によって話し合いがあり、町内で鉾を飾らせてもらう家を探し、お願いをして決める。

その他

椰神社の七つの鉾や器具にかかわる箱の銘文をみると、昭和年代のものが多く見られる。虎鉾の箱の銘文には「昭和四十年十二月吉日新調」や「平成元年吉日」などと記されている。このほかの町でも、龍鉾には「昭和十年五月新調」、橘鉾には「昭和拾壹年五月十七日」などの年号が木箱に記されている。また、龍鉾や龍鉾などの棹には「昭和拾年五月」の年号が見られる。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌・映像資料・鉾祭礼記録・古文書

調査報告をはじめとする記録はあまり残されていない。

『京都神社誌』(社寺研究会、昭和九年六月刊)の「椰神社(元祇園社)」の項には、次のように記されている。

祭神 素盞鳴尊

(相殿) 稻倉魂命 伊佐那美命 瓊々杵尊 菅田別命 菅大神 蘇民将来

◇清和天皇貞観十一年(八六九)三月京都に疾癘盛に作り牛頭天王(素盞鳴尊)の神を播磨国広峯より八坂の郷に勧請のとき、四條坊城に先づ神輿を入れ奉りしに椰の木多かりしを以て此所に天王を齋ぎ椰の宮と称し蘇民将来を併せ祀る。祇園神社の旧址なれば世人元祇園社と號す。

中古以来次第に衰頹し明治維新には荒廢せる一小祠なりしが明治六年壬生寺境内の六所明神を廢し其神靈を配祀し神殿を修築し、又氏子地の人々も漸く増加し大正十一年より神幸祭を再興す。

◇神幸祭 五月十七日、鳳輦神輿の渡御あり。

これによると、大正十一年(一九二二)より神幸祭を再興したとあり、その日程は五月十七日であったことがわかる。椰神社にも大正年間から巡行を実施したと伝えられている。

出雲路敬直氏「京都の鉾行事の諸相」『京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会、二〇一二年三月刊 十三頁』によると、「四条通りが拡張され地下に阪急電車が走りました時の立ち退き費用で、鉾を作ったということが、調べているうちに分かってきました」と記されている。なお、阪急京都線の西院(大宮間の地下鉄道の開業は昭和六年(一九三二)、大宮(河原町間は昭和三十八年(一九六三)のことである。

(藤原 喜美子)

京都ゑびす神社 例大祭・神幸祭

毎年五月第三日曜（宵宮祭は第二土曜）

京都ゑびす神社

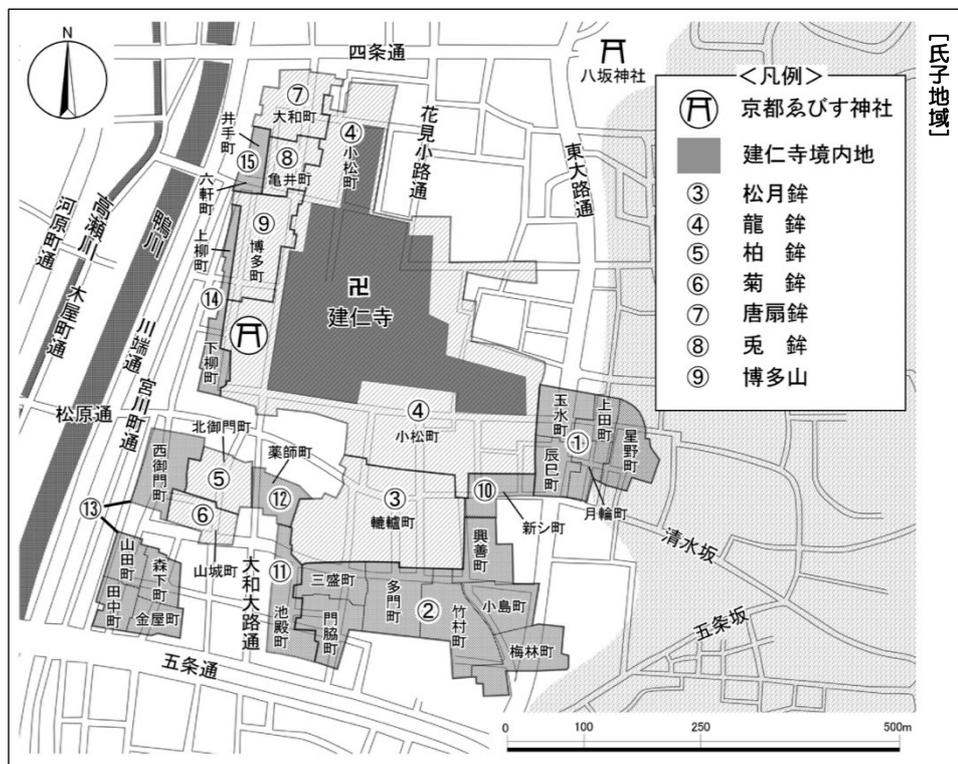
京都市東山区大和太路通四條下ル小松町

① 祭礼と由緒

地域の概要

当社は建仁二年（一一〇二）、建仁寺建立の折、榮西禪師によって寺内に勧請された、同寺の鎮守である。『山城名所寺社物語』によれば、応仁の乱のち、建仁寺再興にともない、寺内から西側の門前に位置する西門前下之町（現小松町）に移転したという。祭神は八代言代主神、大国主神、少彦名神で、氏子の無病息災と商売繁盛を司る。『祇園社家記録』の観応元年（一三五〇）九月九日に「建仁寺鎮守祭の風流、之を見物す」とある。安永二年（一七七三）には、大和町・亀井町両町中によって、当社の修復金を確保するために「正月九日十日」の「参詣之儀」が開始されたとの文書があり、現在も正月八日から十二日にかけて行われる十日えびす大祭（初えびす）の起源とみられる（建仁寺文書「奉願口上書 安永三年正月付」）。当社は明治十四年（一八八一）に社号を蛭子社から「恵美須神社」に改めた。現在は「京都ゑびす神社」と称する。

氏子圏は、新道学区・六原学区と、清水学区の一部にまたがり、総町数は三十六町である。新道学区の住民の九割が京都ゑびす神社の氏子であるのに対し、六原学区は、祇園社、伏見稻荷、新日吉神社、京都ゑびす神社の四社の氏子圏が入り乱れている。また鴨川左岸の宮川町通に関しては宮川筋五丁目・八丁目のみ当社の氏子である。各町は担当する神具によって、①神饌組（星野町・月輪町・玉水町・上田町・辰巳町）、②真神組（小島町・多門町・三盛町・門脇町・興善町・竹村町・梅林町）、③松月鉾（東轆轤「ろくろ」町・中轆轤町・西轆轤町）、④龍鉾（小松町一部・二部・三部・四部）、⑤



柏鉾（北御門町）、⑥菊鉾・山城武者組（山城町）、⑦唐扇鉾・日幡・月幡（大和町）、⑧兔鉾（亀井町）、⑨博団山（博多町）、⑩御幡（新シ町）、⑪御幡（池殿町）、⑫祭壇（業師町）、⑬神馬唐鞍（西御門町・山田町・田中町・金屋町・森下町）、⑭猿田彦神尊御面（上柳町・下柳町）、⑮弓矢と盾（井手町・六軒町）に区分されている（通し番号は『恵美須神社神幸祭を訪ねて』による）。当社の神楽殿にお飾りをする上柳町・下柳町を除いて、神幸祭で

はこの町組に従って当屋(町によっては御旅とも)が指定され、祭壇が設けられる。
祭礼次第

現在は、毎年五月の第三土曜日を宵宮祭とし、例大祭・神幸祭は第三日曜日に開催されている。これに先立ち第二日曜日をおいで祭(御出籠祭)とし、神楽殿に神輿と御鳳輦を祀る。

祭礼の運営は、氏子総代と神事係を中心とする。新道学区については上ブロック(大和町・亀井町・井手六軒町・上柳町・博多町)、中ブロック(小松町一部から四部)、下ブロック(西御門町・山田町・田中町・森下町・金屋町)の各ブロックより氏子総代・神事係各一名(任期は四年、二年ずつ氏子総代と神事係を務める)を選出するほか、各町一名の神事係(任期二年)と神輿係によつて運営される。六原学区では、各四ブロックから総代二名、神事係三名にて運営される(『恵美須神社神幸祭を訪ねて』)。

宵宮祭の日は、宮司が午前十時頃から夕方までかかつて各町組の当屋をめぐり、神事(祓詞、修祓、祝詞奏上、お神酒および洗米・昆布のふるまい)を行う。これを「お参り」と呼んでいる。当屋は、町組を構成する家が輪番であったが、現在では当屋を設けられる家が減少しつつあるため、決まった家が担当する町組も多い。氏は宵宮の日の朝八時頃に当屋に集合し、祭壇を設けお飾りをする。この際、劍鉾を飾る町組は、男性が中心になって鉾を組み立てる。祭壇には、御神体(えびす像、町組によっては御軸の場合もある)が祀られる。御神体は持ち回りで保管する町組が多い。御神体および劍鉾、そして三方などの祭礼に用いる道具は各町組の蔵に保管されるが、蔵のない町組では各家が持ち回りで保管する。祭壇や供物の内容は、各当屋によつて細かな違いがあるが、祭壇には御領箱、神、燭台、賽銭箱などが飾られることが多い。供物は、御神酒・落雁・塩・洗米・野菜と果物(メロン・リンゴ・茄子・大根・人参など)・乾物(ひじき・高野豆腐・椎茸・昆布・春雨・鰹節・剣先スルメなど)・鯛・鏡餅などである。供物は八足台を用いて供える。

午後一時頃から新道学区・六原学区それぞれの氏子総代を中心に、境内にて御神輿の準備が行われる。午後五時頃、宮司が「お参り」を終えて帰社すると、境内で祭典の準備が始まる。午後七時頃、祭典が開始される。

例大祭は、日曜日の朝九時半頃から境内にて、各町の役員を担当する氏子と雅楽奏者が参列し、祭典が行われる。次第は、祓詞・修祓・雅楽奏上・警蹕・献酒および献饌・祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌・開扉・御鳳輦および御神輿への御霊移し・閉扉である。祭典終了後はすぐに神幸祭の準備に入る。

神幸祭の神輿巡幸は、学区別に行われる。昭和三十六年(一九六一)以降は六原学区が午前、新道学区が午後となっている。

午後十一時頃、六原学区の巡幸が開始される。北御門町・山城武者組・池殿町・松月会・新シ町・真榊組・薬師町の順に当屋を巡り、午後十二時半頃、ゑびす神社に帰還する。

午後一時三十分頃、新道学区の巡幸が開始される。新道学区では御神輿を昇いで巡幸する。博多町・亀井町・大和町・金屋町・神馬当町・神饌組・小松町・六軒町の順に当屋を巡る。午後五時半頃、行列が境内に帰還すると、ただちに還幸祭を行い、御霊移しをもつて終了となる。

なお、当屋では御神輿が通過したのち、当日のうちに御飾りおよび劍鉾の片付けを行う。その夜に直会を実施する当屋も多い。

なお、神幸祭当日、建仁寺の僧侶による社参がある(平成二十二年は午後三時頃)。

行列次第

午前に行われる六原学区の巡幸列は、「恵美須神社御輿」と記された社旗を先頭に、太鼓、子供神輿(桜正宗の樽に神を立てる)、子供神輿(樽に覆屋を構え、その屋根上にえびす像、神を立てる)、御神輿(屋根上は鳳凰、宮司・神職(ともに人力車に乗る))である。

午後に行われる新道学区の巡幸列は、「恵美須神社御輿」と記された社旗を先頭に、「御神燈」と書かれた高張提灯、太鼓、子供神輿(樽に覆屋を構え、その屋根上にえびす像、神を立てる)、子供神輿(桜正宗の樽に神を立てる)、御神輿、御鳳輦、宮司・神職(ともに人力車に乗る)、高張提灯である。なお、桜正宗の樽神輿は二基あり、午前と午後では違うものを使用する。

現在は、劍鉾の巡行はない。ただ、年記はないものの明治十年(一八七七)から昭和初期の間の資料と思われる「五月十六日神幸行列表」(『恵美須神社神幸祭を訪ね

て』に掲載。以下「神幸祭行列表」には、

太鼓法被三人、先払羽織袴一人、獅子二人、神蓋白一人、恵宝講旗法被一人、榊卡柳町、御幡
池殿町、武者山殿町、日幡月旗大和町、兎鉾亀井町、博団山博多町、龍鉾小松町、柏鉾北園町、
松月鉾龍崎町、御旗新町、御太刀東川原町、弓矢楯井出町六軒町、幸鉾白十四人、真神六原学区七
町中、御旗薬師町、神馬付幸權 新連学区七ヶ町中、神饌辛櫃安井学区 現清水学区 五町中、神職社掌騎
馬 午持白一人 奮持白一人、和琴白一人、楽人供白一人、志鼓白一人、荷太鼓白二人、荷鉦
鼓白二人、金棒素襦一人、指羽白一人、指羽白一人、鳳輦輿工二十四人 小床 白
二人 小床 白一人、氏子総代及頭町、錦蓋輿鳳輦付白三人、菅羽白一人、菅羽白一人、菅
蓋白一人、辛櫃羽白一人、神職社司 騎馬 午持白一人 奮持白一人

とあり、往時を彷彿とさせる。ただ、現存する唐扇鉾と菊鉾の記載はない。
由緒と歴史

近世の建仁寺門前は、北は祇園、南は五条通、西は鴨川東岸、東は八坂に接する地域を指す。このうち、十七世紀前半以前に開町していた十町（現在の大和町・亀井町・井手町・六軒町・博多町・小松町・北御門町・山城町・東河原町・轆轤町）は、建仁寺古門前町と呼ばれる。

十八世紀に入ると、洛外の耕作地開発にともなう洛外町続き町の成立にともない、建仁寺は地子の増収を見込んで、寺領地の畑地を町屋地に開発した。これら「新地」は建仁寺によって地子を課された。正徳二年（一七一二）に開発された六町（現在の西御門町・西河原町・山田町・田中町・森下町・金屋町）は建仁寺新門前町と呼ばれ、翌正徳三年（一七一三）には、蛭子社役人の願（正徳三年九月一九日「正徳三年より如繪図恵美須之神輿通申度願候『建仁寺文書』」）によって、蛭子社祭礼の神輿渡御の道筋に組みこまれるとともに、建仁寺の寺領に含まれない「稻荷氏子」の地域（山崎町・大国町・音羽町）が外されている。十八世紀後半までには、建仁寺古門前町・建仁寺新門前町に、古門前裏町（上柳町・下柳町）と六波羅新地（辰巳町・玉水町・上田町・月輪町・新町・池殿町・三盛町・門脇町・多門町・竹村町・興善町）を合わせて、建仁寺門前三十三か町が成立した。これは、現在の当社の氏子圏にほぼ重なる。近世の蛭子社は、社頭の維持を社地の貸付や氏子らの寄進に頼っていた。十八

世紀後半からは、十日えびすなどの参詣者による「散物」によって、氏子による社頭の整備が進んだ。当社の氏子には、屋敷主である造酒屋、大工、風呂屋、医師といった有力な商人に加え、女性が名を連ねていた。彼女らは、祇園や東山界限など近隣の遊興地で茶屋を営む営業者とみられる。

当社は近世以前、九月十九日・二十日に祭礼を執行していたが、明治十年（一八七七）より、おいで祭を五月九日に、例大祭・神幸祭を五月十六日に行うようになった。昭和五十九年（一九八四）度から現在に至るまで、毎年五月の第三土曜日を宵宮祭とし、第三日曜日に例大祭・神幸祭を開催している。

神輿の製作年代は不明であるが、近世に遡るとみられる。その後、巡幸に参加しなくなつて境内に安置されるのみになり、御鳳輦だけが巡幸していた。この御鳳輦は、明治七年（一八七四）九月に氏子中により寄付されたという記録がある。樽神輿は昭和二十七年（一九五二）に寄進され、昭和三十二年（一九五七）まで小松会（小松町一部から四部）により巡幸された。現神輿は、昭和三十三年（一九五八）に新道・六原・清水学区の氏子および小松会の寄付で新調し、当初は子供神輿として、稚児行列をとめない巡幸していたものである。神輿巡幸は昭和三十八年（一九六三）から四十二年（一九六七）までの中断を経て、昭和五十八年（一九八三）以降は、申し合わせの上で子供神輿を御神輿、樽神輿を子供神輿と呼ぶようになった『恵美須神社神幸祭を訪ねて』。



大和町のトウヤ飾り（松田有紀子，平成 23.5.14）

鉾の巡行については「もともと恵美須さんの鉾は、疫病を祓うために町内を一
周させていた」という話を聞くことができた。

その他

昭和三十年（一九五五）から昭和三十六年（一九六一）まで、巡幸に少年鼓笛
隊が参加した。各学区氏子の小学校三年生から中学三年生約七十名によって構成
された。

② 剣鉾と組織

唐扇鉾（大和町）

特徴

町名から大和鉾ともいう。銚は唐扇を象る。櫓と枠の一部を残して欠損してい
るため、現在は「剣建具」という台に載せて鉾頭のみ飾る。銚は唐扇を左右に配
する。銚受（額）には表にえびす像をはめ込む。受金には、ゑびす神社の柏紋が三
つ描かれる。胴巻と、櫓にとりつけると思われる金属製の飾りも現存する。剣の
箱書には「文化二歳丑九月 新調之 大和町什物 寄付人近江屋次郎吉」とある。ま
たお飾りを載せる三方の箱書に「乙亥九月吉日 建仁寺北門前町上之町 會所 元文
元歳辰九月」とあった。

鉾祭りの次第

宵宮の朝八時頃に当屋に集合して、祭壇とお飾りの準備と並行して剣鉾を組み
立てる。お飾りの準備は大和町の町内会の有志によるが、町内会の役員は全員参
加することになっている。

剣鉾を含む神具・御神体（えびす像 二体 剣鉾用・祭壇用）、お飾りが保管されるの
は、当屋が設けられる文房具屋ヤマ京の奥にある町内の蔵である。

鉾差し

昭和初期までは剣鉾も巡行に参加していたと思われる。ある氏子（一九三四年生ま
れ）は、剣鉾は町内の男性が行列の前で鈴を打ち鳴らして差しており、「男らしい

姿」だったと語った。

トウヤ飾り

剣鉾は、日幡・月幡、箱に入れた状態の金飾り、胴巻きとあわせて祭壇前に飾
られる。「神幸祭行列表」によれば、当町の日幡・月幡は鉾の先導をする形で巡行
に加わっていた。

兎鉾（亀井町）

特徴

銚は二匹の兎と日月を左右に配する。氏子によれば、お飾りに兎を用いる理由
は、町名の「亀」と一対になっているためだという。

かつては神輿のように剣鉾を昇いたとされるが、櫓と枠の大部分を欠損してい
るため、現在は鉾頭を載せる台を用いて当屋に飾るのみである。銚受（額）にはえ
びす像がはめ込まれている。

別に留守鉾が一基現存しており、氏子は雨用と呼ぶ。ともに剣・銚・銚受（額）
受金・吹散・鈴が現存する。なお、銚は両基とも同じである。通常の鉾と留守鉾
の剣にはそれぞれ「寛保三年癸亥九月」「錢屋与兵衛」、「安政二年乙卯十月」「藤



唐扇鉾（右）と月幡（左）
（松田有紀子，平成 23.5.14）



兎鉾 (松田有紀子, 平成 23. 5. 14)

倉屋彦三郎」と銘がある(鈴にも同様の銘がある。他方の鈴には「文化十三年」「三笠屋宇兵衛」の銘あり)。また、古い鉾頭を載せる台には、「再興 萬屋龜三郎父萬屋小兵衛」の銘がある。銚にはそれぞれ「寛保三年九月 錢屋与兵衛」、明治二十三年(一八九〇)五月の銘がある。吹散を収納する箱も二つ現存するが、塗の箱には「綾地緋緞子旗御領箱 寛政十二年九月 松葉屋吉兵衛」の銘がある。

鉾祭りの次第

宵宮の朝八時に当屋に集合し、お飾りと剣鉾の準備をする。鉾は御領箱・吹散とともに当屋の祭壇前に飾られる。吹散には綾地緋緞子に亀と兎が描かれている。銚受(額)のえびす像は御神体として、当屋が一年間お祀りする。五月の例大祭が終わると次の当屋に引き継ぐ。剣鉾を含めてお飾りや神具は各家で分担して保管する。なお、当屋は地藏盆やお火焚きの世話役も務める。

トウヤ飾り

当屋を務めるのは家持ちに限られており、五軒で持ち回り制をとる。かつては二軒ずつが組になって当屋を担当し、五年先まで当屋を決めていたという。



博団山 (大野啓, 平成 23. 5. 14)

特徴

銚は軍配団扇と柏を象る。銚受(額)にはえびす像をはめ込む。受金に柏紋がある。神輿のように昇くための木枠を備えるが、現在は巡行していない。櫓・柵・担い棒・胴巻・吹散を取り付け、櫓の前面に金幣を飾り、建仁寺西門前に飾られるのみとなっている。博多町の氏は、博団山をダシと呼ぶ。この屋外に飾るものとは別に、留守銚用の剣を蔵に保管しているが、これは飾らない。金燈籠の箱書には「明和二歳在乙酉/九月之吉新添口/新銚講中」とあり、御神体の明治元年の銘がある箱書には「当町内之此劔銚者往昔天正寺代蛭子之宮之祭祀初而被行候時奉造所之神像」とある。また銚受部のえびす像の胎内には、「蛭子太神宮/博多町/小年寄/議事者/町中」との墨書がある。

鉾祭りの次第

剣鉾は毎年、建仁寺西門前で、木柵を組み、吹散と胴懸を巻いて飾られる。宵宮の日の朝、八時頃に当屋に集合し、お飾りの準備や剣鉾の組立てを開始する。女性がお飾りを準備し、男性が剣鉾を組み立てる。片付けは午後四時から行い、祭礼の数日後に足洗いと称する慰労会がある。

劍鉾を含め、祭礼に用いる神具は、当屋である美容百貨フユヒロ隣の町内の蔵に保管している。ただし、えびす像三体（大、小A、小B。大は祭壇中央に祀る。小Aは鉾の額に付ける。小Bは祭壇向かって左に祀る）は、一体ずつ持ち回りで保管する。主に店をもっている家など、世話のできる家が担当し、順番は決まっていない。

鉾差し

当町には祭礼関係の文書が数点現存している。大正十一年（一九二二）の「第七十三号 博多町積立会 第二回積立金之通」(二〇二二（H二十四）年度恵美須神社祭礼博多町所有文化財関係記録写真 過去の祭礼関係写真 所収)によれば、ゑびす神社の祭礼に当町が鉾を差し参加していたが、電線が張られたことを機に途絶えたとある。その後明治三十五年（一九〇二）に旧来の鉾の棹を短縮することで再び巡行に参加したがこれもやがて途絶えた。しかし、社務所と氏子総代の交渉によって、大正六年（一九一七）より各町とも巡行に参加することを望み、当町は評議会の決議によって「劍鉾ヲ山鉾ニ改修」し、巡行に復帰している。当町の蔵は、改修された劍鉾の保管を目的として購入されたものである。

ある氏子（一九一五年生まれ）によれば、「父が若い時、社の載った山（博団山のこと）を、試しにゑびす神社の前まで数人で昇いたことがあるが、なかなかの重量で神社の前で帰るのが嫌になった」と聞いたという。

その他

氏子によれば、えびす像を預かる家は厳しく制限されており、戦前は家持ちのみが預かることができた。昔はえびす像を預かることが商売繁盛に繋がるので、進んで預かる人が多かったという。神像を預かった家は、祭りの際に鯛や御神酒を献じていた。えびす像は、家で一日と十五日に神・酒・洗米・塩を供えるが、作法は家ごとに違うという。塩の器や神の瓶などは町で貸し出している。

龍鉾（小松町）

特徴

鉾は龍、劍、柏の葉を象る。受金には柏紋がある。『恵美須神社神幸祭を訪ねて』

によれば昇山であり、棹・劍とも本来の長さより短縮されているという。櫓の前面に金幣を飾る。劍には「明治十九年五月 鋳師物部喜八郎正芳作」の銘を確認することができる。劍挟みには「于時 明治十一歳六月吉□□調之」とある。また、神具の箱書には「大正九年五月 神事用 小松町」とあった。このほか留守鉾用の劍が一基あり、当屋の祭壇前に劍建具を用いて飾られている。劍建具の裏には「安永九年九月」の墨書きがある。

鉾祭りの次第

小松町は唯一、当社の境内に町内の蔵をもつ。宵宮当日の朝九時頃、この蔵に男性が劍鉾およびお飾り・神具を取りに向かう。劍鉾を組み立てる前に、鋳を磨くのは女性である。これは基本的に女性の仕事であるが、手が空いていれば男性も参加する。一方、劍鉾の櫓づくりは力仕事なので、男性が担当する。御神輿が通過すると片付けに入り、当日の内に当社境内の町内の蔵に運び入れる。劍鉾・神具などはすべて蔵に保管される。ただし、鉾の鋳受（額）に飾るえびす像と、祭壇の神棚に飾る御神体（えびす像）については、片付けの際に二体とも、翌年当屋を設ける町内会長が預かる。預かった御神体には、毎日、水をお供えし、毎月一日と一五日には、御神酒を供える。

鉾差し

当町の鉾差しは、明治期に入り、電線をはじめとする架空線架設などを理由にいったん中断された。明治三十三年（一九〇〇）には、飯鉾を建造して巡行に参加していたが、かつての鉾差しの復活を望む声が強くなり、大正八年（一九一九）に小松町の氏子有志が発起人となり、現在のような劍鉾に改修（あるいは一部新造か）されたとみられる（『小松町「龍鉾」保存会』）。

ある氏子（一九二八年生まれ）は、「子供の頃からこの町内において、櫓を昇いた話は知っている。（櫓の）轆も、もつと長くてお神輿のようになっていたはず。ただ、明治・大正の頃の話なので自分は見ることがない」と語る。実際に劍鉾を昇いて巡行していた記憶はないという。



龍鉾（大野啓，平成23.5.14）

トウヤ飾り

櫓・杵・担い棒・胴巻・吹散を取り付けた状態で、当屋の近隣の屋外に飾られる。

当町は戸数の増加にともない、町内活動を円滑にすることを目的に、大正十四年（一九二五）十二月に四つの地区に分割された『小松町「龍鉾」保存会』。現在、当町の当屋は各地区が四年に一度輪番で担当する。このうち小松二部は、さらに西・中・東と三つに分かれているため、当屋が回ってくるのは十二年に一度となる。小松三部は、お神輿が通る時、必ずご接待をする役目がある。

平成二十四年度（二〇二二）に当屋を担当した小松四部は、今回初めて当屋宅でお飾りをした。昭和四十五年頃からは光保育園でお飾りをしてきたが、保育園は子供たちが帰ってからお飾りをしなければならず、また、子供が来て触ったりすることも危険だった。保育園側も継続は難しいこととなり、当屋宅でお飾りをするようになったという。ただし鉾については場所をとるためか、平成二十四年度と同じ場所に飾られた。

その他

鉾は当屋の近隣に設置されるため、担当する地区によって決まった場所に設置される。

昭和六十年（一九八五）五月五日には、龍鉾の修理保存を目的として、「龍鉾」保存会が発足した。同保存会は氏子の奉獻により、同年に紺地金襴の水引、戸張、胴巻、見送りの新調をしている『小松町「龍鉾」保存会』。

柏鉾（北御門町）

特徴

鉾は柏の葉を象る。銚受（額）にはえびす像がはめこまれ、受金には柏紋がある。櫓や杵組み部品が一部現存することから、担い鉾であったとみられる。剣に「建仁寺門前 浦井庄左衛門春常造」との銘がある。鉾は飾り部のみ二種類あり、氏子によれば留守鉾（オイデ、カゲボコ）と巡行用（オカエリ）であるとされる。雨の年には留守鉾を使用した記憶があるというが、どちらの鉾が留守用かはわからない。剣も二つあるはずだが現在所在が不明である。現在は一基のみ飾るが、一時は二基とも飾ったという。また当町のみ、吹散をトミオ（富尾）と呼んでいる。

柏の葉の軸には「宝永三年九月十六日」との銘がある。御領箱には明和三年九月の墨書があり、蓋裏には「明治式拾三年五月富尾箱塗替」ともある。このほか箱書が多く残されており、剣の箱書には宝暦十一年（一七六一）九月、棹の箱書には元禄三年（一六九〇）七月、トミオの箱書には明治三十四年（一九〇一）とある。

鉾祭りの次第

劍鉾の組立て、当屋のお飾りなど、祭礼は町内会が執行している。劍鉾・神具・お飾りなどの保管は町内の蔵である。

鉾差し

もともと多びす神社の神輿巡幸時に、柏鉾も櫓に立てて巡行しており、当町の町民が紋付き袴姿で巡行に供奉していた。昭和初期に鉾を立てる櫓が倉庫の火事で焼けたため、鉾を立てることができなくなったという。当時は、鉾やお飾りを、金属、木、布に分けて三、四か所で管理していたため、櫓だけの被害で済んだのだという。



柏鉾（鈴木耕太郎、平成 23.5.14）



松月鉾（鈴木耕太郎、平成 23.5.14）

トウヤ飾り

当屋は、岡田邸のガレージに設けられている。当屋の祭壇前に劍鉾、トミオを納める御領箱（柏鉾北御門町」と書かれている」と、かつて巡行の際に町内の樽神輿に飾ったとみられる刀と鏡を、左右に分けて飾る。

北御門町のお飾りは、昔は豪華だったと伝わるが、今は一部しか使用しておらず、倉庫に納めたままの道具もあるという。

平成十五年（二〇〇二）に町内の倉庫から、江戸期の鉾飾りが百点ほど発見されたが、櫓を復元しないことには、お飾りをすべて飾ることはできない。大正から昭和初期の柏鉾の写真があったとされるが、今回の調査で確認はできなかった。焼失前の柏鉾は松月鉾のように櫓や杵組み、胴巻など一式があったという。

松月鉾（東轆轤町・中轆轤町・西轆轤町）

特徴

銚は松と日月を象る。銚受（額）にはゑびす像をほめこみ、受金には柏紋があしらわれる。櫓の前面には金幣を飾る。部材がすべて残っているため、櫓・杵・担い棒・胴巻・吹散を取り付けた状態で「据え鉾」として屋外に飾る。この劍鉾とは別に、住吉神社（兵庫県篠山市）に奉納された旧鉾が、彼の地に伝えられている（後述）。

松月鉾は、創建が万延元年（一八六〇）であり、明治四十一年（一九〇八）と

昭和九年（一九三四）に改修が行われている。そのうち昭和九年には、胴巻、櫓、担い棒の飾り金具、見送りなどが新調されたといわれ、明治四拾五年五月松月会

「昭和拾年乙亥五月吉辰」などの箱書とも一致する。また現存する昭和十二年（一九三七）五月十五日の「松月鉾収支決算書」から、昭和十二年（一九三七）に松月鉾の修理（あるいは新調）が行われたこと、その資金の半分を伊藤喜商店の主人伊藤喜三郎が寄付したことがわかる。このほか、当屋の祭壇に祀る小祠には「天保拾四年歳癸卯九月 寄付綿屋吉郎衛門 細工人 綿屋喜兵衛」との墨書がある。

劍の箱書きは「明治四拾老年戊申五月之新調」とある。また劍鉾の櫓に胴巻を固定するための黒塗りの木杵には「初代 木村定治郎」との銘がある。胴巻の裏には「寄付者伊藤喜三郎 昭和拾年乙亥五月」の墨書を確認できる。

松月鉾は東西方向に立てるが、西が表で東が裏であるという。西側の額に御神体（ゑびす像）をほめ込むのは、鉾のすべての準備を整え、櫓と御幣を飾った後に行われる最後の作業である。

鉾祭りの次第

その年に輪番にあたった町内で当屋を設ける。祭礼を取り仕切るのは、東轆轤町（ろくろ）町、中轆轤町、西轆轤町の合同で結成された松月会である。松月会の会

員は、常任理事、松月会の理事（非固定制）、町内会長と、町内をさらに区分けした「組」の各組長の有志である。松月会と町内会は全く別組織だが、町内会長は松月会の副会長を兼任することになっている。

松月鉾は松原通に面した伊藤喜商店前に設置される。宵宮の午前八時三十分頃、当屋前に松

月会のメンバーが集合し、午前九時頃からお飾りおよび鉾の組立てを始める。

氏子によれば、当町に八組ある町会の組長を中心に準備をし、町内総出というわけではないという。力仕事が多い劍鉾の組立ては、基本的には男性が当たるが、女性が手伝うこともある。お飾りをするのはその年の当番の地区であり、それ以外の町が鉾の準備を担当するという。

宵宮の夜には当屋で宴会をする。これは松月会の宴会なので東轆轤町、中轆轤町、西轆轤町全部の住民が参加する。翌日の神幸祭では夕方に片付けをするのみである。

お飾り、劍鉾、神具などは町内に二つある蔵（伊藤喜商店の蔵・相槌稲荷の蔵）に保管される。劍鉾は伊藤喜の蔵、相槌稲荷の蔵にはお飾りとその他の道具というように管理している。祭りの日に雨が降った場合は鉾を飾らず、当屋飾りと一緒に鉾頭だけを飾る。

トウヤ飾り

当屋のお飾りは江戸もしくは明治初期のもので、現在使っているものは二代目である。現在のお飾りは、氏子有志が多額の寄付をして作ったものである。

その他

当番町は東轆轤町、中轆轤町、西轆轤町の順に輪番制であり、一年交代である。当屋はその年に輪番が当たった町内の家に設けられる。

西轆轤町の氏子の話では、旧鉾は昭和十七年（一九四二）に住吉神社（兵庫県篠山市）に奉納されたと伝わっていたが、長らく所在不明だった。この旧鉾は平成十五年（二〇〇三）に六十年ぶりに住吉神社の蔵から発見された。その際発見された墨書きから「万延元庚申歳九月吉日 轆轤町」、「明治四拾壹年戊申五月新加修繕 轆轤町」、「明治四拾五年壬申五月新添 松月會」の文字が確認できた。また別に「明治四拾五年」の寄贈者名簿らしき文書があり、伊藤喜三郎の名もある。

現存する松月会という組織が成立した時期は不明だが、前述の箱書から明治四十五年（一九一三）には存在していたことがわかる。



菊鉾（松田有紀子，平成23.5.20）

菊鉾（山城町）

特徴

銚は十六弁の菊に蝶を象る。銚受には「山城町」と書かれる。劍鉾の劍、銚、鈴が現存するが、受金、吹散、棹は所在不明である。氏子によれば菊鉾は少なくとも明治以前の製作だという。近年は飾っていないが、平成二十四年（二〇一二）の神幸祭で、調査のために町内の所有物などを保管している蔵から出していただいた。町内会長によれば、菊鉾もかつては「担ぎ鉾」であり、道具も一式揃っていたが傷んで出せなくなったという。ただし、それでは山城町だけ巡行に参加できなくなってしまうので、子供たちのために大正六年（一九一七）に武者鎧を十二体作り、武者行列として参加するようになった。武者行列は町内の氏子のみで行っていたが、昭和六十年（一九八五）頃には、すでに廃止されている。

鉾祭りの次第

当屋に祭壇とともに武者鎧を飾るため、当町は山城武者組と呼ばれる。これは後述する武者行列に由来する。氏子によれば、昔は鉾に台（檣のことか）があったという。お飾りの準備や武者鎧の飾りつけは町内の氏子で行う。

お飾り、神具、鉾などは町内持ち回りで保管する。町内会の記録などを保管する蔵は、明治期以降の当町にまつわる文書十数点と、巡行の際、町内の樽神輿に飾っていた鈴八個、鏡、刀などの神具が保管されている。御神体を納める小祠のみ、町内会長が保管する。

トウヤ飾り

もともと当屋は毎年変わるものだったが、昭和四十五年（一九七〇）頃からは鰐邸で行われてきた。長らく菊鉾は所在不明であったため、当屋の祭壇には、御領箱と武者行列に使用された武者鎧が飾られている。御領箱には山城町の旗を入れる。当屋の入り口に掛ける幕には、「昭和三十四年五月寄進 松本平三郎」とある。

③ その他の鉾

幸鉾

『恵美須神社神幸祭を訪ねて』に次のような記載があり、「幸鉾」が存在していたことがうかがえる。

恵美須神社に残る資料 神幸祭行列表に依れば、日幡、月幡に続き劍鉾

― 兎鉾 博団山 龍鉾 柏鉾 松月鉾く幸鉾の記述がある。しかし、幸鉾の所在は不明である。また、現存する唐扇鉾、菊鉾の名が神幸祭行列表に記載されていないのは何故だろうか。

日幡・月幡

大和町の当屋に飾られる日幡と月幡は、劍鉾の剣と同形の木製の剣（黒塗りで金色の縁取りあり）に、日月の幡が取り付けられたものである。現在は、祭壇の左右に、劍部分だけ台にのせて飾り、その後ろに幡を掛ける。

御幡

御幡は、いずれも幡が取り付けられ、枠に立てられる鉾である。池殿町の御幡の鉾先は、極彩色の火炎の中心に三つ巴があしらわれた作り物で、

黒塗りの棹は太く、棹には龍の鍔金具があしらわれている。紫色の幡には、五色の縁取りがなされ、「丸に蔓柏」紋があしらわれている。棹には、幕がめぐらされる。町内に飾られる。

新シ町の御幡は、先述の「神幸祭行列表」によれば松月鉾の後ろについて巡行していたという。鉾は、三叉鉾である。幡は七宝崩しの金欄で、「丸に三つ柏」紋があしらわれている。幡は棹のところで折り重ねられており、棹を切つて短くしたものと思われる。町内に飾られる。

薬師町の御幡は、先述の「神幸祭行列表」に真榊の次に位置していたというが、現在は所在不明である。



御幡（新シ町）



御幡（池殿町）
（いずれも大野啓，平成 23.5.14）

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

「龍鋒」保存会『小松町「龍鋒」保存会』（保存会発足時の趣意書、一九八五年）

小出祐子「近世建仁寺境内における宅地開発と参詣空間の成立において」博士論文（学術）、京都工芸繊維大学、二〇〇二年

小出祐子「近世建仁寺門前蛭子社における参詣空間の成立について——十八世紀後半の普請計画を通して——」（日本建築学会計画系論文集五百五十三、二百八十三—二百九十頁、二〇〇二年）

恵美須神社・恵美須神社氏子代表『恵美須神社神幸祭を訪ねて』（恵美須神社、二〇〇四年）

主原信弘氏撮影DVD『二〇一二（平成二十四）年度恵美須神社祭礼 博多町所有文化財関係記録写真 過去の祭礼関係写真』（二〇一二年）

劍鋒祭礼記録・古文書

「建仁寺文書」（建仁寺藏、関西大学永井規雄教授を中心とした平成八年度～平成十年度科学研究費補助金（基盤B）を得て実施された調査研究によって発見。元禄五年（一六九二）を初見とする江戸時代の蛭子社に関する史料八十点を含む。その成果は平成十一年四月に『近世東山の景観構成諸要素に関する文献的研究』にまとめられた）

「祇園社家記録」（『史料 京都の歴史 第十巻 東山区』一九八七年、平凡社にも関連記事が所収されている）

「山城名所寺社物語」（『新修京都叢書』第二十二巻、臨川書店、一九七二年）

「第七十三号 博多町積立会 第二回積立金之通」（博多町藏、大正十一年（一九二二）、『二〇一二（平成二十四）年度恵美須神社祭礼 博多町所有文化財関係記録写真 過去の祭礼関係写真』、二〇一二年）

（松田 有紀子）

御霊神社（上御霊神社） 御霊祭

毎年五月十八日

御霊神社

京都市上京区上御霊堅町

① 祭礼と由緒

地域概要

御霊神社（通称 上御霊神社）は、もともと上出雲寺があったところに、平安遷都に際して勅願により、早良親王（崇道天皇）ら不運のうちに死を遂げた八柱の御霊を祀ったことに始まると伝えられている。その後、明治に入り、五柱が増祀され、現在は十三柱の祭神を祀る。

氏子地域は、『京都御役所向大概覚書』によれば東は賀茂川まで、西は東堀川まで（ただし一条通り北は小川通まで）、北は野際まで、南は出水通までとある。現在も、氏子地域はおおよそ変わりなく、北区の紫明学区の一部、上京区の室町学区、京極学区、中立学区、そして小川学区・滋野学区・春日学区の一部にまたがり、東西約一・七キロメートル、南北約三・七キロメートルの範囲である。氏子地域は、鴨川沿いに東から北にかけては吉田神社、田中神社の氏子地域に接し、さらに賀茂川沿いに下鴨神社（おおよそ北山大橋まで）、上賀茂神社の氏子地域に接する。南は下御霊神社、西は紫野今宮神社の氏子地域に接する。

氏子地域のうち、御霊神社の北方にあたる小山郷、出町周辺の今出川口、鴨川沿いの出雲路地区（末広会と称す）が、それぞれ神輿を奉じて昇ぐ。文政六年（一八二三）十二月の「立売親町控覚帳」（立売親八町組文書）から、今出川口にあたる上御輿町、下御輿町は、近世期には御霊神輿の維持修理と駕輿丁など人夫の手配をしており、それが町名の由来となっていたこと、人夫の賃金が年々高くなってきていること、神輿渡御にかかる時間が年々長くなってきていることが知られる。

劍鉾は、一町もしくは複数の町が一组となって護持しており、護持団体の数は現在十三組ある。その分布は、小山郷に二組、出町周辺に三組、室町通から新町通にかけて八組である。劍鉾を巡幸列に供奉することを出鉾（しゅっぽ）と言い、町内で飾るだけの場合を居祭りと呼んでいる。平成二十三年にお飾りされたのは七組で、そのうち出鉾したのは四組、居祭りが三組、平成二十四年は五組のうち、出鉾が三組、居祭りが二組であった。ただし、出鉾の劍鉾はいずれも、近年は鉾差しを招いておらず、杵造りで曳行するかたちである。

天明七年（一七八七）刊行の『拾遺都名所図会』に描かれた「御霊神事」には「けん十八本」とあり、そのうち十三基の劍鉾が描かれている。御霊神社所蔵のアルバム「御霊神社所蔵宝物史料」（昭和九年十一月作成）には、十七基の劍鉾が収載されており（ただし、一基は写真なし。一基は一部のみ、それにより『拾遺都名所図会』の十三基の劍鉾が何であるか、ほぼ比定できる。つまり、前景左から順に、太刀鉾、劔鉾、松鉾、枝菊鉾、桐鉾、牡丹鉾、葵鉾、鷹羽鉾が描かれ、前景から中景の間、画面からはみ出た部分に描かれなかった五基があると思われる。中景は右から紅葉鉾、矢的鉾、靄鉾、寶鉾、亀鉾が描かれている。なお、これらの劍鉾の後ろに描かれる「けん八本」は、現在も渡御に八本供奉している幸鉾と解することができる。

御霊神社所蔵の「御鉾吹散等奉納并町方江渡覚」は、劍鉾および吹散の寄進等の記録をまとめたもので、巻末近くに「永仁二年／安政四巳年迄五百五十四年」などと記載があることから、安政四年（一八五七）に編纂されたものと考えられる（全支は資料編に掲載）。また、紅葉鉾を護持する徳大寺殿町の「御吹散入」とされる長持は、享和二年（一八〇二）に新調されたものであるが、その蓋裏に貼付された「御鉾順番次口（第九カ）」は、その内容から、「御鉾吹散等奉納并町方江渡覚」以降、「御霊神社所蔵宝物史料」以前の記録である。これらの記録から、御霊祭に関わる劍鉾の名称および護持組織の概要がわかる（次ページ表参照）。

祭礼次第

御霊祭はもともと一か月にわたる祭りであり、七月十八日の御輿迎（神幸巻）で御旅所に渡御し、八月十八日の御霊祭（還幸巻）で還御していた。御旅所は京都御苑の東側、

御霊祭の劍鉾と護持組織の変遷

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
柏鉾	寶鉾	茗荷鉾	矢的鉾	紅葉鉾	亀鉾	蠶鉾	牡丹鉾	桐鉾	鷹羽鉾	菊鉾	葵鉾	蟹鉾	枝菊鉾	松鉾	劍鉾	刀鉾	〔安政四年(一八五七)カ 「御鉾吹散等奉納并町方江 渡覺」(御霊神社所蔵) 〕
中木之下町	清蔵口五町組	木之下二町組	四軒在家町	西洞院講中	新御霊口町	内構町	上柳原町	室町頭町	不動前町	御霊中町	寺町八町組	馬場四町組	玄蕃町	武者小路町	今出川町	御霊口町	
柏	宝	鳳凰	矢的	紅葉	亀	蠶	牡丹	きり	鷹の羽	菊	葵	鯨	菊鉾	松鉾	蛇鉾	太刀	〔御鉾順番次第 「徳大寺殿町所蔵」 〕
中樹之下町	継孝院町	上樹之下町	柳風呂十三町組	徳大寺町	新御霊口町	内構町	上柳原町	室町頭町	不動前町	〔一〕町	立売八町組	馬場町	玄蕃町	武者小路町	今出川町	御霊前之町	
柏鉾	寶鉾	鳳凰鉾	茗荷鉾	紅葉鉾	亀鉾	蠶鉾	牡丹鉾	桐鉾 (残(奈物))	鷹羽鉾	菊鉾	葵鉾	蟹鉾	枝菊鉾	蓬萊鉾	龍鉾	浪太刀鉾	〔昭和九年(一九三四) 「御霊神社所蔵宝物史料」 (御霊神社蔵) 〕
京極学区 (元、中木之下町)	継孝院町 (元、清蔵口五町組)	当社蔵 (元、上木ノ下町)		徳大寺殿町 (元、西洞院講中)	新御霊口町	※写真なし	上柳原町	明治二十年焼失 (元、室町頭町)	上木下町 (元、寺町不動前町)	室町頭町 (元、御霊中町)		社務所蔵 (元、馬場四町組)	玄蕃町	無車小路町	今出川町	出町青龍町 (元、御霊前町)	

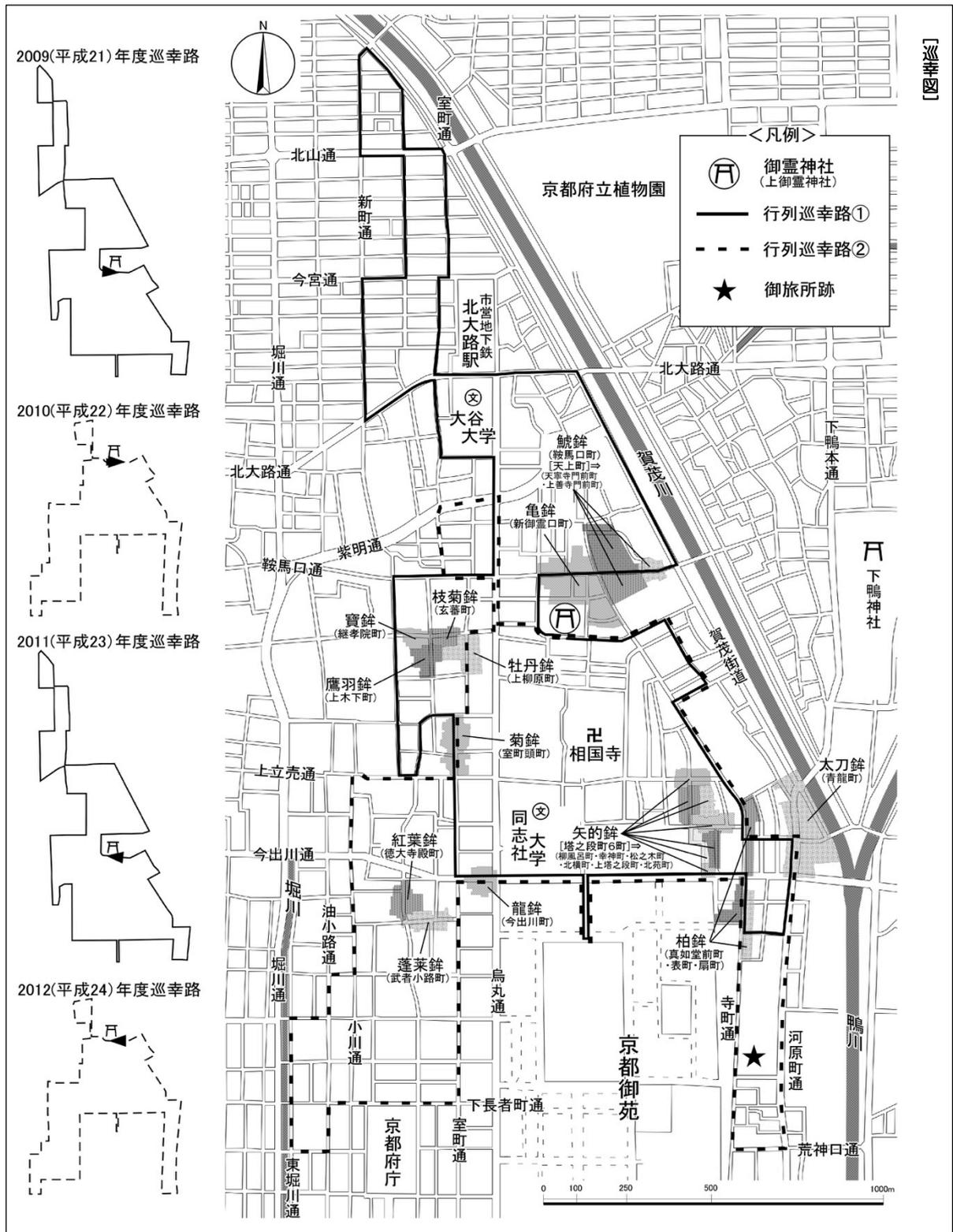
13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
柏鉾	鷹羽鉾	牡丹鉾	寶鉾	紅葉鉾	亀鉾	菊鉾	鯨鉾	矢的鉾	枝菊鉾	蓬萊鉾	龍鉾	太刀鉾	〔平成二十二年(二〇一〇) 「御霊祭行列書」 〕
上京区表町 上京区扇町	上京区上木下町	上京区上柳原町	上京区継孝院町	上京区徳大寺殿町	上京区新御霊口町	上京区室町頭町	上京区鞍馬口町 上京区天上町	上京区塔の段六町	上京区玄蕃町	上京区武者小路町	上京区今出川町	上京区青龍町	

下御霊神社の氏子地域との境界に近い広小路通寺町東入る中御霊町にあったが、明治四年(一九七一)に廃絶したといわれている。御旅所がなくなつてからの御霊祭は、明治九年(一八七六)からは、五月一日に神幸祭、五月十八日には還幸祭としてそれぞれ巡幸が行われるようになった(矢的鉾記録)。昭和四十三年一月十五日に本殿が焼失し、その影響で渡御行列は一時中断された。昭和四十五年五月に本殿が再建され、渡御行列は昭和四十六年五月十八日(還幸祭)に巡幸が復活された(鯨御鉾再興由来記)。現在は、五月一日に社頭之儀のみを行い、五月十八日の還幸祭のみ渡御之儀が行われている。

なお、御旅所跡は、明治三十四年(一九〇一)に、のちの立命館大学にあたる京都法政学校が購入し、校舎を建てた(立命館創立五十年史)。現在は、京都府立医科大学付属図書館などが建っている。

神輿が御旅所に鎮座している間を、御旅の間(おたひのあいだ)といい、その間に、戦前までは社頭で巫女による湯立神楽が行われた。古くは御霊神社の巫女が、現在の上京区北小路室町に住んでおり、永和三年(一三七七)には、その巫女宅が火元となり御霊神社が類焼したことが知られている(後愚昧記「永和三年二月十八日条」)。

現在は、御旅の間の行事として、五月五日に氏子青年会の主催で、子供神輿の巡幸が行われている(年前的部は紫明学区、午後の部は室町学区と新町学区)。また、五月十七日の宵宮には、和太鼓の奉納がある。



さて、現在の祭礼の次第は、まず神幸祭に先立って、四月下旬に三基の神輿が神輿蔵から拝殿に安置される。五月一日は、十三時頃より拝殿で社頭の儀が行われる。参列者は、神社役員、氏子青年会ら二十名ほどで、三十分ほどの式典が済むと社務所で氏子総代会が開かれる。

還幸祭までの間に、居祭りや出鉾の鉾について、宮司がお祓いをする場合がある。

平成二十三年の場合、十三日に真如堂前町・表町・扇町の柏鉾（十時から、十五日は塔之段六町の矢的鉾（十一時から、十七日は武者小路町の蓬萊鉾（十九時から）の二か所だった。

五月十八日の還幸祭は十一時頃、神輿の舁き手が集まり、三つの神輿会がそれぞれ、集団で参拝する。十一時三十分より、拝殿にて神事が行われた後、末広会、今出川口、小山河の順に神輿が拝殿から降るされ、装飾品が取り付けら

れる。十二時頃より神社の南側の四脚門（南閘）の外にて神幸列の整理を始め、神職が手分けしてお祓いをしてまわる。十二時四十分には、神幸列が発する。

巡幸のコースは、氏子地域のうち南半分を重点的に巡るルートと北半分を巡るルートがあり、隔年交替で巡幸している。これは、五月一日と五月十八日にそれぞれ巡幸があった頃の名残で、当時は、五月一日に北を巡幸した場合、五月十八日には南を巡幸し、その翌年はその逆の組み合わせをとっていた。現在は巡幸が五月十八日の一回であるため、南北は隔年となっている。この南北ルートにそれぞれ二パターンあり、合計四パターンである。

平成二十二年は南ルートで、太刀鉾が先頭、龍鉾が二番である。北ルートの時は龍鉾が先頭で太刀鉾が二番になる。劍鉾の順番が入れ替わるのは、この先頭二基のみであるが、太刀鉾は長らく出鉾してないので、事実上は龍鉾が常に先頭となる。

平成二十一年より、三基の神輿が今出川御門より京都御苑に入り、京都御所の北口にあたる朔平門の前に勢揃いするようになった。また、平成二十四年には、牛車（御車）も京都御苑に入るようになった。京都御苑の地は、江戸時代には公家屋敷が立ち並んでおり、御霊祭の巡幸路であったが、明治になって巡幸路から外れていた。

神輿が神社に帰参するのは、十九時を過ぎた頃である。境内で神輿が何度も繰り返し練られるため、拝殿に安置されるのは二十一時頃になる。その後、神輿昇きが解散した後、二十二時頃より神事が行われ、御霊祭の終了が確認される。神霊を遷すのは、人目を避けて深夜に行われる。

行列次第

毎年、御霊神社社務所によって「御霊祭行列書／御霊祭渡御道筋」が発行され、一般に配られる。行列次第はそこに詳しいが、その年に出仕可能と思われる規模を示した次第であって、実際にはそれよりいくぶん縮小された行列となる。

平成二十三年の行列次第について、実際に確認できたのは、次の通り。

太鼓、御霊祭旗（幟一本）、先祓（素襖二人）、獅子（赤袴と青袴）、神（白丁一人）、龍鉾（曳鉾）、蓬菜鉾（曳鉾）、枝菊鉾（曳鉾）、鷹羽鉾（曳鉾）、幸鉾（八本）、八乙女（八色）、禰宜（騎馬）、金棒（素襖二人）、太刀、箭、稚児、鬣、猿田彦神旗、牛車（猿田彦、

若武者、獅子、太鼓、神輿（小山郷）、神輿（今出川）、神輿（末広会）、神職
御霊神社の神輿は三基あり、そのうち文禄四年（二五九五）に後陽成天皇から寄進されたと伝える神輿は今出川口が、元和五年（一六一九）に後水尾天皇が寄進されたと伝える神輿は小山郷が、明治十年（一八七七）に元貴船社より奉納されたと伝える神輿は末広会が昇く。神輿のかけ声は、小山郷が「ようさあ、ようさあ」、今出川口が「ほいっと、ほいっと」、末広会が「えらいやっちゃ、えらいやっちゃ」とそれぞれ異なる。

なお、牛車は、慶長年間（一六〇〇年頃）に後陽成天皇が寄進したと伝えられており、猿田彦の神面を安置して「御車」として巡行する。

御霊祭の渡御に際しては、祭儀委員長（一名）、副祭儀委員長（数名）をたて、学区ごとに人員を配置したり、学生アルバイトを活用したりしている。

由緒と歴史

安政四年（一八五七）編纂と思われる「御鉾吹散等奉納并町方江渡寛」には、十七本の劍鉾の由緒が次のように記されている。

太刀鉾（刀鉾）	永仁二年（二九四）	伏見宮御寄附
龍鉾（劍鉾）	永享三年（一四三二）	後花園院御寄附
蓬菜鉾（松鉾）	文明二年（一四七〇）	後土御門院御后藤子御寄附
枝菊鉾	永祿四年（一五六二）	正親町帝（御寄附）
桐鉾	慶長六年（一六〇二）	豊臣秀頼公御母堂（御寄附）
矢的鉾	慶長十年（一六〇五）	細川宰相忠興公（御寄附）
鯨鉾	元和九年（一六三三）	後水尾帝（御寄附）
葵鉾	寛永二年（一六二五）	東福門院（御寄附）
菊鉾	寛永三年（一六二六）	後水尾帝（御寄附）
亀鉾	寛永十二年（一六三五）	明正帝御寄附
茗荷鉾	明暦三年（一六五七）	伏見宮御寄附
紅葉鉾	寛文九年（一六六九）	新廣「」御免（新廣義門院カ）
寶鉾	元祿七年（一六九四）	東山帝御寄附

牡丹鉾	宝永六年（二七〇九）	近衛殿御寄附
鷹羽鉾	享保二年（二七一七）	津山少将御母堂御再興
鶴鉾	享保四年（二七一九）	中御門院御平癒御礼
柏鉾	明和三年（二七六六）	有栖川宮御裏（御寄附）

明治二年（一八六九）までは、今出川御門を通過して禁裏の北面の朔平御門に神輿を奉安していたという。その後も、大正八年（一九一九）には、今出川御門の東脇にあった桂宮において、貞明皇后の拝謁を受けたという。

昭和四十六年三月二十五日付で、御霊神社氏子会から鉾町へ配布された文書に「御霊祭は昭和四十三年以来居祭でありましたが、本年度は氏子総代会の決議により来る五月十八日に渡御之儀執行の事と相成りましたのでご諒承被下度、就きましては当日午後一時迄に社頭に御着鉾御参列下さいます様」とあり、昭和四十三年から四十五年までは居祭りだったことがわかる。なお、同資料には、氏子会からの出鉾補助金として一万円が準備されていることもわかる。

（福持 昌之）

② 剣鉾と組織

太刀鉾（上京区青龍町）

概要

太刀鉾は、浪太刀鉾とも呼ばれ、現在、新旧で二対（計四基）の鉾がある。いずれも、銚が左右それぞれ刃先を上に向けた三振の刀で、刀を囲むように波濤形の銚がつく。銚受は受金と一体のもので、菊紋と龍があしらわれている。吹散は、菊紋のもの、龍柄の綴織と二流が伝わる。現在は居祭りをするのみであるが、巡行に参加していた時は、「古いほうは晴れ用、新しいほうは雨用と使い分けていた」「浪太刀鉾は祇園祭の長刀鉾のように、クジ取らずで先頭に行く」と伝えられている。箱の蓋裏にも「御鉾第一者号刀鉾」と墨書がある。ただ、いつごろまで巡行に参加し

ていたかは定かでない。

御霊神社「鉾展」資料（平成六年）に、太刀鉾は「永仁二年（一二九四）伏見天皇御寄進」とある。現存の鉾の製作年代は不明であるが、伝来している剣箱には、蓋表に「上御霊八所大明神御劍箱／御霊口町組中」、蓋裏には「当社御霊八所大明神之御鉾第一者号刀鉾、近年依為零落、一町中年寄并若輩各一同、励願望令再造之弥々神威所御有納受哉（中略）／寛文第十二子年霜月吉日／年寄／長兵衛／町衆中」と墨書がある。このことから、この鉾が寛文十二年（一六七二）に御霊口町によって再建されたこと、御霊神社の御鉾の第一であると考えられていたこと、刀鉾と呼ばれていたことがわかる。また、安政四年（一八五七）頃の成立と思われる御霊神社蔵「御鉾吹散等奉納并町方江渡寛」に「延享四年七月十日、從二條政所御方御奉納、刀鉾預り、御霊口町江以御指図相渡、至明和元年甲申年、十八ヶ年ニ成ル」などあり、その後に記されたと思われる紅葉鉾の長持の蓋裏の「御鉾順番次第」に「壱番 太刀鉾 御霊前之町」とあることから、護持していた地域の変遷がうかがえるが、青龍町に移った経緯や時期は不明である。

鉾祭りの次第

青龍町のうち南青龍町の町内会によって、出町橋西詰の妙音弁財天の参集所に飾られる。太刀鉾など諸道具の保管場所は御霊神社であり、巡行日の前日に御霊神社から運び出し、巡行翌日に片付けるものとされている。しかし、巡行の前日は御霊神社の境内は露天商で賑わっているため、運搬の車が境内に入らず、現在は二、三日前に出すことにしている。

事前の準備として、まず、町内の回覧板で飾り付けと片付け日の参加人数を把握する。これは、当日の弁当の数を把握するためにも重要で、剣鉾に関する費用、二日間の弁当や飲み物、また供物の類（オカガミサン、御神酒、野菜など）は町内会費から賄われている。なお鉾を出す日が大雨の場合は、鉾などが濡れてしまうのでその年は祭りに参加しないという。

飾り付けの日には軽トラックと乗用車で御霊神社に行き、男性が数人で蔵から長持と隨身人形の入った木箱を運搬する。太刀鉾を収納する長持は蔵に二つあるが、い



太刀鉾のお飾り（青龍調）（秦和也 平成 24.5.17）



祭壇の右側前方に飾られる隨身人形（秦和也 平成 24.5.17）

つも使用するものは一つの長持に集めてあり、それだけを運び出す。妙音弁財天に運び込むと、数人で飾り付けを行う。平成二十四年は男性三人、女性三人であり、特に女性の禁忌はないとのことである。鉾の組み立てに関して、縄の絡め方などの伝承はあまりない。飾り付けが終わると昼食をとり、その後解散する。なお、片付けの日も昼食を伴い、供物を分ける作業がある。献酒は、個人が買い取り、その収益は町内会の雑収入へ入れるという。

鉾差し

鉾差しについては不明である。

運搬しない長持の中には、五尺ほどの棹が入っているという。もともと長かった棹を切断したものか、短い棹を新調したものかは、不明である。

トウヤ飾り

妙音弁財天の参集所では、祭壇中央に御神号の牛王宝印の軸を掛ける。向かって左側に吹散、右側手前には隨身の人形二体を飾る。これは、箱書から大正五年（一九一六）五月に青山長祐により寄進されたことがわかる。『明治大正昭和 京都人名

録』によれば、青山長祐は、明治四十三年の「第十五版 日本紳士録」（交詢社）に掲載されており、出町今出川下ルに居住した雑貨商であった。また、学校法人京都文教学園の前身である私立高等家政女学校の設立者の一人でもある（設立は明治三十七年二月）。

なお参集所は、祭りの期間だけ場所を借りているという認識である。

その他

町内会費から毎年二万円、鉾の修理などのために積み立てをしているという。

（秦和也）

概要

龍鉾（上京区今出川町）

今出川町が所有する龍鉾は、かつて劍鉾とか蛇鉾とも呼ばれていた。現在、二基ある。このうち一基を居祭りとして会所に飾り、もう一基は台車に載せて、出鉾する。いずれも鍔は剣で、鍔受から左右に三振ずつ配されている。その剣は、劍鉾の剣をそのままに小ぶりにしたような意匠である。その鍔の剣に絡みつくように、左右に一匹ずつ龍が配されており、鍔受の上面、剣の根元に配される宝珠を守っているようにも見える。鍔受はいずれも、瓢箪もしくは分銅のようにくびれた輪郭を持ち、鮮やかな青地に雲模様があしらわれている。

居祭り用の鉾は、鍔の六本の剣の鏑はスリットが入っているが、出鉾する鉾の鏑は凹型で赤の着色がされている。また、居祭り用の鉾には受金がないが、出鉾する鉾には、鍔受と共通する意匠（青地に雲文様）の受金がある。

伝承では、永享三年（一四三二）後花園天皇の寄進というが、詳らかではない。茎に「正徳式年壬辰年七月吉祥日」と刻まれた剣があり、正徳二年（一七二二）の製作であることがわかる。吹散は、今出川町では見送りと呼ばれ、台車に飾られる。

古いものは、箱書から寛政十一年（一七九九）に西園寺殿御寄付による吹散があることがわかるが、そのほかに、島津家より寄贈されたと伝える吹散が二流ある。

現在、台車に取り付けられるのは、箱書に「昭和三十九年五月吉日 今出川町」とあ



今出川通に組まれた龍鉾（今出川町）
（吉村旭輝、平成24.5.18）



龍鉾のお飾り（内田みや子、平成23.5.18）

る吹散である。

銚子を収納する布団（龍鉾蒲団）に「文政十二年己丑八月新調／年寄 唐木屋半四郎／五人組 平野屋太七／桔梗屋久兵衛／詠人 和田屋藤四郎／建仁寺門前 細工人 銚師 庄左衛門」とあり、文政十二年（一八二〇）に浦井庄左衛門が銚子を作成したことがわかる。

台車は、平成四年五月に北野誠一郎氏により寄贈されたものである。

銚祭りの次第

今出川町では、御霊祭の前日、五月十七日午前十時から準備を始める。会所や光明寺に収められている銚や台車の部材を、いったん外に運び出し、会所に銚を飾るとともに、今出川通の南側（西行）外側一車線を使用して台車を組み、台車にもう一基の銚を立てる。日中は、会所飾りと台車の剣銚はそのまま飾っているが、夜間は会所を閉め、台車は近隣の光明寺の敷地（駐車場）に移して保管する。

御霊祭当日、町会長と副会長が午前九時に光明寺の駐車場に集まり、銚を今出川通の会所前に移動させる。十時に、町会長と副会長によって前日に外されていた見送りや台車の飾り付けが行なわれる。まず台車の四方に幕が、その四隅に二年前に新調された飾りが取り付けられる。そして台車の前方の竹竿に、赤地に「龍鉾」と

記された丸提灯を一对取り付けける。最後に剣銚の棹の後側に紫地で菊紋が入った見送りを取り付けける。

十二時、会所には袴姿の町役員と白丁姿の台車の押し手が集まる。クーラーボックスに渡御行列で飲むドリンクを入れ、台車の幕内に収納する。

十二時十五分、会長から順に会所飾りに置かれていた杯で御神酒を口にす。全員の清めを終えると白丁を着た三人が台車を押し、台車の後ろに袴を着た町役員五人が続ぎ、御霊神社へ出発する。今出川通を出た剣銚は鳥丸通を左折して北上する。

京都家庭女学院の北を右折し、上御霊前通にてすでに行列を整えた渡御行列の順番に加わる。渡御行列では獅子舞の後に続く榊の後ろに入る。龍鉾は、現在十三基ある剣銚のうち、太刀銚と隔年で先頭を行くことになっているが、近年、太刀銚の出銚はない。

午後三時頃、渡御行列の先頭が室町通中立売付近にさしかかると、休憩をとる。龍鉾は室町通の花立町付近の道路の上にて休憩となる。この時、事前に地元の仕出し店に注文しておいた鯖寿司と中華料理（唐揚げ、麻婆豆腐等）を食べる。

午後三時四十分、ふたたび渡御行列は出発し、冷泉家前（この年は喪中のためあいさつなし）や京都御苑（神輿や御所車は御苑の中へ入る）を通過して、五時五十分、御霊神社に到着する。ただし、御霊神社の境内には入らず、昼に町内から神社に向かった道を通って会所へ戻る。午後六時五分、会所に到着した龍鉾は会所前の今出川通に置かれ、随行者は帰宅する。

午後六時二十分に会所に着替えた役員が戻り、龍鉾の解体や会所飾りの片付けにあたる。

七時にすべての道具を会所に収め、解散となる。

銚差し

今出川町は現在、台車に剣銚を立てて曳行

している。昭和二十年代後半までは神幸祭があったため、その日は劍鉾の鉾差しが来ていたという。この鉾差しは、はっきりとはわからないが上賀茂の方から六人来ていたと伝えられている。渡御行列では、この六人のうち四人が交代で鉾を差し、二名は手伝いで、今出川町の人は、その後ろを袴を着て歩いた。

トウヤ飾り

会所には龍が染め抜かれた紫色幕が張られ、鉾頭を飾る。ただし、天井が低いので、鉾は鉾頭から外して飾る。銚受には劍挟が取り付けられており、その意匠は銚受と共通した雲文様で、先端には宝珠があしらわれているため、鉾がなくても均整が取れている。鉾の左右には吹散の箱（緋の覆がかけられている）、劍の箱（黒漆塗）が立てられる。それらの後ろには屏風が立てられ、御霊神社の牛玉宝印の軸が掛けられる。天井からは、金色の吊灯籠一対がかけられる。鉾頭の前には、低い八足台が並べられ、錫製の瓶一対が置かれる。神饌として中央に洗米、向かって左側に赤漆に金泥で桐紋が入った杯が置かれ、その上にするめが載せられる。向かって右側には水引で束ねられた昆布が供えられる。さらに町内各戸から受けた「御神酒」や供え物が置かれる。

その他

今出川町は、今出川通に面した南北向かい合わせの町（両側町）で、軒数は昔から大きな変化はない（現在 千五軒）。現在は多くがテナントとなり、町会費を納める六軒で祭りを運営しているが、テナントの参加者も歓迎しており、平成二十四年には一軒のテナントが参加していた。

昭和二十年代の後半までは、五月一日の神幸祭には地元の小中学校、中学校が休みになり、投げ玉や鼠花火が町中で行なわれていた。大人も「商売をしていたら恥ずかしい」と、今出川町では町内こそぞって祭りに参加していた。ただし、その頃は、十八日の還幸祭には参加していなかったという。

（吉村 旭輝）

蓬萊鉾（上京区武者小路町）

概要

蓬萊鉾は、銚の左右が松の意匠で、松鉾とも呼ばれる。現在二基あり、いずれもトウヤに祭壇が設けられて飾られるが、還幸祭の当日は、そのうちの二基を台車に立てて出鉾する。いずれの鉾も、劍と銚受の間に三鈷杵の形をした銚金具がつくのが特徴である。一基は銚受が菊で、もう一基は銚受が鶴と、違いが見られるが、受金はいずれも鶴と亀が表裏に配された意匠になっている。なお、武者小路町では、「各祭事資料」と題したアルバムを作成し、町会長が預かっており、劍鉾に関わる祭事もこれを参照して行っている。ここでは、銚受のことを「太鼓」、受金を「太鼓の支え具」「太鼓受け」、三鈷杵の部分を「鉾の支え金具」と呼んでいる。また、同資料では、菊の銚受の鉾を「お供え用」として出鉾し、鶴の銚受の鉾を「留守鉾」としているが、平成二十三年の巡行では「留守鉾」が出鉾していることから、交替は可能であると思われる。

文明二年（一四七〇）に後土御門院御后藤子より寄附されたと伝えられているが、詳らかではない。茎に「寛保三癸亥歳八月十八日」と刻まれた劍があり、寛保三年（一七四三）の製作であることがわかる。

『蓬萊御鉾目録』（明治三十九年四月改）には、「一、萌黄縮緬御吹散 但菊花御紋章／右中宮御所御寄附」「二、萌黄緞子御吹散 但牡丹二轡ノ紋章／右薩州御裏陽明殿御奥姫君御寄附」「三、浅黄緞子御吹散 但牡丹二葵ノ紋章／右近衛殿御裏姫君御寄附」「四、菊黄緞子御吹散 但牡丹ノ御紋章／右准后御宮御寄附」「一、緋緞子御吹散 但三蓋松の紋章／右明治三十一年四月新調」とある。

鉾祭りの次第

町内のW氏の蔵を町が年間契約で借り、鉾を含む祭具すべてを保管している。

お飾りの準備は、祭りの前日、五月十七日にトウヤで行う。午前八時三十分から午前十一時頃まで、当番の組の組長及び数名が集まる。武者小路町は六組に分かれており、輪番制で当番を回している。女性や老人が多い組があつた場合は、前年の当番からも人を出すという。見送り（吹散）は三種類（緑・紫・赤あり、前日に会



巡行する蓬菜鉾（犬持雅哉 平成23.5.18）



蓬菜鉾のお飾り（武者小路町）（福持昌之 平成24.5.17）

長と長老が話し合い、当日の天気やルート、街なみに映える色などを考慮して決める。

十七日の晩には、直会の儀がある。御霊神社から神職を迎え、祭壇に向かって祝詞をあげてもらったあと、翌日の打ち合わせなど話しながら、飲食をする。

祭りの当日、五月十八日は、午前八時三十分から、出鉾の準備をする。二基の鉾のうち、一基を台車に載せ、見送りや胴巻、提灯などを飾る。午前十一時頃から参列のための着替えを始め、十二時に御霊神社へ向けてトウヤを出発する。この時、まず武者小路通を東へ向かい、いったん室町通まで出て引き返し、今度は新町通まで出て引き返し、再びトウヤへ戻る。必ず、まず東、そして西という順番を守るようになってきているという。トウヤでは、御神酒をいただき、十二時十分頃になって、再び出発し、御霊神社へと向かう。御霊神社に到着すると、境内の外で、十三時の巡幸列の出発を待つ。

平成二十四年の巡幸では、京都ブライトンホテルからの寄付への返礼としてホテル前ロータリーで神輿を昇くことになり、蓬菜鉾も神輿とともにホテルへ向かい、

ホテル前道路で神輿を待った。

巡行が終わると、午後六時頃にトウヤに戻り、それからすぐに片付けを開始する。午後七時頃に解散する。

鉾差し

かつては、鉾を差しして巡行していたらしいが、詳細は不明である。現在の長老であるY氏が子どもであった時からすでに台車に載せていたというから、昭和初期には、すでに台車に載せていたと推測される。

ただし、「町内の豆腐屋の亡くなったお父さんが、昔、鉾を差ししていたらしい」「銀閣寺の地主さんの紹介で、修学院の農家の人が差しに来てくれた」「キクさんという、肩にこぶのある人が差ししていたらしい」といった話も伝えられている。

トウヤ飾り

武者小路町のお飾りは、W氏宅ともう一軒で、毎年交互に行われている。お飾りは「御霊八所明神」と書かれた神号軸を中心に三段の祭壇を組み、奥に松の文様が左右二つ描かれた屏風を立てる。祭壇の一段目の真ん中に二本の奉書を挿した瓶子、向かって左側に山の幸を五種（天根、きゅうり、ナス、ピーマン、人参、右側に海の幸を五種（ひじき、昆布、すのめ、寒天、わかめ）供える。二段目の中心には宝珠形の器の中に水、左側に米、右側に塩を円錐形に盛り、三列目の中心に榊を置き、両端に燈台を置く。祭壇の左右に剣鉾を置く。また、吹散も広げて飾られる。

その他

明治二十年の箱書に「目録」とあり、「一 御鉾之飾 二枚／一 独鉾 一個／一 風切 二枚／一 鶴亀之筒 一ヶ／一 風鈴 三個／一 鈴之紐 一筋／一 御鉾之飾括紐 一筋／以上」とあり、当時の部分名称の様子がわかる。

現在、準備の際に参照しているアルバム「各祭事資料」には、鉾の組み立て方などが詳しく図解されている。ここでは、「剣」「剣の支え金具」「太鼓」「太鼓の支え金具」「藁の剣の台座の輪」「挟み板」「飾り金具」などの部分名称が見え、武者小路町固有の名称も多い。

吹散の一本に島津藩の家紋が入ったものがあるが、昔、氏子が島津藩に寄付を願ったときにいただいたものではないかと言われている。

地元では「五十年程前は五月一日と十八日の二日間、巡行に出ている」と伝えられている。

(河野 康治)

枝菊鉾 (上京区玄蕃町)

概要

枝菊鉾は、菊の意匠の鉾で、現在、本鉾と留守鉾の二基を、玄蕃町の約三十戸で護持している。平成二十三年の祭礼では、剣の短い方の鉾が本鉾として出鉾した。

二基とも、銚受と受金は一体型で、菊花があしらわれている。銚受(受金)の下部からは、枝が上へのび、途中には葉や菊の花、枝分かれがあり、枝の上端には上向きの菊花があしらわれている。

永祿四年(一五六二)の正親町天皇の御寄附と伝える。

鉾祭りの次第

御霊祭に鉾を出すかどうかは、その年の町内会長を中心に町全体で協議をして決定するため、年によって変わる。居祭りだけをする場合、出鉾(行列に参加する)もする場合、いずれも行わない場合がある。鉾を出す場合は、巡行の前日の五月十七日までに、諸道具を蔵から出し、トウヤの家に飾る。鉾が保管されているのは、御霊神社の蔵である。

出鉾する場合は、五月十八日当日の午前八時から、町内全体の有志が集まって、トウヤの祭壇に飾られた劍鉾のうち、一基を台車へ移して、鉾を立てて飾る。渡御列の参列者の人選は、町内会長らの役員が優先されるほかは、特に取り決めはなく、都合のつく有志数名がオトモ(御供)として行列に加わる。町内で袴を六着所有しており、それを着用する。鉾を載せた台車を押す役割のハクチョウ(白丁)は、学生アルバイトを雇う。白丁の衣装は四着あり、アルバイトは玄蕃町で四人募集する。

鉾の解体は、巡行が終了して玄蕃町へ戻ると直ちに行われる。組立てと同様、町

内全体で行う。ただし、

留守鉾については、本鉾の到着を待たずに、午後四時頃から行列に参加していない人たちが先に片付ける。解体後はそれぞれ道具箱に収納する。その日の夜、アシアライと称して食事会が行われる。道具箱は翌日午前八時に神社の蔵へと運搬して保管する。

トウヤ飾り

平成二十三年は、町内会長の自宅に祭壇を設置して飾った。表に面した部屋の窓を開け放ち、奥に屏風を立て、御霊神社の牛玉宝印の軸を掛ける。その前に緋毛氈を敷き、鉾の収納箱などで祭壇を組み、薦を掛ける。祭壇の上段には三方に錫の瓶子を供え、下段には、三方に紅白の鏡餅、三方に水引をかけた野菜やスルメを供え、その左右に燭台を載せる。祭壇の左に留守鉾を、右に本鉾を飾る。祭壇の前には、町内の各戸の供え物が置かれる。

その翌年、平成二十四年は、出鉾も居祭りも行われなかった。

(犬持 雅哉)

矢的鉾 (上京区塔之段六町)

現行町名 毘沙門町、松ノ木町、柳風呂町、北横町、上塔之段町、北苑町、幸神町

概要

矢的鉾は、弓矢に関わる意匠の鉾で、現在、二基ある。銚受は弓を左右に配置した輪郭で、真ん中がくびれている。中央には菊花と葉があしらわれている。受金は二重の円形で、おそらく象つたものであろう。銚受は、左右に二枚の菊花模様の



枝菊鉾(玄蕃町)(犬持雅哉、平成23.5.18)

扇が広げられており、左右ともに、上、横、下に一本ずつ矢が刺さる。二基の鉾の違いは、細かな造りや寸法が違うのみであるが、見た目にも違いはわかる。

矢的鉾を護持しているのは、塔之段六町と言われる毘沙門町、松ノ木町、柳風呂町、北横町、上塔之段町、北苑町、幸神町の住民である。一年交代で、町ごとに鉾当番があたる。

塔之段とは、『雍州府志』巻八によれば、相国寺九重塔の跡、東北院の塔の跡、毘沙門堂の跡などと伝えられているが、詳らかでないという。相国寺九重塔は、応永六年（一三九九）に足利義満が父義詮の供養のために建てた相国寺の大塔であるが、応仁元年（一四六七）に焼失した。

矢的鉾が保管されているのは、上京区寺町通今出川上る西入、幸神町に鎮座する幸神社（さいのかみのやしろ）で、居祭りとして飾られるのも同社である。幸神社は、かつて出雲路幸神、出雲路同道祖神社とも呼ばれ、賀茂川畔の現在の青龍町付近にあったとされ、応仁の乱以降に現在地に移転したとされる。

幸神社には氏子はなく、崇敬者で護持されている。ただし、幸神社は周辺地域、とくに京極学区との関係が深い。幸神社の例祭は九月十六日で、そのときには、京極学区と旧出雲路学区の子供神輿を一基ずつ出して巡幸していた。現在は、九月の例祭に子供神輿の渡御はなく、一基だけ境内に飾っている。また、幸神社は京極学区の集会所のような役割も果たしていたらしく、かつて倉庫に学区内の各町の席札が残っていたという。なお、現在、幸神社の神職は東山区の京都多びす神社（憲美須神社）の宮司が兼任している。

鉾祭りの次第

平成二十三年は五月十五日（日）に準備を行った。午前九時に幸神社に役員が集合し、事務引継などを行い、午前十時頃より境内の倉庫から鉾関係の道具類を社務所に運び、組み立てた。この年、集まった役員は八人程度で、午前十一時過ぎに、御霊神社より神職が来て、お祓いを受けるため、急ピッチで作業にかかった。お祓いの後は解散し、その日は特に何もない。

御霊祭の当日、五月十八日は、出鉾はしないが、午前十時から午後五時の間、役

員が交代で社務所につめて、お守りをする。片付けは、次の日曜日に行く。

鉾差し

鉾当番が預かる「矢的鉾記録」には、明治四年（一八七〇）の記述に「一、浄堂寺村 重右衛門／右之者へ、例年鉾指として雇入候事／但し三人にて金巻円巻歩 志朱之雇料、式度、酒飯とり進ス」とある。浄堂寺村とは、浄土寺村（現在の左京区銀閣寺町）のことと思われ、そこから鉾差しを招いていたことがわかる。

また、同記録の文政七年（一八二四）の「新鉾改」からは、剣を「招（まねき）、居祭りで鉾頭を立てる台を「鉾台」と呼んでいること、差皮（差筆）が鉾差しのものでなく、町内で管理していたことなどがわかる。

トウヤ飾り

平成二十三年は、矢的鉾二基が社務所の座敷に飾られた。床の間に「御霊八所大明神」の神号軸を掛け、緋毛氈を床の間から座敷にかけて敷く。床の間には、奥に八足台を置き、錫の瓶子を一对、三方に載せて供える。手前には、鉾を二基、並べて飾る。座敷にかかった毛氈の上に、低い八足台を置き、四つの三方に神饌を供える。

社務所の座敷は奥まったところであり、幸神社の参拝者でもほとんど覗き込めない。そのため、矢的鉾の居祭りは、一般にはあまり知られていない。

その他

平成二十四年は、社務所の建て替えが始まり、居祭りを含め、御霊祭での鉾の参加は見送った。

御霊神社蔵の「御鉾吹散



矢的鉾のお飾り（塔之段六町）（福持昌之、平成 23.5.15）

等奉納并町方江渡覚」には、矢的鉾は当初は四軒在家町が護持していたとしているが、それが現在のどの地域にあたるのかは不明である。その後、徳大寺殿町所蔵の「御鉾順番次第」では、柳風呂十三町組とある。鉾当番が保管する「矢的鉾記録」は、文政七年（一八二四）から昭和十八年（一九四三）にわたる記録である。そこからは、近世末には革堂内町、毘沙門町、上塔ノ段町、柳風呂町、廬山寺町、浄華院町、南鴨口町、幸神町の八か町が輪番で鉾当番を行っていた様子がわかる。柳風呂町も含まれていることから、これが柳風呂十三町組に連なる地縁組織であろう。その後、明治三年（一八六九）に、浄華院町、廬山寺町、南鴨口町の三町が、青龍町と改称し、翌明治四年からは一町として「御組町」に加わったことが記されている。また、同年には、真如堂突抜町、下塔之檀町、松ノ木町が「御組町」に加わって、真如堂突抜町、下塔之段町、松之木町、幸神町、革堂内町、毘沙門町、上塔ノ段町、柳風呂町の八か町となった。その後、昭和三十年頃には、毘沙門町、松ノ木町、柳風呂町、北横町、上塔之段町、北苑町、幸神町の輪番となった。

浄華院町、廬山寺町、南鴨口町といった、現在の青龍町が御組町として護持に関わっていたのは、応仁の乱以前の幸神社の鎮座地に関わると思われる。青龍町が太刀鉾を護持するようになったのは、矢的鉾の御組町から離脱して以降のことであろうが、その年代は詳らかではない。

（福持 昌之）

鯨鉾（北区鞍馬口町・天上町

天寧寺門前町
上善寺門前町）

概要

鯨鉾は、蟹鉾とも呼ばれ、現在、一基が伝えられている。銚受の意匠は、蟹を中心に、二羽の鳥が舞う。受金の意匠は波濤である。銚は、想像上の動物である鯨で、頭が虎、胴が魚で、尾ひれが天を向いている。鯨は一字でシヤチともシヤチホコとも読むが、鯨鉾はシヤチホコと呼ばれている。

近世期には馬場四町組が護持していた。鯨鉾とともに箱に保管されている「鯨御鉾再興由来記」に「明治二十六年以来、祭礼参列中断の処、昭和二十九年有志者二



平成20年の鯨鉾の巡行（御霊神社提供）

依り復興を斗り、全年六月、上善寺門前町、天寧寺門前町、鞍馬口町三ヶ町百五十戸の協賛を得て、保存会を設立し再興す」とある。同文書によれば、昭和二十九年に保存会を設立し、有志金の積立を始め、翌昭和三十年に鉾の修繕や袴などの衣装購入、高張提灯の張替え、そして銚差しの帯（差帯）やカンバン（ハッピ）などを整えている。そして「明治三十二年以来、祭礼行列二中絶の鯨鉾、昭和三十年五月一日、目出度復興参列す」と記されている。このことから、おそらく明治中頃までは馬場四町組が護持したものと考えられる。御霊神社の劍鉾は、護持組織が変わることがたびたび見られる。なお、御霊神社の小栗栖宮司によれば、劍鉾の新たな受け入れ先が決まるまで、神社に返納されるのが通例であった。

昭和の鯨鉾復興を成し遂げたのは、鞍馬口通に面して南北に向き合う鞍馬口町と、その西側に接する天寧寺門前町（鞍馬口通の南側）と、上善寺門前町（同北側）の三か町である。ただし、天寧寺門前町と上善寺門前町は、あわせて天上町（てんじょうちょう）と呼ばれる。護持している鞍馬口町は約三十六軒、天上町は約七十七軒からなる。祭りの当番は、鞍馬口町が一年務めると、天上町が二年務める形をとっていた。もともと、鞍馬口通に面した大きな家をトウヤとし、鉾一式を預かり、御霊祭に



昭和30年の鉾鉾復興時と思われる集合写真（鞍馬口町・天上町提供）

はお飾りをしつつ、出鉾もしていたが、ここ数十年は日常は御霊神社で保管し、トウヤでは居祭りだけ行っていた。ところが、平成十八年三月二十六日に、長く飾り場にしてきた天寧寺門前町の森家が不審火で焼失し、それ以来、居祭りは中止している。また、鉾は御霊神社で保管することになった。森家は、もともと小山郷の大きな地主であり、かつては両替商を営んでおり、古い造りの大きな家だったという。

森家の焼失後、鞍馬口通の一本北の通りに面したクリーニング店現在は廃巻で居祭りをする案も出たが、鞍馬口通から外れると目立たないため意味がないということで、結局、実施されることはなかった。

鉾差し

昭和三十年の復興の際に撮影されたと思われる集合写真には、鉾差しが二名写っている。地元では「北の方の郊外から招いた」とのみ伝わっている。

その後、平成二十年に一度だけ、一乗寺の鉾差しに依頼して、巡行している。

（福持 昌之）

概要

菊鉾（上京区室町頭町）

菊鉾は菊の意匠の鉾で、現在、二基ある。銚受は、菊花を下から葉で包むような意匠で、外形が卵形の輪郭を形成している。銚受は表裏があり、裏面は裏菊になっ

ている。また、菊の中央部は、一基は桔梗紋の線刻、もう一基は格子の線刻である。いずれも、銚受はそのまま棟上部に取り付けられるようになっており、受金は無い。銚は、正面を向いた菊花が左右に三輪ずつ配され、さらに上向きの菊花が左右一輪ずつ、そして数枚ずつ葉がある。銚受から枝が出ているものの、枝菊鉾に比べて枝振りには細く、また上向きの花をつける枝も低いいため、それほど枝は目立たない。二基とも、ほぼ意匠は共通するが、一見して時代や製作者が異なる鉾であることはわかる。

黒漆塗で菊の銚金具がついた剣の箱には、蓋表に「御剣」とあり、蓋裏には「明和二年乙酉年／秋七月新調」「上御霊中町 年寄 重三郎／五人組 庄右衛門／同 治兵衛／同 惣助」の墨書がある。「御鉾吹散等奉納并町方江渡覚」でも「上御霊中町」とあることから、明和二年（一七六五）頃から幕末までは上御霊中町が護持していたであろう。上御霊中町とは、鞍馬口通と上御霊前通の間にある東西の通りに面した地域で、烏丸通を挟んで広がる。

「御鉾吹散等奉納并町方江渡覚」や「御鉾順番次第」には、室町頭町は桐鉾を護持しているとある。その桐鉾については、「御霊神社所蔵宝物史料」によれば、明治二十年（一八八七）に焼失したことがわかる。室町頭町が菊鉾を護持するようになったのは、桐鉾の焼失後、昭和九年（一九三四）までのことであろう。

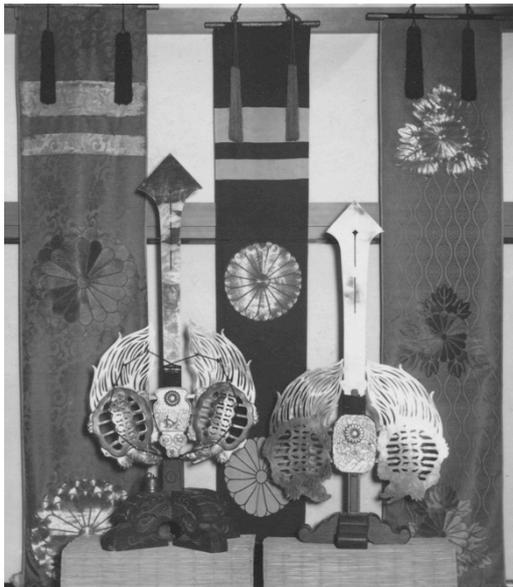
室町頭町では、もともと、町内で鉾を管理していたが、近年は小畑氏宅の蔵で預かってもらっていた。平成十七年（二〇〇五）までは台車に立てて出鉾していたが、平成十八年は雨天で居祭りとなった。平成十九年頃に、小畑氏宅が改築されることになり、それを機に鉾は御霊神社の蔵に預かってもらった。以来、居祭りも中断している。

鉾差し

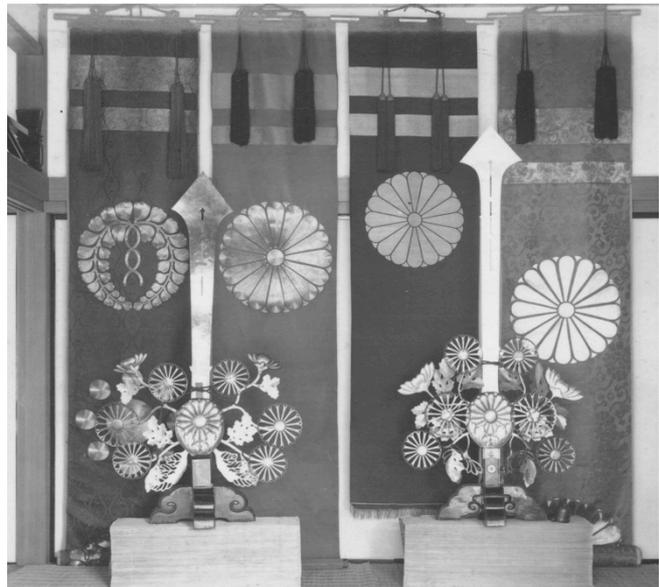
数年前に、東山のほうの鉾差しに来てもらって差して巡行したことがあるという。

トウヤ飾り

昭和六十年（一九八五）に撮影された写真から、かつて居祭りをしてきた頃の様子がわかる。屏風の前に簡易な宮殿を設け、御霊神社の牛玉宝印の軸を掛ける。低



亀鉾（新御霊口町）



菊鉾（室町頭町）
（いずれもアルハム「御霊神社所蔵宝物史料」（昭和9年11月）より）

い八足台に菰を敷き、三方に錫の瓶子、神饌を載せた土器を供える。祭壇の前には、鉾を飾る。

その他

居祭りの祭壇に掛けられる牛王宝印の軸は、箱の蓋表に「御霊社牛玉 室町通上立賣上ル頭上半町」、身底裏には「享保第十年乙巳天／中秋令旦 年寄 五左衛門」とあり、享保十年（一七二五）の段階で室町頭町が上と下に分かれており、そのうち上半町がこれを護持していたことがわかる。当時は、室町頭町が桐鉾を護持していた時期である。また、祭壇に使う低い八足台は、天板の裏に「嘉永六年癸丑七月／新調／寄付

秦氏／桐鉾町」とある。このほかに、明和二年の劍の箱のほかに、劍を挟んで保管する挟み板があり、そこには「桐御劍」と墨書がある。
（福持 昌之）

亀鉾（北区新御霊口町）

特徴

亀鉾は二基ある。一基は、銚受の意匠は、波濤文様で、菊花があしらわれる。受金はない。銚は、甲羅についた藻が尾のように見える蓑亀が下を向いた姿で、左右一匹ずつ配される。こちらの鉾の銚は、板に線刻と透かして装飾されている。もう一基は、銚受の意匠は同様に波と菊花があしらわれるが、蓑亀も描かれている。受金はある。銚も同様に、甲羅についた藻が尾のように見える蓑亀が下を向いた姿が左右一匹ずつとなっているが、こちらの鉾の銚は、立体的な細工が施されている。長柄は長いまま切断しない状態で神社の蔵の中に立てかけてあるということであるが、未確認である。

吹散の箱の蓋裏に、「明和四丁亥年八月」と墨書があり、身底裏に「新御霊口町」とある。また、牛王宝印の軸の箱の蓋裏に「明治二年巳七月改書之／上京七番組鞍馬口通寺町西入新御霊口町／氏神 御掛物 一軸箱」とある。なお、新御霊口町は、北区と上京区にそれぞれあり、互いに接しているが、亀鉾を護持しているのは、鞍馬口通沿いの北区の新御霊口町である。

鉾祭りの次第

新御霊口町は、およそ百軒からなり、分譲マンションの住人を加えて百二十軒ほどが町内会に入っている。小山郷の神輿供奉の中心地であることから、鉾の勤仕は、神輿供奉から退いた年長の方が中心となつて行われてきた。現在、町内で鉾についての古いことを知る方はほとんど亡くなっており、かろうじて一九七〇年代に他県より町内に移入し、祭りに関わるようになった方からお話を聞くことができた。その当時、すでに鉾に関して特別な組織はなく、毎年交替する町会長が中心となつていた。具体的には、町会長が居祭りを行う家や準備をする人を手配するという形で

行われた。とはいふものの、家の構造によって居祭りを行うことができる家や、鉾の飾り付け、特に組紐をかける作業ができる人は限られており、自ずと固定的なメンバーが鉾の勤仕に当たっていたようである。

当時は、祭りの前日に神社の蔵へ鉾一式を取りに行き、飾り付けた。その際、巡行に参加するほうの鉾も同時に組み立て、神社へと運んだ。そのタイミングで一同お祓いを受けたので、神職が町内に訪れるということにはなかった。

昭和四十年（一九六五）頃までは、毎年、鉾を出し、出鉾もしていたという。その後、神輿が町内を通過する北回りルートをとる年だけ、つまり隔年で出鉾するようになり、そうでない年は出鉾しなくなった。その後、ルートに関わらず出鉾しなくなったが、最後に出鉾した年には、軽トラックの荷台に鉾を積んで神輿に供奉したという。ただし、居祭りは平成十七年まで隔年で行っていった。

平成二十五年は、八年ぶりに居祭りが行われた。平成二十四年度の町会長が、次の北ルートの年に飾ってくれるよう、S氏にお願いで承諾を得ていたところ、たまたまS氏が町会長を務めることになり、期せずして町会長宅がお飾り場になったとのことである。

五月十五日水曜日、町会長など数人が、午前十時に御霊神社に集まり、倉から鉾の道具一式を運びだし、軽トラックに積んで飾り場へ運ぶ。正午頃、鉾が組み終わり、「亀御鉾」と染め抜かれた幔幕をかける。

トウヤ飾り

平成十七年の写真によれば、鳥居形の枠を組み、そこに牛王宝印の軸を掛け、その前に祭壇を設け、緋毛氈をかける。祭壇の上段に鉾を二基ならべ、下段に薦を掛け、三方に載せて神饌を供える。

その他

鉾の道具とともに、昭和八年九月に新調された御千度竹籤箱が伝えられている。

(内田 みや子)

紅葉鉾（上京区徳大寺殿町）

概要

紅葉鉾は、紅葉の意匠の鉾で、一基のみ伝わっている。銚受と受金は一体型で、銚受の中央には、紅葉五枚を放射線状に並べる。左右の銚も、それぞれ紅葉が十枚ほどあしらわれる。棹は古いものと新しいものの二棹がある。これらの棹は、差して巡行していた時と同じで、長いままである。

御霊神社「鉾展」資料（平成六年）によれば、紅葉鉾は「寛文九年（一六六九）後水尾天皇後宮新廣義門院御寄贈」とある。

御霊神社所蔵の「御鉾吹散等奉納并町方江渡寛」に「一、吹散 緋縮緬牡丹御紋 染落し 沓掛／寛延二年七月廿八日、從御日安御簾中御奉納（近衛殿取次）紅葉鉾 預り、西洞院講中へ以鬮相渡、至明和元年甲申年、十六ヶ年二成ル」とあり、寛延二年（一七四九）から明和元年（一七六五）にかけては、西洞院講中が紅葉鉾を担っていたことがわかる。ただし、この西洞院講中については詳らかではない。

吹散の箱の蓋裏に「于時寛政七丁巳年閏七月吉祥日 徳大寺殿町、有栖川宮の寄附による幕の箱の蓋裏に「寛政七乙卯八月朔日／徳大寺町中」とあることから、寛政七年（一七九五）には、徳大寺殿町が護持していたことがわかる。

鉾祭りの次第

紅葉鉾の一式は、徳大寺殿町に鎮座する霊光殿天満宮の土蔵に納められており、お飾りも境内の建物で行われる。霊光殿天満宮には専任の神職はおらず、御霊神社の宮司が兼務している。社務所に住んで、境内の管理をしているT氏（昭和五年生まれ）が神社の世話を一手に引き受けており、鉾の差配もしている。

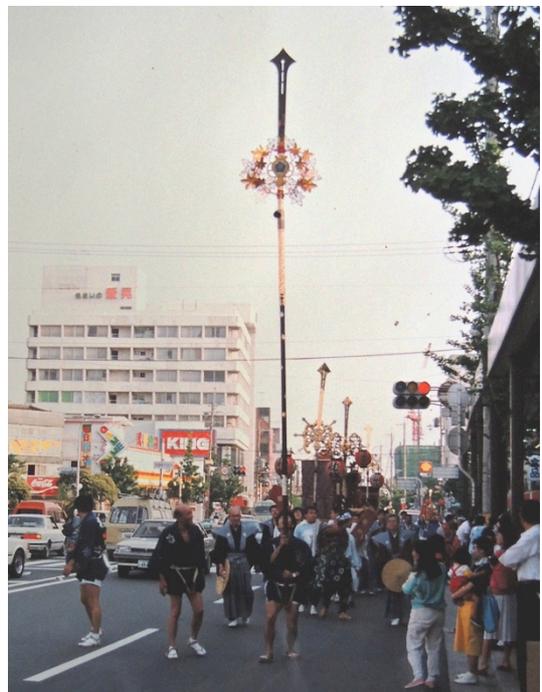
鉾を護持している人たちの構成は、以前は町内の人々が集まっていたが、現在は社務所に住むT氏と、T氏の声掛けで集まった京都市外に住んでいる有志二名が御霊祭に携わる。

鉾差し

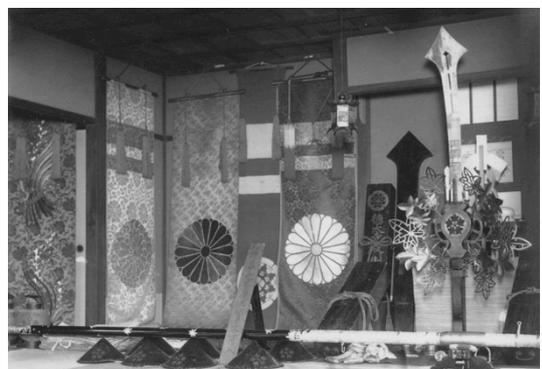
紅葉鉾は、平成二十三年および二十四年は出鉾せず、居祭りも行われなかった。以前は、おおよそ毎年出鉾していたが、鉾は差さず、鉾頭を支える台車を使用し、



平成20年の台車による紅葉鉾の巡行の様子
(御霊神社提供)



一乗寺の鉾差しによる巡行の様子 (徳大寺殿町提供)



紅葉鉾のお飾り (徳大寺殿町)
(アルバム「御霊神社所蔵宝物史料」(昭和9年11月)より)

学生アルバイトが棹尻を肩に乗せて運んでいた。この台車は、吹散を少し広げてかけられるようになっており、休憩に使う両引(簡易の腰掛け)をたたんで収納できるような工夫されている。このような形式の劍鉾の台車は珍しい。なお、この台車の収納場所は、霊光殿天満宮の土蔵ではなく、境内にある町の倉庫(町内会長が管理)である。巡行の際に鉾を曳く学生アルバイトは、着流し姿で、腰には差袋(差手)を締めるといった、鉾差し風のいでたちであるが、尻端折はしない。その後ろを袴姿T氏らがついて歩いた。

ずっと以前は、どこからか鉾差しを雇って、鉾を差して巡行していたが、詳しいことは伝わっていない。台車が製作され、そこに鉾頭を預けて倒して曳行するようになってから、数年間だけ一乗寺の鉾差しに來てもらって、差して巡行しており、写真が残されている。

トウヤ飾り

現在は、劍鉾は飾りも巡行も行っておらず、その詳細は不明である。T氏によれば、お飾り場は、霊光殿天満宮境内の北側の家屋を使用し、その中心に御霊社の牛玉宝印の軸を飾るといふ。この建物は、もとは神社所有の貸家であったが現在は空

き家であり、参集所のように使われている。

その他

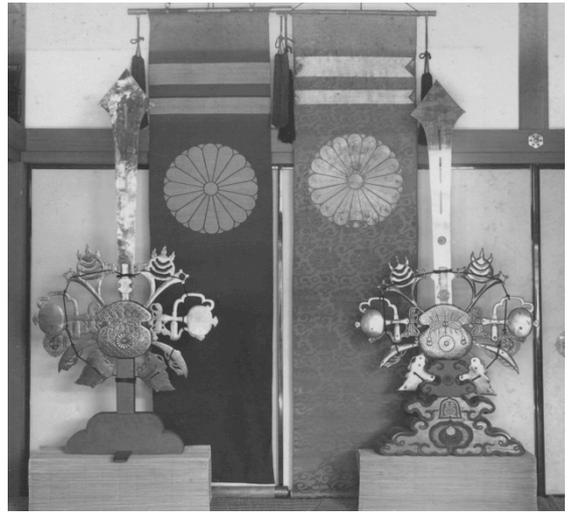
吹散の箱は四つあり、箱の蓋にはそれぞれ、①表「菊紋」(以下不明)裏「于時寛政七丁巳年閏七月吉祥日 徳大寺殿町」、②表「二條大政所御方 御寄附 御鉾之幡」裏「于時文政六癸未年七月吉祥日 徳大寺殿町」、③表「徳大寺殿 御寄附」と墨書がある(④は墨書等無し)。

なお、霊光殿天満宮の例祭は、三月二十五日と十一月二十五日に行われている。(秦和也)

特徴

寶鉾 (上京区継孝院町)

寶鉾は二基ある。いずれも、鉾受は宝袋もしくは金囊(きんのう)と呼ばれる吉祥文様の意匠で、菊花があらわされる。受金はない。劍挟には、分銅(ぶんどう)があらわれ、鏝は、上から丁子(ちんし)クローブに支えられた宝珠、打ち出の小槌と宝鍵(ほうげん)、隠れ笠、隠れ蓑が配され、宝尽くしの大変めでたい意匠である。ただし、そ



寶铎（継孝院町）（アルバム「御霊神社所蔵宝物史料」
（昭和9年11月）より）

それぞれの細かな造りや大きさが異なるため、二基の铎が同時期につくられた一組の铎ではないことは一目瞭然である。御霊神社所蔵の「御铎吹散等奉納并町方江渡覚」には、清蔵口五町組が護持していたとある。清蔵口とは、京の七口のひとつで、鞍馬口通と新町通の交差点付近にあたる。現在は北区に上清蔵口町、上京区に下清蔵口町の地名が残る。

昭和十三年（一九三八）に、御霊神社の先代宮司、小栗栖憲昌が記した「寶铎吹散御奉納覚」には、もとは清蔵口五町組が奉預していたこと、吹散が五流あることが記されている。

- 一吹散 白縮緬染込菊花御紋付 享保式拾年七月七日／拾四歳寅年男宮内奉納／清蔵口五町組江相渡寸
- 一吹散 白縮緬 延享参年七月拾六日／一條殿御女中奉納／清蔵口五町組江以指図相渡寸
- 一吹散 宝暦五年八月八日／奉納者未詳／清蔵口五町組江依頼主望渡寸
- 一吹散 花色鈍子但シ紐共 文化拾五寅年七月拾六日／二條殿御裏順実御方／奉納 寶铎継孝院町江／為樽代金百疋被遣候／取扱役人熊武弾右衛門
- 一吹散 文久参年五月／孝明天皇御奉納清祓後／継孝院町江相渡寸／同町奉預

このことから、清蔵口五町組が護持していたのは享保二十年（一七三五）に遡り、継光院町が護持するようになったのは宝暦五年（一七五五）から文化十五年（一八

一八）の間とわかる。

なお、劍の茎には「二條御殿御寄附 継孝院町」慶應四戊辰六月／鋳師山本喜助」とある。

铎祭りの次第

昭和初期までは、寶铎が出铎していたといわれている。その後も、昭和四十年代までは、居祭りとしてトウヤの家で飾られていた。寶铎は、継孝院町の有志の人たちで護持されてきたが、出铎しなくなった理由や、居祭りが廃止された経緯については何も伝わっていない。ただ、古くから護持されていた人たちの家が、新しく建替えられていくに従って、飾ることができる家が減っていったと言われている。居祭りが行われていた最後の頃は、お飾りの場所は清水家、铎を保管していたのは森川家であった。現在は、御霊神社の蔵で保管されている。

なお、出铎をしていた頃、どこから铎差しを頼んでいたかは詳らかでない。また、トウヤ飾りの詳細も、伝わっていない。

その他

継光院町では現在、寶铎を出していた頃のような、町内としての御霊祭との関わりはない。しかし、町内の人たちがそれぞれ、個人として神輿昇きや、御霊太鼓のメンバー、稚児や武者などに参画している。

（福持 昌之）

特徴

牡丹铎（上京区上柳原町）

牡丹铎は二基ある。いずれも、鋳受は波濤文様があしらわれるが、その中央にあしらわれる花の意匠が異なり、一基は牡丹、もう一基は菊花である。いずれの铎も、受金はない。

鋳受が牡丹の铎は、鋳受の下から約三分の一程度の位置で上下に分離できるようになっており、受金の機能を持たせているとも考えられる。しかし、中央の牡丹の铎は、上下の接合部分にかぶさっており、一体型であることが強調されている。こ



牡丹鉾（上柳原町）（アルバム「御霊神社所蔵宝物史料」
（昭和9年11月）より）

の鉾には、劍の身にも
銚受の牡丹を一回り小
さくした牡丹の銚金具
が取り付けられている。
銚は左右対称で、正面
に向けた牡丹と上向き
の牡丹が一輪ずつ、左
右四輪があしらわれる。
葉は、葉脈を線刻した
ものと、輪郭と葉脈を
残して透かし彫りにし
たものがあり、適宜ち
りばめられている。

銚受が菊花の鉾は、劍の茎に銚があり、明治二十一年（一八八八）松本芳太郎の製作であることがわかる。銚は左右対称で、正面に向けた牡丹が数輪、上向きに牡丹の蕾が一輪、さらに空を飛ぶ蝶があしらわれる。葉は、葉脈を線刻し、全体をプレスするなどして立体的な造形である。劍挟に、菊の紋がある。

柳原町には、牛王宝印の軸が伝わる。その箱の蓋裏に「延享四年丁卯六月日 上柳原町」とあることから、延享四年（一七四七）には上柳原町に伝来し、おそらくなんらかの鉾祭りが行われていたと考えられる。

そのほか、文政六年（一八二三）の箱書がある吹散箱、延享三年（一七四六）の箱書がある吹散箱が伝わっている。

鉾祭りの次第

上柳原町は、室町通に面した両側町で、いくつかある露地には、機織の職人が多い。上柳原町では、毎年、鉾祭りは、大正末から昭和初期生まれの同年代の男性十人ほどが担ってきた。後年、「鉾を守る会」と称することもあった。

ただし、時折必要となる鉾の修復費は、町内会予算から積み立てられている特別

会計から支出されており、町内全体で支えてきたものである。現在は、組み立てなどの作法が次の世代へ引き継ぎ継ぎおらず、鉾祭りは行われていない。

銚差し

戦後しばらくまでは、銚差しを招いて巡行をしていた。石屋さんに来てもらって
いたという。

昭和六十二年（一九八七）あるいは六十三年の京都新聞に、昔の牡丹鉾の一行の集合写真が掲載された。写真提供者の「京都市上京区、無職 太田清一（八四）」が当時三十四歳であったとのことで、昭和十二年（一九三七）あるいは十三年の写真と推定される。写真の様子から、当時は銚差しを頼んで差ししていたと思われる。

その後、周辺地域の多くの劍鉾が、棹を切つて棹に建てて曳行して行くようになるなか、上柳原町では棹を切るのほもつたないとして、寝かせて巡行することができる台車を製作し、曳行した。一九八〇〜九〇年頃には、すでに銚の曳行はなくトウヤ飾りだけで、その頃を最後に鉾祭りは休止した。

トウヤ飾り

室町通に面した家のうち、三軒ほどが輪番でトウヤを務めていた。最後のトウヤ飾りは、三好家であったという。銚は巡行する銚と、もうひとつは留守銚であったが、巡行しなくなつてからは、二基とも同じように飾っていた。

その他

出雲路敬直「今宮・上御霊社の劍鉾——上京の祭（下）——」（一九八六）によれば、「牡丹鉾は上御霊祭の中では最も立派な銚とされている」とあり、その造形がすばらしいとしている。

昭和四十年に先代宮司の小栗栖憲昌が「当社古記録より調査」して記したと思われる「牡丹鉾吹散御奉納寛」には、吹散が四流あることが記されている。

吹散 白縮緬染込菊御紋付 享保廿年七月七日／女御御奉納／上柳原町へ渡ス

吹散 紫笹りんどう紋付 寛保二年八月十六日／梅口殿奉納牡丹鉾預／上柳原

町へ渡ス

吹散 緋鈍子無紋 延享三年八月十五日／近衛殿御奉納／上柳原町へ以御指図

相渡ス

吹散 花色大紋鈍子金すり込縫紋入込 宝曆十一年七月十五日／桃園天皇御奉納／上柳原町へ相渡ス同町奉頂

現在、吹散は二流あり、ひとつは紋織、もうひとつは人物を織り出した珍しい意匠の綴織である。その人物とは、神功皇后、竹内宿禰、応神天皇、藤原鎌足、和氣清麻呂、六孫王（源基経）、八幡太郎（源義経）、平重盛、経房卿（吉田経房）、楠木正成・正行、児島高德、名和長年の十三人である。製作者名も織り出してあり、安田織樂（柳馬場通松原上る吉文字町）であるとわかる。

（福持 昌之）

鷹羽鉾（上京区上木下町）

概要

上木下町で護持されている鷹羽鉾は、出鉾する鉾と留守鉾の二基がある。社報で小栗栖元徳宮司は、その概要について次のように述べている。

「社記」によると享保二年（一七一七）八月作州津山城主松平越後守様御役介源昭院様御奉納・寺町頭不動前町預りとあり、また別に享保二年津山少将御母堂御再興とある。津山城主松平越後守（津山少将）は、美作国津山松平藩初代藩主松平宣富公のことで、源昭院（源正院）は松平宣富の母ではなく、宣富の義理の兄である綱賢の継室で、実家は京都の園池家。その頃、寺町通上御霊下る不動前町の向かいに津山藩邸があり、晩年、京都に帰った源昭院はこの鉾を産土神である御霊神社に寄進し、ゆかりの不動前町が鉾町を担ったと考えられる。また御再興とあるから、それ以前よりあり、この時、新調又は復元されたのであろう。現在の鉾町上木下町には、明治維新の廃藩の折に遷ったと考えられる（社報「こりようさん」第十四号、二〇一一）。

出鉾する鉾の剣には、茎の表に「劔表上字新調寺町通不動前」、裏に「文政九年戌六月吉日 鋳師」の銘が残る。ただし、茎の下部は切断して補修した痕があり、銘の続きを知ることができない。この剣の銘のほかに、町内に伝わる差革にも不動前（町）の記載があることは、安政四年（一八五七）頃に成立したと思われる「御吹

散等奉納并町方江渡覚」（御霊神社蔵）の記載と合致し、かつて鷹羽鉾は不動前町が護持していたことがわかる。

上木下町では、鷹羽鉾が伝来する以前に、茗荷鉾を護持していた。「御吹散等奉納并町方江渡覚」によると「木之下二町組」が、「御鉾順番次第」（徳大寺殿町蔵）には「上樹之下町」が茗荷鉾を護持していたとある。また、昭和九年のアルバム「御霊神社所蔵宝物史料」（御霊神社蔵）によれば、茗荷鉾は鳳凰鉾ともいい、木ノ下町が護持していたが、当時は「当社蔵」であった。

上木下町所蔵の吹散の箱で、蓋の表に「上」と菊の紋、裏に「宝曆拾一年（辛巳）八月吉辰上木下町／壽宮御方御寄附御吹散」と墨書されたものがある。壽宮は中御門天皇の皇女で慶光天皇の妃である成子内親王のことである。鷹羽鉾の剣の製作時期（文政九年）をはるかに遡る宝曆十一年（一七六一）に、上木下町に吹散が送られていることから、これは茗荷鉾の吹散だったものかもしれない。

鉾の各部材は、「葦屋善兵衛」の屋号で文化年間より当地で織物業を営む木野織物の蔵で保管している。ただし、台車など一部の道具類は、御霊神社の蔵で保管してもらっている。

鉾祭りの次第

鉾の組み立ては、五月十八日の朝から、町の人が集まって行われる。鉾は、前日十七日に組み立てられ、木野織物に設けられたお飾りの中に置かれているが、そこから台車に取り付けられる。取り付けは一時間程で完了し、いったん解散する。ただし、行列に参加する人は、袴に着替えるため再度集まる。行列には、毎年四人程度の町役員が参加する。また、鉾の曳き手には、学生を雇い、半被を着用させる。十一時五十分頃、町内を廻ってから御霊神社へ向かって出発する。御霊神社に集合してからは、他の鉾と合流して、行動をとる。

なお、御霊祭は雨天決行であるが、雨天時、鷹羽鉾の巡行をすかどうかは、上木下町で判断しているという。

巡行が終わって、町内に戻ってくると、再び町内を廻ってから宿の木野織物に帰着する。すぐに鉾は台車から外され、巡行前のように、室内にお飾りされる。鉾は、



巡行する鷹羽鉾（犬持雅哉、平成 23.5.18）



鷹羽鉾のお飾り（上木下町）（福持昌之、平成 23.5.17）



文化 13 年（1816）の墨書がある差革（福持昌之、平成 23.5.17）

日が暮れるまではこのまま飾っておき、午後八時からお飾りとともに片づけられる。鉾差し

台車に「昭和四十八年五月吉日上木下有志寄進」との墨書があることから、このころから台車を用いていると考えられる。

それ以前は、大原や銀閣寺門前から、毎年四人ほど鉾差しを呼んで、差して巡行していた。上木下町では、鉾差しはだいたいの農家の人だったと伝承されている。

ただ、大原に鉾差しがいたという事実は今のところ確認できておらず、もともと鹿ヶ谷の鉾差しで、大原に苗場を持っていた藤田造園のことかもしれない。また、銀閣寺門前（銀閣寺町）でも石屋が鉾差しをすることが多く、いずれも農家とは言いがたく、上木下町の鉾差しの出身地については詳らかではない。

また、古い差革が二つ、町内で保管されており、内一つには両端部分に「文化十三年／丙子七月十八日」、「不動前町」との墨書がある。

トウヤ飾り

当屋飾りは、毎年、衣棚通東側の木野織物の、通りに面した部屋に飾られる。以

前は複数の家での持ち回りであったが、いずれも衣棚通に面した家で行っていたという。

まず五月十六日に神社に預けた道具を取りに行き、翌十七日の午後三時頃から木野織物に町内の人々が集まって、三時間程かけて飾り付けをする。お飾りは、牛王宝印の軸を中心に、その前に二段の祭壇が設けられ、上段に御幣、鏡、御神酒、両脇に燭台・町内からの御神酒、向かって右側に鉾の鈴が供えられる。下段には三方が三つ置かれ、向かって左から米と塩、紅白の餅（上が紅、下が白の二重）、昆布とスルメが供えられる。鉾は、祭壇に向かって右側に出鉾する鉾、左に留守鉾が置かれる。また、祭壇前には吹散が広げられる。軒には提灯と幔幕が張られる。

トウヤに飾られる吹散は巡行に用いられる緋色のもので、新旧二流あるうち、新しいものが巡行に用いられる。飾られる吹散のほかに、明治九年に修復したとの記載のある箱に納められた、紺色の吹散（ただし、箱と中身の関係は不明）も伝来している。

（中尾 芙貴子）



柏鉾のお飾り（真如堂前町・表町・扇町）（内田みや子，平成24.5.14）

特徴

柏鉾（上京区真如堂前町・表町・扇町）

鉾は二基あり、一基は額に十六弁の菊紋、梅紋、下がり藤紋があり、これに長い方の剣を組み合わせている（これをAとする）。もう一基は額に十六弁の菊紋のみがあらわれており、これに短い方の剣を組み合わせる（これをBとする）。いずれも柏の葉をモチーフとした鍔が組合わされるが、Aの鍔の方がやや部品が多く、複雑な組み合わせ方になっている。吹散は牡丹の花の模様が織られた生地にも糸で十六弁の菊紋が刺繍されたものが一流だけ伝わっている。長柄については確認できなかった。剣の箱蓋、吹散の箱蓋、そして用途不明の箱の蓋に「明和三年「二七六六」戌八月十六日」、「有栖川宮御裏辰君御寄付」、「中木下町」などの墨書が確認できる。普段は一式を御霊神社の蔵に預けており、祭りに際して神輿衆の人に依頼して町へ運んでもらうことになっている。

町内での鉾の勤仕は一九六〇年代以来途絶えていたが、同志社大学の町家キャンパス「でまちや」にて、居祭りが復活した。「でまちや」とは、平成二十年度から四年間、京町家異世代協同プロジェクトと称して、大学が寺町通今出川下る真如堂前町の町家を借りたもので、当該地域の伝統行事にも積極的に関わるものであった。鉾の居祭りはこの「でまちや」で続けられてきたが、この調査を行った平成二十四年度は、このプロジェ

クトが終了し、「でまちや」は閉鎖されていた。しかし、鉾祭りの存続について熱心な地元有志によって、居祭りは寺町通今出川上る表町の惣菜店の店舗で行われた。鉾祭りの次第

平成二十四年度は祭りの五日前、五月十三日に居祭りの準備が行われた。午後一時、「柏鉾」と大きく墨書のある木箱二つを開け準備を始めた。一箱には剣や鍔など鉾関係の道具が、もう一箱にはかつて巡行時に着用した衣装や居祭り用の三方などが収められている。長年途絶えていたこともあり、詳細を知る人がいないため、鉾の組み立ては他の町のものを見よう見まねで行っていた。

鉾を飾りつけ、「柏御鉾」と書かれた提灯を入口の軒に吊すと、町内から三々五々、人々が集まりだす。この日から祭日の五月十八日まで当番を決めてお守りをする。

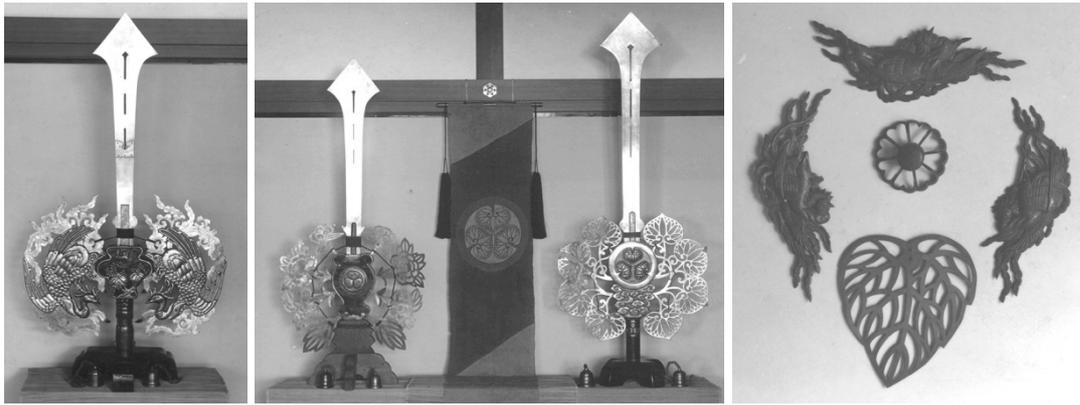
翌五月十四日は、午前十時頃に再び有志が集まった。この日は、御霊神社の神職を迎えて神事を行うため、御供えを整える。牛玉法印の軸の前に祭壇を据えて薦を敷き、榊、御神酒、塩、洗米を供える。その前には、一段低い八足台を並べ、その上に鏡餅、海の物（とろろん、昆布、山の物（果物、苺）の三方を供える。午前十一時、神職が訪れ、三か町の代表者および有志が参列し、神事が行われる。神事の内容は一般的なものである。その後、町内の人々が見学に訪れた。

鉾飾りは祭日の五月十八日まで飾られ、神輿が町内を通過した後、片付け始める。その他

鉾飾り一式が収められている箱や、剣の箱には「中木下町」の墨書が見られる。もともと中木下町で護持されていた柏鉾が、何らかの経緯で現在の三か町に委譲されたと考えられる。ただ、現在は中木下町という町名は残っていない。中木下町の消長と、柏鉾の伝来の関係は不明であるが、町内の方のお話では、幕末頃に委譲されたということである。

なお、一九六〇年代までの、鉾の護持組織のありようや、当時のしきたりなどについては、ほとんど聞き取ることができなかった。

（内田みや子）



③ その他の鉾

桐鉾・葵鉾・鶴鉾、茗荷鉾

御霊神社には、かつて桐鉾・葵鉾・鶴鉾、茗荷鉾の四基の剣鉾が伝わっていたという。

桐鉾は、安政四年頃の成立と思われる「御鉾吹散等奉納并町方江渡覚」で室町頭町が護持していたとあり、昭和九年のアルバム「御霊神社所蔵宝物史料」により、明治二十年（一八八七）に焼失したことがわかる。

葵鉾は、「御鉾吹散等奉納并町方江渡覚」で寺町八町組が護持していたことがわかるが、その後の成立と思われる「御鉾順番次第」（徳大寺殿町の箱蓋裏の貼紙）では立売八町組が護持していたという。ただし、「御霊神社所蔵宝物史料」には写真のみで護持に関する記載はなく、昭和初期にはその詳細はわからなくなっていたと思われる。

鶴鉾も同様に、「御鉾吹散等奉納并町方江渡覚」では内構町が護持していたと記載されているものの、「御霊神社所蔵宝物史料」には項目だけ立てられ、写真も掲載されていないため、詳細はわからない。

茗荷鉾は、「御鉾吹散等奉納并町方江渡覚」で木之下二町組が、徳大寺殿町の「御鉾順番次第」では上樹之下町が護持していたとある。しかし、「御霊神社所蔵宝物史料」には当社蔵となっており、委譲の時期は不明である。

これらの鉾は、現在、神社の蔵（神輿倉）に一部の部品があるものもあるが、ほとんどは確認できていない。

鉾・幸鉾

御霊神社の祭礼には、剣鉾、幸鉾、鉾の三種の鉾が巡行に出ている。このうち最大のものが剣鉾で、行列次第では先頭に近い位置にある。

幸鉾は剣鉾の後ろに位置して巡行する。八本あるが、それぞれを区別する名称はない。一般的な鉾と同じく、刃は木製で、鏝があり、その下に小さな幡が取り付けられている。しかし、長さ太さとも通常の鉾に比べて一・五倍から二倍程度、大きいのが特徴である（全長一・五メートル程度）。供奉人は、雑色の衣装で、一本につき一人あてがわれるが、手の力だけで持つことが困難なため、肩にもたれさせて、斜めに立てて巡行する。そういった点を考え合わせると、幸鉾もやはり、祭礼用に進化した特殊な鉾と言えるが、下御霊神社の幸鉾が昇鉾の形式の三叉鉾であるのとは大きく異なる。この幸鉾を供奉するのは、現在は学生アルバイトである。

『拾遺都名所図会』（二七八七年）の「御霊神事」の図に「けん十八本」記載があるのはいわゆる剣鉾であるが、その後ろに続く「けん八本」は、おそらくこの幸鉾



左より幸鉾／鉾（福持昌之、平成23.5.18）



「拾遺都名所図会」(1787年)には、「けん十八本のおわり」の後に「けん八本」がある

であろう。昭和二十一年九月に編纂された「御霊神社明細書」(御霊神社所蔵)の「御鉾并吹散御奉納御例(狂蔵記録)」の項に「享保十三戊申年八月日 青綺門院 幸鉾八本」とあり、享保十三年(一七二八)に寄進されたとされる。青綺門院とは、関白二条吉忠の娘で、元文元年(一七三六)に桜町天皇の女御となった。のちに皇太后となり、寛延三年(一七五〇)より青綺門院と称した。

鉾は二本ある。行列では、劍鉾、幸鉾の少し後ろに位置し、左右並んで二人一組で供奉する御弓、御箭、御楯と同じ一団である。これらは、いずれも祭具として一般的な大きさを、鉾の場合は全長およそ一・五メートル程度である。これらを供奉するのは、学区ごとに割り当てられた氏子地域の住民で、狩衣姿で奉仕する。

大きき以外の幸鉾と鉾との意匠の違いは、幸鉾の刃は金色、鉾は銀色に塗装されている、幸鉾の鍔は赤色の無地で簡素であるが、鉾の幡は白地の錦に金糸で菊紋が刺繍されている、幸鉾の鍔の下面には菊紋が施されているなどが指摘できる。

なお、幸鉾と鉾は、神社側で手配される祭具であり、これらを護持する鉾町や鉾仲間が形成されることはない。また、巡行にあたって特殊な技能も必要ない。

(福持 昌之)

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

毎年、御霊神社社務所で「御霊祭行列書・五月十八日御霊祭渡御道筋」が発行される。また、社報「こりようさん」に小栗栖宮司による劍鉾の紹介記事がある。

- 「劍鉾めぐり その一 太刀鉾」『こりようさん』第四号、御霊神社、二〇〇六年
 - 「劍鉾めぐり その二 龍鉾」『こりようさん』第五号、御霊神社、二〇〇七年
 - 「劍鉾めぐり その三 蓬萊鉾」『こりようさん』第六号、御霊神社、二〇〇七年
 - 「劍鉾めぐり その四 枝菊鉾」『こりようさん』第七号、御霊神社、二〇〇八年
 - 「劍鉾めぐり その五 鯉鉾」『こりようさん』第八号、御霊神社、二〇〇八年
 - 「劍鉾めぐり その六 菊鉾」『こりようさん』第九号、御霊神社、二〇〇九年
 - 「劍鉾めぐり その七 亀鉾」『こりようさん』第十号、御霊神社、二〇〇九年
 - 「劍鉾めぐり その八 紅葉鉾」『こりようさん』第十一号、御霊神社、二〇一〇年
 - 「劍鉾めぐり その九 寶鉾」『こりようさん』第十二号、御霊神社、二〇一〇年
 - 「劍鉾めぐり その十 鷹羽鉾」『こりようさん』第十四号、御霊神社、二〇一一年
 - 「劍鉾めぐり その十一 牡丹鉾」『こりようさん』第十六号、御霊神社、二〇一一年
 - 「劍鉾めぐり その十二 柏鉾」『こりようさん』第十八号、御霊神社、二〇一三年
- 立命館創立五十年史編纂委員会編『立命館創立五十年史』(立命館大学創立五十年周年記念事業局、一九五三年)
- 菊池京子「御霊信仰の成立と展開——信仰支持の階層を中心として」『史窓』十七・十八、一九六〇年
- 井上満郎「御霊信仰の成立と展開——平安京都市神への視覚」『奈良大学紀要』五、一九七六年
- 出雲路敬直「今宮・上御霊社の劍鉾——上京の祭(下)——」(上京区文化振興会編・発行『上京の史蹟』第四十三号、一九八六年)
- 五島邦治「平安京近郊の御霊会——ふたつの今宮を中心として」『古代文化』四十四・四十五、一九九二年

岸泰子「5014 近世期の上・下御霊社の社殿造営について―内裏内侍所仮殿下賜の経緯と目的」『学術講演梗概集』F-2、建築歴史・意匠、二〇〇三年

岸泰子「近世の内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」『日本建築学会論文系論文集』五百七十五号、二〇〇四年

藤田勝也「近世の内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」に対する討論（岸泰子『日本建築学会論文系論文集』575号、147-153、2004年1月号掲載）（『日本建築学会論文系論文集』五百八十一号、二〇〇四年）

本多健一「中世京都の御霊祭をめぐる基礎的考察―応仁の乱からの復興まで」『藝能史研究』百九十七、二〇一二年

劍鉾祭礼記録・古文書

「矢的鉾記録」文政七〜昭和十八年（塔之段六町鉾当番所蔵）

「御鉾吹散等奉納并町方江渡覚」（上御霊神社所蔵）

「御霊神社所蔵宝物史料」昭和九年十一月（御霊神社所蔵アルバム）

小栗栖憲昌「寶鉾吹散御奉納覚」昭和十三年（継孝院町所蔵）

小栗栖元瀬・小栗栖憲昌「御霊神社明細書」昭和二十一年（御霊神社所蔵）

「鯨御鉾再興由来記」昭和三十年〜四十六年（鞍馬口町・天上町所蔵）

「牡丹鉾吹散御奉納覚」昭和四十年（上柳原町所蔵）

「上柳原町の由緒書」（上柳原町所蔵）

映像記録等

木峰里沙「都名所図会に描かれる御霊祭の3DCGによる再現」（立命館大学映像学部平成二十三年卒業制作、二〇一一年）

このCG映像は、本調査プロジェクトの調査補助員が、本調査に関わったことを契機に制作したものであり、本報告書の映像編の付録に、参考資料として収載した（詳細は、映像編解説書を参照）。なお、この映像は『拾遺都名所図会』をベースに、現行の劍鉾のデザインを当てはめて、3DCGの動画化したものであるが、『拾遺都名所図会』の劍鉾の順番や数とは、若干異なっている。

（福持 昌之）

下御霊神社 下御霊祭還幸祭

毎年五月第三日曜日または第四日曜日

下御霊神社

京都市中京区下御霊前町

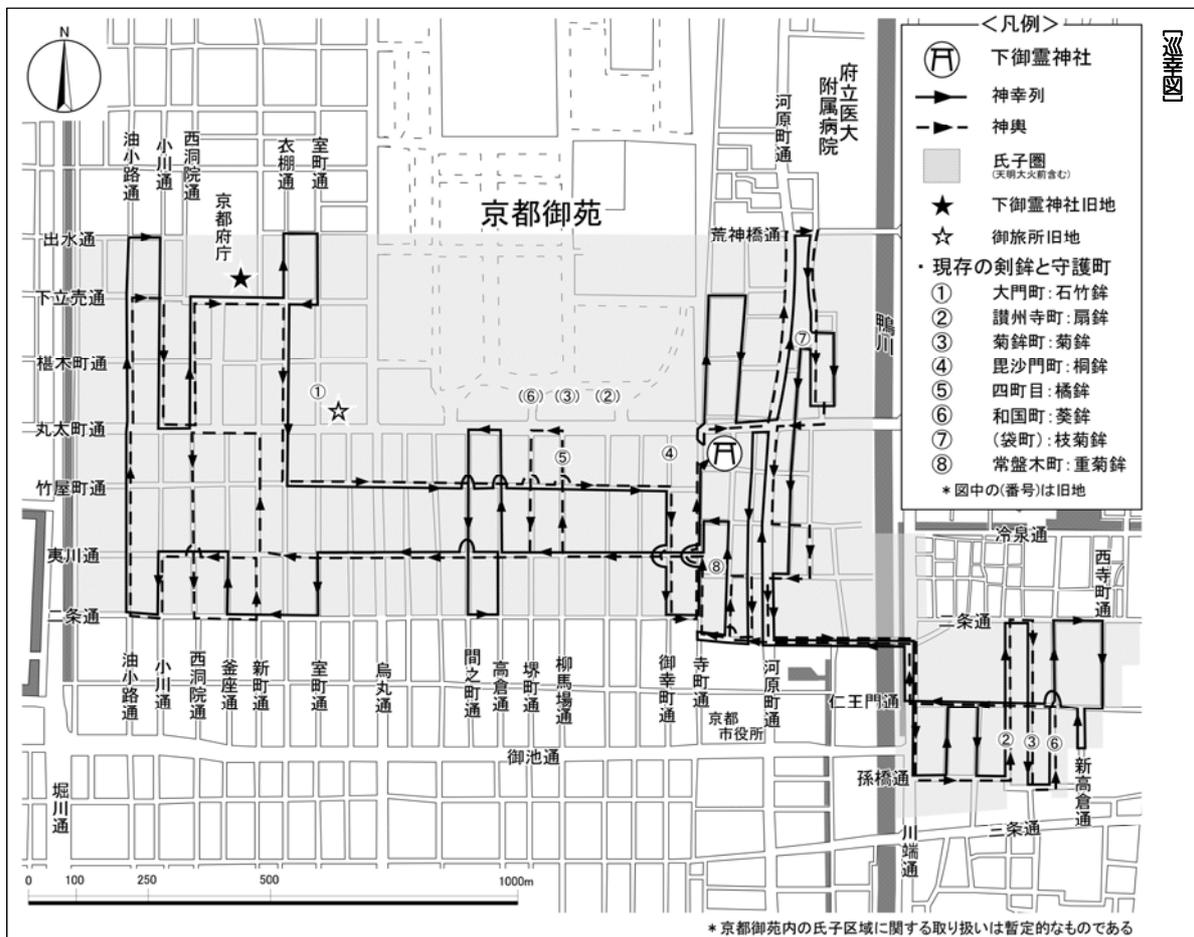
① 祭礼と由緒

地域の概要

下御霊神社は、中京区北東端の市街地に位置し、境内は上京区にもまたがっている。後述するように、当社はもともと現在地にあつたのではなく、過去に何度か鎮座地を移転している。旧府社であり、現在の宮司は劍鉾のまつりの研究者でもある出雲路敬直氏が務めている。

その氏子区域は、鴨川西岸では堀川通、出水通および荒神口通、鴨川、二条通に囲まれた地域（以下、「鴨西」という）であり、上京区と中京区とにまたがっている。北側は上御霊神社、西側は今宮神社、南側は八坂神社の氏子区域と接している。また、鴨川東岸ではおおむね鴨川、二条通、東大路通のやや西側、孫橋通に囲まれた地域（以下、「鴨東」という）であり、左京区の西南端を占めている。鴨西・鴨東両地域とも、京都御苑の部分を除いて市街地となっている。町数は合計で百七十七町である。

現在の氏子区域は、江戸時代の享保二年（一七一七）頃に編纂された『京都御役所向大概覚書』の「洛中洛外神社祭礼之事」および宝暦十二年（一七六二）の『京町鑑』「洛中洛外神事地分別」に記されている領域とほぼ同じであるが、鴨川東の氏子区域は、宝永五年（一七〇八）三月八日の大火後に、現在の京都御苑南部にあつた氏子町が強制移転させられた結果形成されたものである。一方、鴨西の氏子区域については、例えば八坂神社氏子区域と接する二条通では、道路をはさんで南北にまたがる両側町の中央を分断するように境界線が通っていることから、当地での氏子区域の形成は、両側町のそれに先立ち、遅くとも十五世紀前半



以前に遡ると推定される。

祭礼次第

現在の下御霊祭では、例年四月下旬に二基の神輿（大宮神輿、若宮神輿）や鳳輦などが境内の倉から組み立てられて拝殿へ据えられ、五月一日早朝の神幸祭において大宮神輿と鳳輦に御霊遷しが行われている（非公開）。若宮神輿への御霊遷しは、最近神輿会からの要請で、神社における同会合の際に行われるようになった。かつては神幸祭でも神輿が渡御していたが、今は神事のみである。なお、遷す御霊は、いずれも当社祭神である八所御霊神の御分霊である。

五月の第三または第四土曜日が宵宮であり、夕方から寺町通沿いに多くの屋台が出て、松明、子供神輿、それに十二灯といわれる提灯風流などが巡行する。ただ、これらの巡行は平成十一年（一九九九）より始まったものである。また、この日の朝から、各鉾町では劍鉾などを町会所や当番の家に飾る準備が始まる。現在劍鉾などを飾る町は、鴨東の讚州寺町（扇鉾）、菊鉾町（菊鉾）、和国町（葵鉾）と鴨西の毘沙門町（桐鉾）、上河原十二町組（枝菊鉾、常盤木町（重菊鉾）の六町である。お飾りが整えられたのを受けて、当日の午後から宮司が常盤木町を除く各鉾町を巡ってお祓いをする。平成二十三年（二〇二一）の場合、鴨東三町は午後二時から順繰りに、毘沙門町は午後四時から、「上河原十二町組」の袋町は午後七時からお祓いが行われた。常盤木町では、お飾りを組み立てる最中に、御神体（神号が記された掛軸）を町会長が神社に持参してお祓いを受けている。

翌日曜日が還幸祭当日となる。当日は、行列が神幸列と神輿とに分かれて氏子区域を巡幸している。これらは本来一体の祭列であるが、速度の違いから自然に離れてしまったものである。

神幸列は鳳輦を中心とし、劍鉾もこの行列に供奉する。神幸列は午前十時に神社を出御し、神社より東側の氏子区域を巡って、午後一時頃にいったん還御する。午前には供奉する劍鉾は、鴨東の扇鉾（差し鉾）・菊鉾（荷い鉾）・葵鉾（差し鉾）の三基であるが、鴨西の枝菊鉾（荷い鉾）も河原町通を巡るあたりに限って一緒に供奉する。午後は二時に出御し、神社より西側の氏子区域を巡って五時過ぎに還御する。

午後には供奉する劍鉾は枝菊鉾のみであるが、平成二十一年（二〇〇九）までは桐鉾（当時は差し鉾）も一緒に供奉していた。なお、神幸列の巡幸は、大雨の場合は中止される。

神輿は十一時半に出御し、まず東側、次いで西側の氏子区域を巡って、午後五時過ぎに還御する。現在巡幸するのは小ぶりの若宮神輿一基のみであるが、戦後まもなくの頃まで、大宮神輿も昇かれて巡幸していたという。

下御霊祭を執り仕切っている組織は、氏子総代会と下御霊神社神輿会であり、前者が祭全般の運営と神幸列、後者は神輿昇きを担当する。最近では梅屋神輿会のように元学区単位での神輿会も結成されている。

現在の還幸祭は五月の第三または第四土曜日に行われているが、これはもともと五月十八日が式日であったのを近年に変更したものであり、さらに明治八年（一八七五）以前では七月十八日に神幸祭、八月十八日に還幸祭が執り行われ、両日とも神輿が渡御していた。現在でも八月十八日には例祭が催されている。

なお、現在の下御霊神社には独立した御旅所はなく、境内の拝殿を御旅所とみなしている。『下御霊神社誌』（以下『神社誌』）によれば、かつて上京区室町通丸太町上ル大門町に御旅所があったが、豊臣秀吉による京都改造に伴い、天正十八年（一五九〇）、本社が現在地に移転した頃に廃されたという。

行列次第

神幸列は次のとおりである。（神輿を除く）

先太鼓―先拂―総奉行―劍鉾―真榊―猿田彦神輿―幸鉾（さいのほこ）―御楯―大手鉾―御弓―御矢―御劍―威儀組―釣台―楽太鼓―楽鉦鼓―楽人（午後のみ）―紫翳―鳳輦―菅翳―神馬―神職―氏子供旗持―氏子総代―町代表―献酒受・供釣台

由緒と歴史

現在の主祭神は八所御霊神、すなわち吉備聖霊・崇道天皇・早良親王・伊予親王・藤原大夫人（藤原吉子）・藤大夫（藤原広嗣）・橘大夫（橘逸勢）・文大夫（文室菅田麻呂）・火雷天神の八柱である。このうち吉備聖霊については、吉備真備という説が有力

であるが、神社では他の祭神のうち火雷神を除く六柱の和魂と解釈しているほか、吉備内親王という説もある『京都坊目誌』。いずれにしても、当社が古代の政争に敗れ、非業の死を遂げた人物たちの怨霊を慰撫する御霊信仰と深い関係にあることは間違いない。

ところで、下御霊神社および下御霊祭は、史料の上で上御霊神社および上御霊祭と判別できない場合が多く、両者の見極めはたいへん難しい。この点を踏まえつつ、以下に同社および同祭の歴史を概観してみたい。

上下御霊社とも創祀の年や経緯などは不明である。しかしおそらくはおおむね現在の賀茂川、今出川通、烏丸通、紫明通にはさまれた出雲路と呼ばれる地域に、かつて上出雲寺と下出雲寺という寺院があり、その鎮守社として創祀されたという説が一般的である。下出雲寺は『古今和歌集』において、安倍清行の歌の詞書に「下出雲寺に人の業のしける日」とあり、当初は現在の上記区上立売通寺町西入ル昆沙門町付近にあったらしい『古今集重抄』。

御霊祭の起源についても、詳しいことはわからない。たとえば貞観五年（八六三）、神泉苑で行われた御霊会『日本三代実録』との関連なども考えられるが、現時点では推測の域を出ない。出雲寺における御霊会は、史料上『小右記』長和四年（一〇一五）八月十八日条に初めて現れ、日付からしてこれが御霊祭の前身とみられる。次いで『明月記』建永元年（一二〇六）八月二十一日条には、「御霊祭」という呼び名で神輿巡幸などが行われていることが確認され、「両方祭渡之各神輿渡」という表現から、この頃までに上下御霊社とも創祀され、祭礼も同時かつ別々に執り行われていたと推定される。ただし史料上の初見は、下御霊祭は『兼朝朝臣記』応永五年（一三九八）七月十八日条、下御霊社は『吉田家日次記』応永九年一月二日条である。

十四世紀末頃から御霊祭の記録はきわめて多くなり、足利将軍による見物がしばしば行われたり、多数の鉾が出される（詳細は後述）など、中世後期以降、京都を代表する都市祭礼の一つになったといえる。ただ、当時の上下御霊祭にいかなる相違があったのかといったことはほとんどわからない。

また、中世における下御霊社の鎮座地について、『神社誌』や近世地誌などは上京区新町通下立売上ル西側藪之内町、すなわち現在の京都府庁付近にあったとしている。これを裏付ける同時代史料は乏しいものの、明治三十七年（一九〇四）、府庁本館建設工事中に下出雲寺のものとみられる布目瓦が発見されており『京都坊目誌』ただし現物は未確認、おそらく中世前期に下出雲寺が出雲路から当地に移転し、それゆえ下御霊社も同じ地に鎮座したと推測されよう。応永三十四年（一四二七）には、足利義持寄進によって社殿が建造されており『後鑑』、この時に神輿も新調されたという『遠碧軒記』。

近世に至り、下御霊社および下御霊祭にとつての大きな出来事は、天正十八年（一五九〇）の京都改造に伴う本社現在の地移転と宝永五年（一七〇八）の大火であろう。特に宝永の大火では社殿や神輿が焼失し、先述の通り、多くの氏子町が鴨川東岸に移転したり、神輿巡幸路も変更されるなどの影響を受けた『音無川』など。十八世紀頃まで、祭礼の神輿は神社西側の氏子区域しか巡らなかつたようであるが『京都御役所向大概書』、天保年間（一八三〇―一八四四）には鴨東を含む東側の氏子区域も巡るようになっていた『神社誌』。ただし、この時期でも剣鉾が供奉するのは西廻りのみであった。上下の御霊祭は、近世においても京都を代表する祭礼の一つであり、明治三年（一八六九）の京都府令では、祇園、今宮、稻荷とともに祭礼式日が休日と定められている『京都町触集成』。

また、近世の下御霊社は、上御霊社と並んで御所の氏神という扱いを受けており、特に霊元天皇の崇敬が厚かつた。たとえば宝永六年（一七〇八）と寛政二年（一七九〇）の二度にわたって内侍所仮殿を下賜されているほか（後者は現本殿、神輿巡幸においても、御所門前（建春門）まで渡御して神輿振りが行われていた『京童』など）。ただ、いかにしてそのような地位になったのかという点については不明な部分が多い。

② 劍鉾と組織

石竹鉾（上京区 大門町）

概要

石竹鉾は、別名草葵鉾ともいい、もともと上京区大門町で守護されていた。『神社誌』によれば、永享七年（一四三五）、後花園天皇より寄附されたとの伝承を有する。また永正十五年（一五一一）、大門町で石竹鉾を修理したという墨書があるというが、後述する現物調査では発見できなかった。

さらに延宝年間（一六七三―一六八二）、黒川道祐が下御霊社司である板垣民部から由緒などを直接聞き取りした『遠碧軒記』によると、豊臣秀吉の頃、下御霊社を尊崇する沢路宗久という人物がおり、「この宗久は、大門の町に大方居たるとみゆ、此宗久が出す鉾を、遺言にて下御霊へ送る、今御霊より祭る一本の鉾は、此宗久が鉾なり」とある。つまり最初は宗久が個人で所有していた鉾を、後になって下御霊社に寄進したということであり、町による守護という実態とはやや異なる内容であるが、おそらくこれが史料上の石竹鉾の初見と思われる。先述の通り、大門町には十六世紀まで下御霊御旅所があったと伝えられており、この点でも当鉾が下御霊の中で最古の劍鉾とみなしてよいであろう。

しかし、石竹鉾は近年町での守護がなくなくなり、その他の祭具と一緒に下御霊神社に預けられて、現在は境内の倉の中にある。祭礼に出されることもない。祭具の梱包用につめられた新聞紙から判断して、町から預けられた時期は昭和五十四年（一九七九）の頃であろう。

平成二十三年（二〇一一）九月、計測を中心とする現物調査を実施し、次のような現状が明らかになった。石竹鉾は大小二基あり、小ぶりの方が鋳も平面的であり、より古い鉾である。古い鉾の剣には、表に「天明三 癸卯 歳七月吉日」、裏に「鋳師 浦井庄左衛門流常」とあり、鋳の箱書からも、天明三年（一七八三）、「建仁寺町松原通上ル 鋳師庄左衛門」「下河原鷺尾町 塗師文蔵」（いずれも現在の東山区）によって新調されたことがわかる。鋳・受金とも意匠は撫子科の多年草で



石竹鉾（新鉾）（本多健一，平成 23.9.17）

ある石竹花、鋳受（額）の銘には「下御霊」とあった。

一方、新しい鉾の鋳は、やはり石竹花の意匠を主としつつ、きわめて立体的なつくりとなっている。受金のデザインも石竹花である。鋳受（額）の銘は「下御霊」。剣に銘はないが、下部に菊の御紋が浮き彫りにされている。鋳の箱書から、文政十一年（一八二八）七月に新調、安政四年（一八五七）に修復されたことがわかる（「文化十二年」という表記もあるが、同年は子年ではなく、他の墨書からも文政十一年が正しいと思われる）。新調時か修復時かはわからないが、「新烏丸竹屋町下ル丁 鋳師 宇兵衛」「塗師 吉右衛門」ともあった。

吹散は四本あり、箱書から一本は文政九年、もう一本は天保九年（一八三八）に新調されたらしい。『神社誌』によれば、安永八年（一七七九）に仙洞御所から拝領されたものと天保十年に閑院宮から拝領したものとがあるというが、確認できなかった。他には、石竹花の意匠を配した提灯、法被、笠などが一式残されている。

かつては町内で鉾飾りなども行われていたと思われるが、今となっては当時の事情を知る人はほとんど皆無であり、詳細はわからない。



讚州寺町 扇鉾 (本多健一, 平成 24.5.19)

概要

扇鉾 (左京区 讚州寺町)

扇鉾は、左京区新富小路通仁王門下ル讚州寺町で守護されており、『神社誌』によれば、文明年間(一四六九―一四八七)、後土御門天皇より寄附を受けたとするが、天保四年刻成の「神幸図」(後述)では、その年をより詳しく文明十一年(一四七九)としている。当町はもともと富小路通丸太町上ルにあつたが、宝永の大火で当地に移転してきている。現在、町内の家は約四十五軒、六組の隣組が構成されている。

剣に銘はないが、下部に菊の御紋が浮き彫りにされている。鏝のデザインは左右に日月を配した扇、受金には菊が三つある。鏝受(額)表の銘は「御寄附」、裏には「讚州寺町中江」とあつた。鏝の箱表には「禁裏御所 扇御鉾 壹本 御寄附」、箱裏には「安政貳年乙卯七月新調 扇御鉾 御幸町押小路下町 鏝師 吉兵衛」の墨書があるので、現在の鉾は安政二年(一八五五)に禁裏から寄附を受けたものである。剣は他にもう一本あるということだが、未確認である。吹散は四本あり、うち三本が鉾とともに会所に飾られる。箱書によれば、これ

ら四本は、それぞれ安永五年(一七七六)に仙洞御所からの寄附、天保十一(一八四〇)年に仙洞御所からの寄附、嘉永三年(一八五〇)に禁裏からの寄附、それに平成元年(一九八九)に京都国体を機に新調といった由来になる。しかし、『神社誌』では、嘉永三年を除いて異なる由緒を記しており、この理由は不明である(なお、他町の吹散でも『神社誌』の記述と箱の墨書などの乖離が大きい)。

トウヤ飾り・鉾祭り

讚州寺町のお飾りは、毎年町会所で行われる。スケジュールは前日の朝九時から準備を始め、午後には下御霊神社宮司のお祓いを受ける。翌還幸祭では、扇鉾が町内に戻ってきた後、夕方の午後五時から片付ける。

お飾りは「御霊八所大明神」という神号が書かれた掛軸の祭壇を中心とし、剣、吹散、それにスルメ、昆布、果物、紅白饅頭などを供える。

なお、剣鉾も含めて、お飾りの道具一式は町会所内に保管されている。

鉾差し

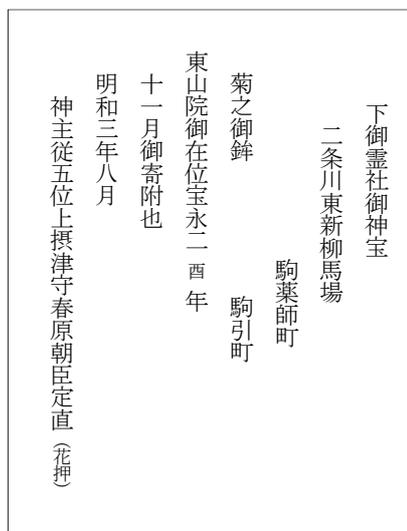
扇鉾は差し鉾であり、鉾差しは藤田修氏に差配を依頼している。鉾差しは三人は当日朝七時半に町内へ来て扇鉾を預かり、組み直して午前八時半頃、新洞小学校に鴨東の他の剣鉾と一緒に集合する。次いで神社に移動して新島会館で待機、午前十時からの神幸列に供奉する。午前中に鴨東を廻ると、扇鉾は鴨川を渡らずに町内へ戻って終る。

菊鉾 (左京区 菊鉾町)

概要

菊鉾は、左京区新柳馬場通仁王門下ル菊鉾町で守護されている。『神社誌』によれば、宝永二年(一七〇五)十一月に東山天皇より寄附を受けた。このことは、別記した町内古文書にも明記されている。当町はもともと駒薬師町といって柳馬場通丸太町上ルにあり、宝永の大火で当地に移転した。その後明治に新柳馬場通をはさんで向かい合う駒引町と合併した際、現在の名に改めている。

菊鉾には留守鉾と台車に乗せられて巡行する荷い鉾との二基があり、前者の方



菊鉾町 古文書（中尾芙蓉子氏翻刻）



菊鉾町 菊鉾（本多健一、平成 23.5.21）

ほぼ同じであるが、片付けは神輿が通った後、午後三時頃から始めている。

お飾りは「御霊大明神」という神号が書かれた掛軸の祭壇を中心とし、劍鉾、吹散、それに鯛、スルメ、大根、筍、白菜、椎茸、みかん、餅などを供える。箱蓋の墨書によれば、神号掛軸は天明二年（一七八二）、「中山前大納言」の筆によるものである。

なお、劍鉾も含めて、お飾りの道具一式は町内の決まった二軒の家に保管されている。

その他

町内には、蓋表に①「菊御鉾 東山天皇御寄附文書 菊鉾町」、②「菊御鉾什物目録并規約書 菊鉾町」、③「駒薬師如来再安之記（寫） 菊鉾町」と記された三つの木箱に古文書類が収められて保存されている。先述した菊鉾の由緒に関する古文書は①に収められている。ほかは明治以降のものが多い。

桐鉾（中京区 毘沙門町）

概要

桐鉾は、別名菊桐鉾ともいい、中京区御幸町通丸太町下ル毘沙門町で守護されている。『神社誌』によれば、宝永二年（一七〇五）十一月、東山天皇より寄附を受けている。つまり菊鉾と同じ由緒であり、この旨後述する留守鉾の鋳受（額）にも明記されている。

桐鉾には留守鉾とかつて差されていた鉾（旧差し鉾）との二基があり、前者の方が古いという。旧差し鉾の剣には、表に「菊桐乃御鉾御劔 享保十二丁未八月吉日」、裏には「毘沙門町 平成十年五月修復」と銘があった。留守鉾の剣には、銘はない。鋳受（額）の銘は、留守鉾では表に「御霊社」、裏に「此御鉾寶永二乙酉年十一月 東山院御寄附 天明五年乙巳七月復造 禁裏御所白銀頂戴奉修復」、旧差し鉾では表に「御霊社」、裏には「此御鉾寶永二乙酉年十一月 東山院御寄附 寛政十二庚申年七月復造 禁裏御所白銀頂戴奉修復」。ともに鋳の意匠は十六菊と五

が古いという。剣には銘がなく、鋳受（額）の銘は、留守鉾の表に「御霊社」、裏に「御祈禱 神主正五位下撰津守定道」、荷い鉾の表に「御霊社」裏に「禁裏 享和三癸亥 歳 御寄附 御所 御再□」とあった。ともに鋳の意匠は、十六弁八重菊を左右に三つずつ配したものの。受金にも菊が三つある。新しい荷い鉾が享和三年（一八〇三）に新調されたとすれば、古い留守鉾は、宝永二年に寄附された物である可能性は高い。

吹散は四本あり、赤色が三本、緑色が一本である。赤色のうち一本が巡行に用いられ、その他はお飾りに飾られる。当町の古文書によれば、これまで宝永二年に東山天皇より、寛政十年（一七九八）に綾小路従三位宰相より、文政十二年（一八二九）に大宮御所より、天保十三年（一八四二）年に禁裏御所より、嘉永六年（一八五三）に禁裏御所より吹散の寄附を受けたとされている。なお、現在の町内の人は「吹散」と言わず、「ミオクリ」と呼んでいる。

トウヤ飾り・鉾祭り

菊鉾町のお飾りは、毎年、昔庄屋の家だったというB氏宅で行われる。荷い鉾は町内の駐車場を組み立てられ、台車に乗せられる。劍鉾は四十年ほど前まで差していたというが（鉾差しは一乗寺の籠屋「葬儀屋」であったという）、今は学生アルバイトが台車を押している。準備や劍鉾巡行などのスケジュールは、讃州寺町扇鉾と



毘沙門町 桐鉾 (本多健一, 平成 24.5.19)

七桐、受金には菊が二つと桐が一つある。これによれば、留守鉾は宝永二年、旧差し鉾は享保十二年（一七二七）の新調と考えられるが、その後どちらも修復しているの、今ある鉾が当時の物そのものであるかどうかはわからない。

旧差し鉾は平成二十一年（二〇〇九）まで差されていたが、剣などの傷みが激しいため、その翌年からは居祭りとなつている。町内では剣を新調したいという声が聞かれるが、今後どうなるか、具体的なことは未定である。当時は鉾差しを藤田修氏に依頼して、午前中に扇鉾を差した鉾差し三人が、午後に出町に移動して、西廻りの神幸列に供奉してもらっていた。棹も一本残っている。

吹散は四本あり、うち二本が飾られる。箱蓋の墨書によれば、二本は寛政三年（一七九一）、一本は文久三年（一八六三）にそれぞれ禁裏御所から寄附された物、残り一本は平成二年（一九九〇）に新調されたと思われる。

トウヤ飾り・鉾祭り

菊鉾町のお飾りは、毎年、神祭具の製作・修理をしているT氏宅で行われる。前日朝六時に道具を取りに行き、午前九時から飾り付け、午後四時にお祓いとなる。翌日は、午前中は飾りたまま、午後二時から四時にかけて片付けを行った。

なお、剣鉾も含めて、お飾りの道具一式は下御霊神社の倉に保管されている。

その他

町内のH氏によって、「毘沙門町祭り 重寶物品記録 平成十六年五月」という目録が作成さ

れており、町所有祭具の一覧がわかる。

なお、同氏は枝菊鉾の吹散が収められていた箱の蓋も所有しており、墨書から文政五年（一八二二）に「准后御方」から寄附された物であつたらしい（処分されかけていたのをもらったとのこと）。

橘鉾 (中京区 四丁目)

概要

橘鉾は、中京区柳馬場通丸太町下ル四丁目守護されていたが、近年町での守護がかなわなくなり、現在は京都市歴史資料館に寄託されている。『神社誌』によれば、この鉾も宝永二年（一七〇五）十一月、東山天皇より寄附されたという。後述する「菊御紋使用許可願」によれば、橘鉾は天明八年（一七八八）の大火で全て焼失し、その後文化八年（一八一二）に「御修葺」したが、元治元年（一八六四）に「橘御鉾之花」（鉾鉾のことか）や吹散を除いて、再び焼失したとされる（さらにその後新調されたか）。

筆者は未見であるが、計測調査によれば、現存する鉾の銚受（額）の銘は表が「下御霊」、裏が「御祈禱」、銚の意匠は橘を左右に四つずつ配したものである。それ以上の詳しい事情などは未詳である。

葵鉾 (左京区 和国町)

概要

葵鉾は、左京区新堀町通仁王門下ル和国町で守護されている。『神社誌』によれば、享保元年（一七一六）八月、津山少将（松平喜重）の母、元照院の「復興寄附」を受けたという。「復興寄附」とは、これ以前にも鉾があつたが、それが何らかの理由で失われたために、改めて寄附を受けたという意味にも解せよう。当町はもとと堺町通丸太町上ルにあつたが、宝永の大火で当地に移転してきている。

葵鉾には留守鉾と差し鉾との二基あり、町内には、それぞれを「留守番」、「お供」と呼ぶ人もいた。前者の方が剣が短い、ともに剣に銘はない。銚受（額）の



和国町 葵鉾 (本多健一, 平成 24.5.19)

銘は、留守鉾の表が「御霊社」、裏が「御寄附」、差し鉾の表が「下御霊社」、裏が「御寄附」である。ともに鍔は葵の葉と十六菊とを配したもので、受金は三つ葉葵が一つある。葵は松平家の紋であるが、そもそも当町と松平家とにどういう由縁があったのかはよくわからない。

現在の吹散は二本あり、箱書によれば、天明三年(一七八三)に仙洞御所から拝領したとあるが、後述する古文書類によれば、その後も何度か吹散の寄附を受けており、現在の吹散が天明三年の物とは考えにくい。

トウヤ飾り・鉾祭り
和国町のお飾りは、毎年、町内のN氏宅で行われている。準備や片付けのスケジュールは、菊鉾町とほぼ同じである。

お飾りは「御霊八所大明神」という神号が書かれた掛軸の祭壇を中心とし、剣鉾、吹散、それにスルメ、昆布、みかん、りんご、紅白餅などを供える。箱書によれば、神号掛軸は寛政九年(一七九七)のものである。

なお、剣鉾も含めて、お飾りの道具一式は町内の一か所に保管されている。

鉾差し
葵鉾の鉾差しは、一乗寺の渡辺氏に差配を依頼し、還幸祭当日は三人の鉾差しが来ている。当日のスケジュールや経路などは、扇鉾とほぼ同じである。なお、菊鉾が差し鉾であった頃は、神幸列における順番は菊鉾の後であったが、菊鉾が

荷い鉾に改造されたのを機に菊鉾の前になったという。

その他

町内にはいくつかの古文書類が残されており、明治以降のものが多いが、一部は近世に遡る。剣鉾関係で重要なものとしては、例えば『葵御鉾 御神前御寄附 延享元子八月吉日』と記され冊子があり、延享元年(一七四四)に葵鉾や吹散の由緒をとりまとめた上で、その後も加筆されている。また、天保六年(一八三五)四月、町中より「大典侍御局様 御役人中様に宛てた『乍恐奉願上口上書』は、吹散の寄附を依頼する古文書の控である。

概要 枝菊鉾 (上京区・中京区 「上河原十二町組」)

枝菊鉾は、現在上京区春日学区と中京区銅駝学区の十一町が交代で守護している。具体的には春日学区が袋町、上生州町、出水町、榎屋町、伊勢屋町、駒之町、俵屋町の七町、銅駝学区が末丸町、鉾田町、大文字町、指物町の四町であり、これらはおおむね河原町通と鴨川にはさまれ、比較的新しく開発された地域に位置している。

『神社誌』によれば、枝菊鉾はもともと元禄十五年(一七〇二)、長宮(後の中御門天皇)の寄附によるものであり、元文二年(一七三七)から「上河原十二町組」の守護になったという。これが現在の守護町グループの前身であるが、時代によって町構成には変更がある。

祭礼時の持ち回りの仕組みは、春日学区の七町は各一年ずつ、銅駝学区の四町で合わせて二年間、鉾の守護を担当する。つまり九年で一巡する。春日の場合、当年の担当町に加えて、翌年の担当町も補佐している。ちなみに平成二十三年(二〇一一)の担当は袋町、二十四年(二〇一二)は上生州町であった(平成二十五年は銅駝学区の予定)。なお、鉾や台車の組み立てには、他の鉾町代表なども加わって行う。

枝菊鉾には留守鉾と台車に載せられて巡行する荷い鉾との二基があり、前者の



枝菊鉾 (本多健一, 平成 23.5.21)

方が剣が短くて古い。留守鉾では、剣の銘は表「天明元辛丑七月十八日 替劔上川原町組町寄進」、裏「下御霊神寶 長宮御寄附」であり、銚受(額)の銘は表「下御霊社」、裏「八所大明神」であった。荷い鉾では、剣の銘は表「文政四巳年七月吉日 建仁寺松原上ル 菊鉾一式新調^作之 銚師丸屋庄左工門」、銚受(額)は日月の意匠である。つまり留守鉾の剣は天明元年(一七八二)、荷い鉾の剣は文政四年(一八二二)の新調である。一方、ともに銚の意匠は花と葉をつけた菊の折枝、受金には菊が三つある。また『神社誌』によれば、現在の荷い鉾は、慶応元(一八六五)年八月に棹を短くして昇き鉾に改造されている。

吹散は最近新調され、巡行に用いる一本のみであった。他にも銅駝会館(銅駝字区の自治会館)などに保管されている可能性があるが、未確認である。台車には、金具で飾った欄縁の下に霊獣の水引、その下に沢瀉と竹林七賢の胴掛を掛ける。トウヤ飾り・鉾祭り

お飾りの場所は、各担当町によって毎年変わる。前日の朝八時頃から道具を取りに行き、九時から台車の組み立てや鉾の磨き・組み立てなどを行う。午後二時に下御霊神社の助勤宮司が来て神饌を整え、午後七時にお祓いを行う。当日は午前中、河原町通を巡るあたりに限って荷い鉾が神幸列に供奉する。これは守護の

町々に鉾を見せるためであろう。午後は西廻りの神幸列に荷い鉾が供奉し、午後五時過ぎに戻ってきた後で簡単な直会をする。片付けは翌日の午前中に行う。

お飾りは「正一位下御霊八所大明神 千時享保六辛丑年八月甲子日神主從五位下撰津守春原朝臣直元謹書之」という神号が書かれた掛軸の祭壇を中心とし、剣鉾、それに鯛、ハマチ、スルメ、高野豆腐、きゅうり、なす、筍、大根、椎茸、みかん、りんご、餅などを供える。

なお、剣鉾も含めて、お飾りの道具一式は銅駝会館に、台車のみ下御霊神社に保管されている。

その他

蓋の表に「枝菊鉾申送り簿」という貼紙、裏に「慶應元乙丑歳八月」と墨書された木箱の中に、慶応元年以来の、枝菊鉾守護町間での申送り簿が保管されており、現在でも毎年の担当町が祭礼の記録を書いて、次の町に引き継いでいる。申送り簿の導入は、昇き鉾への改造が契機になったと推測される。

それ以前については、『上庄州町文書』の中に、文政九年(一八二六)八月の祭礼の手順を記した古文書が残されている『史料京都の歴史』所収。

重菊鉾(中京区常盤木町)

概要

重菊鉾は、中京区寺町通二条上ル常盤木町で守護されている。『神社誌』によれば、享保二十年(一七三五)、中御門天皇より寄附され、その後明和三年(一七六六)八月から常盤木町で守護されるようになったという。この間どうなっていたのかは不明であるが、宝暦十二年(一七六二)の『京町鑑』には、富小路通夷川下ル鍛冶屋町の記述中に「西側大石屋何某より八月十八日御霊神事に鉾出す」とあり、この鉾が重菊鉾であった可能性がある。また、後述する「菊御紋使用許可願」には、明和三年に当町で守護するようになった経緯が「御霊神主ヨリ依頼」と記されており、菊鉾町で紹介した古文書とあわせて、同年には下御霊社神主・春原定直によって剣鉾の再整備がなされたと推定される。



常盤木町 重菊鉾（本多健一、平成 24.5.19）

金は三つ巴であった。このようにどちらも鍔受（額）の年代が古く、傷みやすい剣は新しい物のようであった。鍔の意匠は、いずれも十六重菊を中心に菊の花や葉を配したものである。

現在の吹散は九本あり、全て飾られている。吹散の箱は五箱あり、一箱のみ天明六年（一七八六）の墨書があったが、他は確認できていない。
トウヤ飾り・鉾祭り

常盤木町のお飾りは、毎年、町内の日氏宅ガレッジで行われている。準備は前日朝九時頃から始まり、還幸祭の夜に簡単な直会をする。片付けはその翌日の午前九時から行っている。当町では、鉾の剣や鍔を磨くのは、女性の役割と決まっているそうである。

御神体は「御霊八所大明神」という神号が記された掛軸であるが、その他の鉾

重菊鉾には新旧二基の鉾があり、どちらも居祭りである。かつては差し鉾であったが、差された姿を見ることがある人はいなかった。旧の鉾では、剣の銘は表のみ

「天保五 甲午 年八月 鍔師 躰阿弥」、鍔受（額）の銘は表が「御霊八所大明神」、裏が「享保二十年 乙卯 八月十八日」、

受金は沢瀉であった。一方新鉾では、剣の銘は表「常盤木町」、裏「昭和五年五月 鍔師 柳原栄三」、鍔受（額）

の銘は表「御霊八所大神」、裏「明治十五年五月十八日」、受

金は三つ巴であった。このようにどちらも鍔受（額）の年代が古く、傷みやすい剣は新しい物のようであった。鍔の意匠は、いずれも十六重菊を中心に菊の花や葉を配したものである。

町と異なり、当町では町会長が神社に御神体を持参してお祓いを受けている。なお、劍鉾も含めて、お飾りの道具一式は町内の日本茶専門店倉庫に保管されている。かつては町内各家に分散して保管されていたことである。

③ その他の鉾

ここでは、かつてはあったが現在は失われた鉾について触れておきたい。

沢瀉鉾・牡丹鉾

この二基の鉾は、『神社誌』によれば、寛永八年（一六三二）、東福門院の寄附による。ともに御幸町通二条上ル達磨町の櫛田八左衛門が守護していたが、その死後、寺町通三条上ル天性寺前町にある矢田寺の僧、溪南が同人の子であったために、同寺の守護となった。寄附時に板倉伊賀守署印にて二石余が下賜され、下御霊社領となっていたのを、鉾の維持のために矢田寺に譲渡されたという。このことは『京町鑑』にも「天性寺前町（筆者注・中略）矢田寺名地藏有、此寺より八月十八日下御霊神事に鉾二本出す、是御幸町二條上ル町よりあづかり也」と記されている。その後、元治元年（一八六四）のどんどん焼けで、ともに焼失している。なお、澤瀉は下御霊神社の社紋である。

龍鉾・玉鉾

この二基の鉾は、『神社誌』によれば、宝暦八年（一七五八）、関東上臈松島の寄附による。当初は御霊講が守護していたが、文化六年（一八〇九）から八幡町、下丸屋町、上鍛冶町、東竹屋町、夷川町、大黒町の六町で守護するようになった。これらはおおむね小川通と西洞院通に面した町々である。文政十二年（一八二九）、ともに昇き鉾に改造されたが、やはり元治元年のどんどん焼けで焼失している。

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

下御霊神社に関する詳細な社誌として、これまでたびたび引用してきた下御霊神社編『下御霊神社誌』（下御霊神社、一九〇七年）がある。

また、上下あわせた御霊神社・御霊祭について論じた主要な論文には以下のようなものがある（刊行順）。

出雲路敬直「劍鉾寛書（一）」（京都精華学園研究紀要十、一九七二年）

大島新一「鉾の出る祭とその歴史的背景——上御霊・下御霊両神社の例祭に見える劍鉾とその氏子組織をめぐって——」（『京都民俗』六、一九八八年）

岡田莊司「平安京中の祭礼・御旅所祭祀」（岡田莊司『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会、一九九四年）

本多健一「中世京都の祭礼における鉾とその変容——比較祭礼文化史のための基礎的考察——」（『藝能史研究』一八九、二〇一〇年）

本多健一「中世京都の御霊祭をめぐる基礎的考察——応仁の乱後の復興まで——」（『藝能史研究』一九七、二〇一二年）

下御霊神社では、毎年下御霊祭の前に『下御霊つうしん』というB4版一枚のパンフレットを発行しており、そこで当年における神社からの報告や連絡、下御霊祭を中心とする祭礼の予定などが紹介されている。

劍鉾祭礼記録・古文書

十五世紀から十七世紀前半までの御霊祭の鉾に関する記録はかなり多いが、それらは全て上下に腑分けできないか、あるいは上御霊祭の可能性が高いものばかりであった。下御霊祭のみに限定した場合、確実な鉾の記録は、管見の限り延宝四年（一六七六）の『日次紀事』八月十八日条「下御霊ノ神輿モ亦同時ニ拝殿ヲ出ツ、鉾五本別當氏子并ニ雑色供奉」まで下ると思われる。もちろん中世に寄附

を受けたとする伝承なども考え合わせると、下御霊祭の鉾の歴史はかなり古いと推定されるが、それを確実な史料によって復原することは困難である。伝承も含めて、御霊祭における鉾の主要な記録を、年代順に『日次紀事』直前まで並べると次のようになる。

応永十二年（一四〇五）

八月十八日 御霊祭における鉾の初見（『教言卿記』）

永享七年（一四三五）

後花園天皇より大門町石竹鉾が寄附されたとの伝承（『神社誌』）

嘉吉三年（一四四三）

九月十八日 御霊祭における鉾が五十余本に及ぶ（『康富記』）

文明年間（二四六九—一四八七）

後土御門天皇より讚州寺町扇鉾が寄附されたとの伝承（『神社誌』）

明応七年（二四九八）

八月十八日 応仁の乱で中断していた御霊祭神輿巡幸が復興、鉾もあわせて復活（『親長卿記』、ただし上御霊祭の可能性が高い）

永正十五年（一五二八）

大門町石竹鉾を修理したとの伝承（『神社誌』）

天文十六年（一五四七）頃

御霊祭において劍鉾の鉾差しが行われる（上杉本『洛中洛外図屏風』、ただし上御霊祭の可能性が高い）

寛永八年（一六三一）

東福門院より澤瀉鉾と牡丹鉾が寄附されたとの伝承（『神社誌』）

以上からわかるように、延宝四年に出されていたとされる五基の鉾のうち、四基は石竹鉾、扇鉾、澤瀉鉾、牡丹鉾であったと考えられる。残り一基は不明であるが、先述のとおり葵鉾であった可能性もある。

一方、天保年間（一八三〇—一八四四）になると劍鉾は十二基となって、西廻りの神輿巡幸に供奉していた。その順番は石竹鉾、扇鉾、澤瀉鉾、牡丹鉾、菊鉾、桐鉾、橘鉾、葵鉾、枝菊鉾、龍鉾、玉鉾、重菊鉾であった（『神社誌』）。この順番は

おそらく劍鉾の格式の序列を意味し、各町で守護された歴史の古い順に序列が定められたと推定される。その他個別の記録や伝承は、それぞれの劍鉾に関する部分を参照されたい。

下御霊神社には、江戸時代の下御霊祭の様子や劍鉾の由緒などを記した一枚物の「神幸図」が残されている。これは菱川清春の絵、祖父江左門の彫による摺物で、天保四年（一八三三）の刻成である。『神社誌』の中で劍鉾などに関する記述の一部は、これに拠ったと推定される。劍鉾について他に特筆すべき古文書類はない。

また、京都府総合資料館には、明治三年（一八七〇）四月、当時の下御霊神社劍鉾を守護していた八町（含「上河原十二町組」）が、京都府に対し由緒などを述べた上で、鉾鎗や吹散に使用していた菊御紋の使用許可を申請した行政文書が残されている（「上下御霊神社劍鉾御紋使用許可願」。収録簿冊名は『京都府庁文書』明一―二十四「石清水社士族社務等之惑乱一件」である）。内容は『神社誌』とほぼ同様であるが、より詳しい由緒を述べている部分もある。

その他各鉾町に保存してある古文書類は、それぞれの劍鉾に関する部分を参照されたい。

（本多 健二）

愛宕神社・野宮神社 嵯峨祭

神幸祭 毎年五月第三日曜日
 還幸祭 五月第四日曜日
 愛宕神社・野宮神社
 京都市右京区嵯峨野地域

① 祭礼と由緒

地域の概要

嵯峨祭は、京都盆地の西北に位置する嵯峨野地域の春の祭りとして知られており、愛宕神社と野宮神社の両社が共同で行う祭礼である。

愛宕神社は、京都市右京区嵯峨愛宕町に位置し、愛宕山の最高峰朝日峰の山頂近くに鎮座する神社である。祭神は伊弉冉尊・埴山姫神・天熊人命・稚産霊神・豊受姫命とされる。本社は「愛宕さん」の通称で親しまれており、全国に約九百社ある愛宕神社の総本社である。

野宮神社は、右京区嵯峨野野々宮町に位置し、天龍寺の北、小倉山山麓の二尊院に通ずる道の竹林中に鎮座する神社である。祭神は野宮大神（天照大神）とされる。

祭典は両社の宮司以下神職が取り仕切っているが、祭りの運営は嵯峨野地域の自治会が行っている。自治会は二十九あり、町や町内に所在するマンションなどの単位で構成されている。自治会の名称は次の通りである。清滝町、鳥居本町、中院町、小倉町、大門町、北嵯峨町、観空寺町、西井頭町、井頭町、小淵町、北堂ノ前町、堂ノ前町、八軒町、椎野町、広道町、若宮町、裏柳町、立石市宮、瀬戸川町、野々宮町、北造道府宮、ガーデン嵐山、嵐山本町、長辻町、造道町、龍門町、アネックス嵯峨、角倉町である。

自治会の中から選出された人々で組織する嵯峨祭奉賛会（以下、奉賛会と略す）が、祭りの中心的な役割を担っている。奉賛会の役員は次の通りである。嵯峨祭奉賛

会々長・巡行総指揮者、鉾巡行指揮者、鉾巡行副指揮者、神輿巡行指揮者、神輿巡幸副指揮者、愛宕神輿責任者、愛宕神輿副責任者、愛宕神輿世話方責任者、愛宕神輿脚立責任者、野宮神輿責任者、野宮神輿副責任者、野宮神輿世話方責任者、野宮神輿脚立責任者、獅子責任者、雅楽責任者、神・太鼓責任者、随行係、車両係、稚児行列、子供神輿、献酒係、半纏係、接待係（大覚寺）、接待係（嵐山）、鉾立係、巡行安全係、嵯峨中学生神輿指導、出納係、総務である。

そのほかに協力団体として、愛宕子供神輿の巡行を支援する体育振興会、野宮子供神輿の支援と稚児行列を補佐する少年補導委員会、巡行路の交通安全対策の総括を務める交通安全推進会、巡行全般の警備と情報連絡の総括を務める消防分団、子供神輿二基を支援する嵯峨小学校PTAがある。



鉾差しのハイライト（青江智洋、平成25.5.22）

嵯峨祭で巡行する劍鉾は五基あり、それぞれ鉾を護持する自治会が管理している。大門町が護持する龍鉾、中院町が護持する麒麟鉾、鳥居本町が護持する澤湯（おもたか）鉾、四区（しく）（小淵町、井頭町、西井頭町）が護持する菊鉾、瀬戸川町・龍門町・角倉町が共同で護持する牡丹鉾である。各町内では有志の者が集まって鉾差しの組織を結成している。鉾差しの責任者は「幸領」（鉾幸領とも）と呼ばれ、幸領をサポートする役目として世話などが置かれている。また、各町では巡行に出す鉾とは別に飾り鉾を有しており、祭りに合わせて特定の場所へ飾っている。嵯峨祭における鉾差しは、「嵯峨祭の劍鉾差し」として、京都市無形民俗文化財に登録されている。

祭礼次第

嵯峨祭は、例年五月の第三日曜日に御旅所で神幸祭（オイデともいう）を行い、同月第四日曜日に還幸祭（オカエリ・本祭ともいう）を執り行っている。

平成二十三年は、二月五日に第一回幹事会が開催された。奉賛会の役員等が御旅所で祭りの執行計画などについて話し合った。三月と四月にも同様に幹事会が行われた。そのほか、四月に行う定時総会では昨年度の決算報告ならびに今年度の予算案の承認が行われた。同月の常任理事会では、神幸祭と還幸祭の役割分担が確認された。五月十一日には世話方の会議を開催し、巡幸全般についての確認が行われた。

劍鉾が出るのは還幸祭の巡幸行列においてである。劍鉾を有する自治会では、ゴールデン・ウィークが明けた頃から還幸祭の二日前くらいまで、毎晩のように鉾差しの練習を行っている。奉賛会の代表と各鉾町との打合せもこの頃で、各鉾町から二名ずつが嵯峨小学校に集まり、巡行ルートや鉾を差す場所について確認する。

平成二十三年度の神幸祭は五月十五日に行われた。午前八時から常任理事や神輿の関係者が御旅所へ集まり、神輿二基の飾り付けを行い、午前十時から愛宕神社・野宮神社の両宮司以下神職によって祭典が営まれた。

同日、鉾を有する自治会は、斎竹を立てる作業に追われる。竹は各町でそれぞ

れ採取する場所があり、斎竹を立てる場所や本数にも決まりがある。

同月二十一日の還幸祭の宵宮では、翌日の祭礼に向けて準備に追われる役員もいるが、鉾差しは翌日の巡行に備えて早めに休息をとる。

翌二十二日の還幸祭では、神輿の関係者は午前六時に御旅所へ集合する。ほぼ同時刻、鉾の関係者は鉾立ての準備を始める。鉾立てとは、祭りの早朝に御旅所の鳥居前へ劍鉾を立てることをいう。鉾立ての柱は五本用意されており、それぞれの柱に鉾の名前が墨で書かれている。鉾立てのしきたりとして、年番の鉾を一番に立てることが決まりとなっている。年番とは、五基ある劍鉾の中から、その年の代表を務める地域のことである。年番の鉾が立った後であれば、他の四本の鉾は順序関係なく立てることができる慣わしになっている。高張提灯も一緒に結びつける。

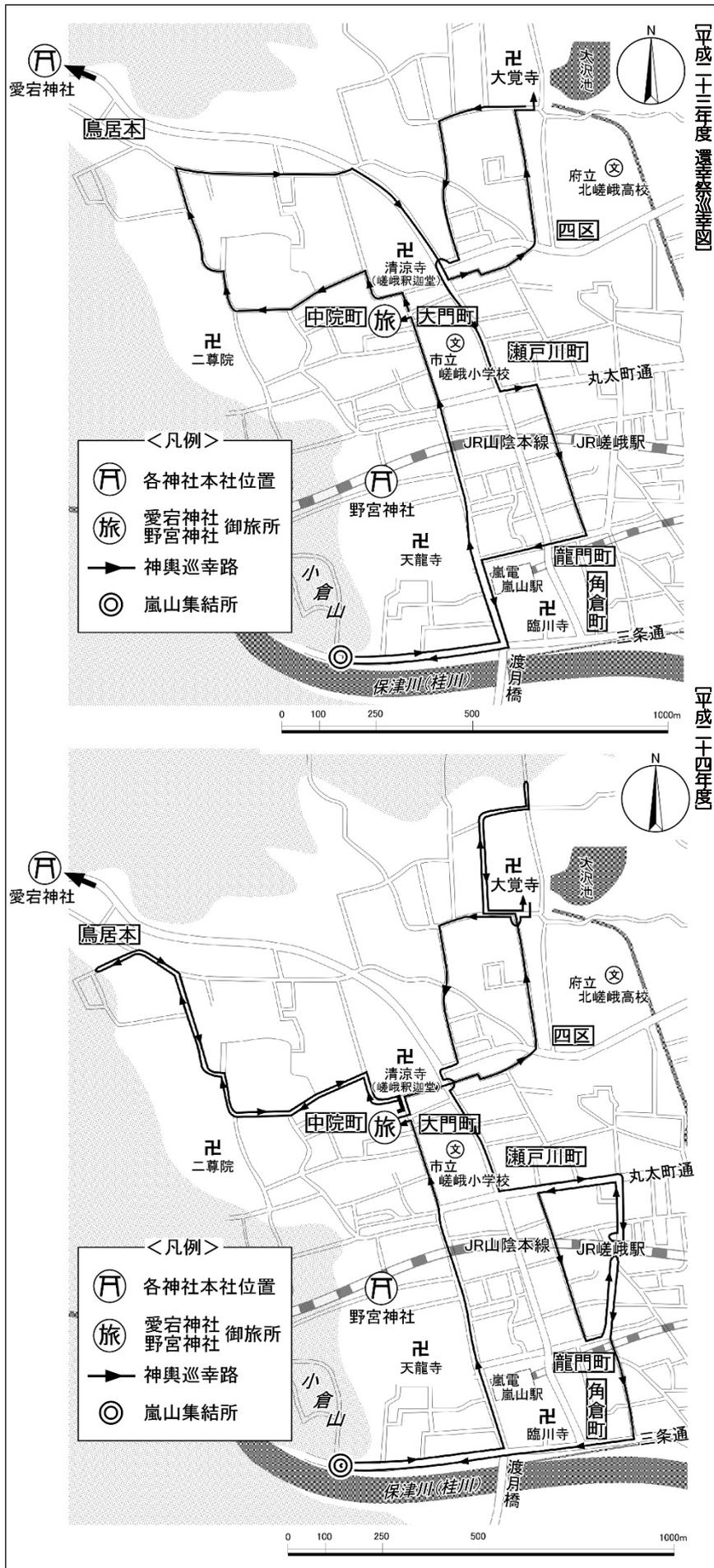
九時三十分祭りに祭りの関係者が御旅所へ集合する。愛宕神社・野宮神社の両宮司のもとで還幸祭の祭典が執り行われる。

祭典終了後、劍鉾が御旅所を出発する。年番の鉾を先頭にして、午前中の休憩地点である大覚寺へ向かう。巡行路で鉾を差すポイントについては、年番の鉾幸領と町内の意向が反映されるが、例年だいたい決まった場所で行われている。

大覚寺には昼までに到着し、勅使門から境内に入って鉾を差す。境内に鉾を立ててから休憩となる。後から到着した神輿は大覚寺の僧侶から祈祷を受ける。



斎竹立ての作業
(青江智洋, 平成 24.5.20)



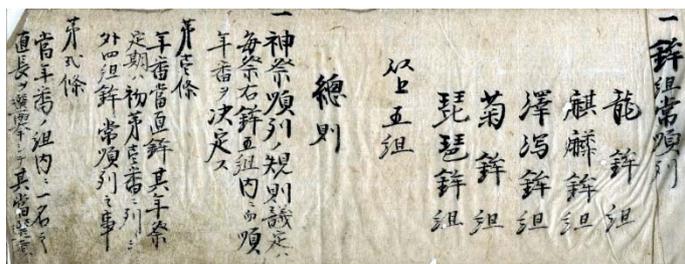
午後は大覚寺から嵐山集結所（嵐亭前）へ向かう。集結所に到着すると、しばし休憩をとり、御旅所へ向けて再出発する。御旅所までの巡行路では鉾を差し続ける。ここが嵯峨祭における鉾差しのハイライトとなる。渡月橋から新丸太町通までは電線が地中化したので、五本の鉾を同時に差せるようになった。

午後四時ごろ、御旅所へ到着。鉾によっては御旅所へ入り、拝殿まわり（鉾を差しながら拝殿の周囲を巡る）をするものと、御旅所をそのまま通過して自町内へ帰るものがある。拝殿まわりを行うかどうかは幸領の判断に任せられている。

還幸祭の翌日には関係者によって御旅所の清掃などが行われる。また、翌週の日曜日を目安として、鉾を有する各自治会では反省会が行われる。

行列次第

平成二十三年（二〇二一）における還幸祭の巡幸路は図の通りである。巡幸列順は、折り返し地点となる嵐山集結所までの往路が、雅楽車―榊・大鼓車―神官車―鉾（五基）―指揮者―獅子―脚立車―理事巡行―愛宕神輿―野宮神輿―献酒車となる。復路は、雅楽車―榊・大鼓車、神官車―稚児行列（途中から参加）―子供



「嵯峨祭年番巡回記録」総則 明治16年(1883)



鉾順位木札 (青江智洋, 平成23.5.22)

神輿二基—劍鉾(五基)—指揮者—獅子—脚立車—理事巡行—愛宕神輿—野宮神輿—献酒車となる。ただし、巡幸では警察官が雅楽車の前に立って交通整理などを行うことになっている。巡幸ルートは二通りあり、隔年で調整されている。平成二十三年は中院町から鳥居本町へ行くコースであった。もう一方は大覚寺西の通りを北上し、北嵯峨地域を巡るコースである。

五本ある剣鉾の巡行列順は年によって違う。年番がその年の先頭を務めるが、その他の鉾の順位は次のように取り決められている。

- 鉾順位
- 第一年 大門—中院—鳥居本—四区—天龍寺
 - 第二年 中院—大門—鳥居本—四区—天龍寺
 - 第三年 鳥居本—大門—中院—四区—天龍寺
 - 第四年 四区—大門—中院—鳥居本—天龍寺
 - 第五年 天龍寺—大門—中院—鳥居本—四区
- (奉賛会が有する木札の墨書による。木札は祭り当日、御旅所の鳥居前に立てかけられる。)

天龍寺とあるのは牡丹鉾を有する町内を指している。大門町(龍鉾)の列順は常に一番か二番であり、それ以降の順番になることはないのが特徴である。それに対して天龍寺地区(牡丹鉾)は四年間最後尾を務め、一年だけ先頭を務めることになっている。この巡行列順は、明治時代に定められたものであると関係者の間で

は語られているが、後述する奉賛会所蔵の祭礼記録簿には、年番の順番は定められているものの、年番以降の鉾の順番は記されていないことから、この巡行列順の詳細は不明である。還幸祭の翌日に、役割を終えた年番がこの祭礼記録簿と小旗を次の年番のところへ持っていく風習があり、これを「申し送り」と称する。

平成二十三年の年番は牡丹鉾であった。つまり、札にある第五年目にあたる。由緒と歴史

嵯峨祭は、かつて旧暦四月中の亥日を祭日としていたようであるが『山城四季物語』(二七四年刊)、明治維新後は五月一日に神幸祭、同月二十三日に還幸祭を行うようになった。この日が祭日に選ばれた経緯については、それを伝える記録がないため不明である。当時の鉾差しの練習は、神幸祭から還幸祭までの期間としていたそうである。昭和四十〜五十年代に、サラリーマンとして勤めに出ている関係者が祭りに参加しやすいうように神幸祭を五月第三日曜日、還幸祭を同月第四日曜日に変更し、現在に至っている。

現在、鉾を護持する地域が持ち回りで管理している祭礼記録簿がある。明治十六年(一八三三)五月から現在まで毎年追記されており、表題には「嵯峨祭年番巡回記録」とある。これは、鉾の年番と祭りに係る出納の記録であり、年番となった鉾の宰領が責任を持って一年間管理することになっている。冒頭に明治十六年五月の日付で五条からなる総則が記されており、龍鉾組、麒麟鉾組、澤瀉鉾組、菊鉾組、琵琶鉾組という五組の鉾組総代が議決の署名をしている。ここにある琵琶鉾は明治十六年の記録に現れるだけで、以降は記録から消えている。代わって明治二十年(一八八七)からは牡丹鉾が記録されている。つまり、天龍寺地区が有していたと考えられる琵琶鉾がなんらかの理由によって牡丹鉾に代わったものと推測される。

また、現在では鉾の責任者を「宰領」と称しているが、この記録簿を見ると、宰領の表記は平成三年(一九九一)からであり、明治十六年(一八三三)から平成二年(一九九〇)までは当直長と記されている。ただし、中院町の鉾会(鉾組)が所蔵する「鉾係覚帳」(昭和十五年(一九四〇)条)には宰領の表記がある。どち



大覚寺での鉾立て（青江智洋, 平成 24.5.27）

らにせよ、当直長と幸領は同じ役割を意味するものである。
 祭礼記録簿の総則には、鉾の順列や鉾建に関する取り決めなどが記載されて
 いる。鉾の巡行順列は次のように記録されている。

- | | | | |
|------|-------|------|------|
| 鉾差シ | 麻上下 | 順鉾組頭 | 羽織袴 |
| 年番御鉾 | ミフクリ持 | 鉾供歩 | 五名以上 |
| 鉾差シ | 羽織袴 | 鉾供歩 | 五名以上 |
| | ソフリ | 一文字笠 | ソフリ |
| | | 麻上下 | ソフリ |
| | | 一文字笠 | ソフリ |

また、この記録を見る限り、昭和二十年（一九四五）から二十二年（一九四七）、
 昭和三十三年（一九五八）、昭和四十三年（一九六八）
 から昭和五十年（一九七五）までの祭礼記録が見当たらない。地元の古老の話によると、この期間はさまざま
 な事情によって祭礼が小規模化あるいは中断しており、
 鉾も出されなかったのだという。その後、地域住民
 の尽力によって、昭和五十一年（一九七六）に鉾差し
 が復活した経緯がある。
その他
 かつて鉾は神輿と巡行
 路を別にしていたので、鉾
 が大覚寺へ入るようなこと

はなかったという。昭和六十年（一九八五）前後から大覚寺へ寄るようになった。
 それ以前は天龍寺へ寄って昼休憩をしていたという。また、五十年程前の巡行で
 は鉾が野宮神社へ立ち寄り、神社で鉾の御祓いが行われたという。

昭和六十三年（一九八八）に開催された京都国体で、嵯峨野地域の鉾を披露
 しているが、その際、嵯峨野の鉾の差し方と東山地域の差し方に違いがあること
 に初めて気付いたという。

嵯峨野地域では、「鉾を差す」という表現ではなく、「鉾を振る」という言い方
 をする場合が多いようである。実際に鉾を左右へ振るようにして差している。た
 だし、「嵯峨祭年番巡回記録」明治十六年条には「鉾差シ」と記載されている。本
 報告では「鉾差シ」に表現を統一した。
 （青江 智洋）

② 鉾と組織

龍鉾（大門町）

概要

龍鉾は三基ある。三基とも、左右の飾りは龍の意匠である。

一基は差し鉾で「本鉾」と呼ばれる。明治期に森本安之助（現一基 森本鍔金具製
 作所）により作られたと伝えられ、巡行に参列している。もう一基は留守鉾として
 飾られ二番目に古いと言われているが、年代は不詳である。この二基以外に稽古
 鉾と呼ばれる練習用の鉾が一基あり、江戸時代末期のものとされ、最も古く、昔
 差し鉾であったと伝えられている。

吹散は、現在使われているのは十年ほど前に（株）川島織物で新調したもので
 あるが、それ以前に使用していたものが一流、倉庫に保管されている。

鉾の管理は大門町の鉾保存会（代表M氏）が行なっており、鉾及びその他祭具も
 すべて嵯峨豆腐森嘉の倉庫に保管されている。



龍鉾 (河野康治, 平成 23.5.22)

鉾祭りの次第

鉾差しの練習は、奉賛会を通して保険がかけられ、稽古鉾を使って二〜三週間前から始める。祭りの四、五日前から本鉾を組み、稽古鉾は解体して、本鉾で練習を行う。本鉾は祭り前日から嵯峨豆腐森嘉の倉庫の前に飾られる。これは天気次第であり、飾るかどうかの判断は世話方が行う。飾り付け等の準備は、幸領、世話方、鉾差し、鉾関係者で前日の午前八時から九時に行う。

還幸祭当日は、巡幸列が午前十時に御旅所を出発し、午後五時頃に御旅所へ戻って来ると、当屋（龍鉾の保管・管理を行っている大門町世話方の嵯峨豆腐森嘉）ではすぐ鉾の解体が行われ倉庫に片付けられる。当屋飾りの片付けは還幸祭の翌日午前八時から九時に行う。

還幸祭翌日、年番を次の町に送る際には「右〇〇鉾へ申し送り候なり」と書か

れた申し送り書と紫色の旗（四十センチメートル四方）を渡すことになっている。奉賛会ができる以前は、この旗を持つ年番が他の鉾に指示を出していたようである。

鉾差し

基本的に各町で鉾の差し方は異なり、他町のものを差すことができないほどである。町内で鉾を差す者がいなくなり鉾差しを中断していた時期は、トラックの荷台に鉾を載せ、各町をまわっていたという。町会計簿には、昭和五十一年三月十九日に鉾復活寄付金を町内の各隣組から募った記録がある。

トウヤ飾り

留守鉾は、世話方である嵯峨豆腐森嘉の東隣、同店の倉庫の前に飾られる。

その他

大門町の龍鉾は他と異なり、吹散を子ども二人が持つて巡行する。また、現在は使われていないが、倉庫に菊の御紋が入った吹散の箱がある。

(河野 康治)

麒麟鉾 (中院町)

概要

中院町は、嵯峨二尊院門前北中院町、嵯峨釈迦堂門前南中院町、嵯峨釈迦堂門前裏柳町、嵯峨小倉山耕明神町、嵯峨二尊院門前長神町、嵯峨二尊院門前往生院町、嵯峨二尊院門前善光寺山町の一帯を指す。麒麟鉾の保存や鉾差しを行うのは、中院町自治会の下部組織である鉾会である。鉾会は、基本的に鉾差しの経験者から構成される。鉾会会長一名、幸領一名、責任者一名、世話方（シマリ）一名、鉾供五名、差し手十一名からなる（平成二十三年度現在）。差し手は町内の有志が担当する。麒麟鉾には巡行用の本鉾と会所に飾られる飾鉾の二基が存在するほか、練習用の鉾もある。飾鉾の意匠は二対の麒麟であり、受金に鳳凰が描かれている。飾鉾は個人が寄贈したものである。この鉾会とは別に、慈眼堂の中院観音を護持する組織である文化財保存会がある。



麒麟鉾 (松田有紀子, 平成 24.5.27)



巡行中の澤瀉鉾
(今中崇文, 平成 24.5.27)

鉾祭りの次第

中院慈眼堂は中院町の会所であり、鉾をはじめ、祭礼に用いる神具なども保管している。鉾は還幸祭前日の朝に慈眼堂前に立て、町内に披露する。当日は留守鉾を慈眼堂内に祭壇を設けて飾り、本鉾が帰還すると撤収する。会所には軸を祀り、その脇に飾鉾を飾る。中院町の軸には「明治十六年夏」「正二位藤原為理」との記載があり、上冷泉家の第二十代当主で歌人の冷泉為理(れいぜい)ためただの手によるものと推測される。

鉾差し

祭礼に関して町内を取り仕切るのは鉾会会長である。幸領は差し方の中から選出され毎年交代する。差し手をまとめる者はシマリと呼ばれる。当町では差し手は白い地下足袋を身に着けるが、シマリのみ白い法被と草鞋を身に着ける。差し手の新人は、まずは見習いとして提灯持ちから始める。ある程度経験を積むと、アシイレを任される。これは、差し手が交代する際に、鉾を足指で固定して寝かす役目である。鉾を寝かす際に鉾を支えるのに使う道具は又(マタ)といい、又入れば差し方の経験者に任される。中院町の鉾差しは「一本足」と呼ばれる差し方である。差し手は顔を正面に固定し、ゆっくりと百八十度振って鈴を鳴らし、音に余韻をもたせる。

その他

鋳の蓋裏にある「大正十三年二月新調 麒麟鉾 中院町」という墨書が、調査で発見できた最古の記録である。同年は麒麟鉾の年番にあたる。平成二十四年の幸領・瀧野博史氏によれば、麒麟鉾の巡行順は四番目より後にはならないのだという。(松田有紀子)

概要

澤瀉鉾 (鳥居本町)

澤瀉(おもたか)鉾は、鳥居本町の自治会によって護持され、差し鉾として巡行行列に加わっている。現在、同町には四本の剣鉾があり、「本鉾」二本と「練習鉾」二本となっている。

現在、巡行に出ている本鉾は、大正十二年(一九二三)の新調と伝えられる。鋳にはオモダカの上に鳳凰が舞う意匠が施され、受金には菊(こき)とオモダカの紋が見える。これらは、吹散と同様、山鹿清華による意匠である。鋳受(額)の表面に「愛宕神社」、裏面に「大正十二年/癸亥五月吉日」と記されており、鋳を収納する木箱の蓋裏面にも「大正十二年五月新調/鉾/嵯峨町鳥居本」という墨書があるとされる。剣は平成六年(一九九四)に(株)森本鋳金具製作所で作った

ものを使用している。また、平成二十三年（二〇一一）に銚の一部が割れたために、修理してメッキをし直している。

本銚の吹散は、梅ヶ畑に工房を構えた紅型の染織家、栗山吉三郎が昭和六十年（一九八五）に町内へ寄贈したもので、天然染料で花鳥図が染めぬかれている。

祭礼の間、オヤドに飾られている本銚は、「旧本銚」と呼ばれている。飾りの中央部分にはオモダカが配され、受金には三つの菊の紋が見える。銚の表面には「愛宕山大権現／野々宮大明神」「文化十二年乙亥年 四月吉日」、裏面には「仙翁寺為二世安楽／建仁寺門前／鋳師浦井庄左エ門春常造」の刻印がある。銚銚の部品を収めている木箱にも、蓋の表面に「御銚鋳州濱纏テ納ム」、内面に「文化十二乙亥年 四月吉日」、箱表面に「仙翁村」の墨書があるとされる。旧本銚とともに飾られる吹散は、町内に居を構えていた染織家、山鹿清華が昭和六年（一九三一）に製作したもので、本綴れ織りで花鳥図を表したものである。

練習銚は、本銚に比べると、意匠などが簡略化された作りになっている。

銚銚をはじめ祭礼に必要な道具はすべて、化野念仏寺の南隣にある鳥居本町集会所（一九八四年四月竣工）に保管されている。銚差しの練習も集会所で行われており、集会所の建物横には練習のための鉄パイプ製の櫓が組まれている。

銚祭りの次第

五月の大型連休に入ると、銚差しの練習が始まる。練習は月曜日から土曜日の午後八時から九時半ごろに行っている。かつて、祭礼が五月二十三日に固定されていたころは、大型連休から毎日練習を行っていた。

オイデ（神幸祭）の日になると、鳥居本では斎竹立てとオヤド（御宿）の飾り付けが行われる（後述）。かつてはオイデでも銚を差しており、近年では昭和五十一年（一九七六）や昭和六十三年（一九八八）のオイデの際に町内で銚を差している。

オカエリ（還幸祭）当日、銚差しは七時半に集会所へ集合し、巡行の準備を始める。準備ができると、銚銚をトラックの荷台に固定し、オヤドに向かって出発する。オヤドの前に設けられた台に銚銚を固定すると、愛宕神社から神輿のハナカンがやって来るのを待つ。ハナカンが到着すると、銚銚が台から外され、再びト

ラックに載せられて清涼寺へと向かう。清涼寺門前からは、担いで御旅所まで運ばれ、御旅所の駐車場に設けられた柵に固定され、巡行行列の出発まで待機となる。

巡行における鳥居本の順番は、一年ごとに年番（一番）↓四番↓四番↓三番↓三番↓年番（一番）と交代する。

巡行行列が御旅所まで戻ると、清涼寺門前に待機しているトラックまで担いで運ばれ、鳥居本の集会所まで戻る。銚銚の片付けは当日中に行われるが、銚差しの衣装などは一週間陰干しにされ、翌週の土曜日に片付けられる。

銚差し

澤瀉銚の銚差しは、いずれも鳥居本町に暮らす人々で構成されている。平成二十四年（二〇一二）現在、五十二歳から三十二歳までの十二名がおり、神輿を昇く「神輿方」に対して、「銚方」とも呼ばれている。

銚差しの中から経験や技量に優れた人が「世話方」（二名）に選出され、巡行や練習において中心的な役割を果たしている。また、引退した銚差しが「幸領」（二名）として後見役を務める。

かつては青年団によって銚差しが行われていたが、青年団がなくなってきた自治会の有志によって細々と続けられてきた。一時期、銚差しが三名しかおらず、たいへん苦労したことがあったという。また、昭和四十三年（一九六八）から五十年（一九七五）ごろにかけては、トラックで巡行を行っていた。



オヤドの日本銚（今中崇文、平成 24.5.27）

昭和四十年代後半までは、福王子の方へ鉾差しとして手伝いに行っていたと伝えられる。

トウヤ飾り

オイデ(神幸祭)からオカエリ(還幸祭)にかけて、日本鉾がオヤド(御宿)に飾られる。オヤドには通りに面していて鉾を飾ることのできる部屋のある家が適当であるため、十数年前から地区内の船井氏と小畑氏の二軒が隔年で勤めることになっている。

オヤドの飾り付けは、齋竹立てとともに、オイデの日に行われる。

オヤドには祭壇が設けられ、中央奥には小松宮彰仁親王(一八四〇-一九〇三)の筆になる「愛宕大神」の掛け軸が掛けられる。祭壇向かって左側に日本鉾、右側に山鹿清華作の吹散が飾られ、日本鉾の奥には將軍地蔵の描かれた掛け軸が掛けられる。

齋竹は祇王寺入口、竹林の入り口、オヤドの入り口(八体地蔵のところ)、愛宕神社の鳥居辺りの四か所に立てられる。

オヤドと齋竹の片付けは祭礼当日の午後三時ごろから、自治会で別働隊を組織して行われている。かつては祭礼終了後に行っていたが、数年前から別働隊による片付けに変更している。

その他

鉾差しが剣鉾の棹尻を入れる帯は、「フンドシ」もしくは「マワシ」と呼ばれており、帆布に革を縫い付けて作られる。フンドシの革部分は「サオブクロ」と呼び、サオブクロに型をつける作業を「ガンをつける」ともいう。サオブクロは、かつてのものよりも長くなる傾向にあるとされる。

昭和五十年(一九七五)ごろまで、剣鉾は地区内の渡辺氏宅の土蔵で保管していた。鉾差しの練習も渡辺氏宅の庭で行っていた。また、八体地蔵の近くの麦畑(現在は駐車場)で練習を行っていたこともある。

(今中 崇文)

菊鉾(四区)

概要

嵯峨祭の菊鉾は「四区」が担っている。四区は西井頭町(にしいとうちょう)、井頭町(いとうちょう)、小淵町の三町から構成される。

鉾の銚受(額)には、表に「愛宕山大神」、裏には「野々宮大神」と記されており、二つの神名が記されていることが菊鉾の特徴である。平成二十四年の祭りから棹と鈴当を新調している。また、現在は使っていないが、古い吹散が残されており、箱には明治四十五年(一九一三)の墨書がある。

一時縮小や中断していた嵯峨祭の剣鉾が、昭和五十一年(一九七六)に復活し、それにあわせて四区でも剣鉾が再開した。再開するまでは、トラックの荷台に剣鉾を載せて、差さずに巡行した年もあった。現在の組織や行事次第は再開後からのものである。それ以前、四区に青年会組織があったころは、青年会が剣鉾の役割を担っていた。中学校を卒業すると青年会に入り、祭りの前に身を清めるための「風呂沸かし」の役などにあたったという。

今日では、祭りの朝に年輩者が「風呂呂に入ってきた」と言っても、剣鉾再開後から祭に参加している人には意味が通じなくなつたという。また、まだ住宅の少ない頃、練習の際に誤って剣鉾を倒してしまうときには「藪へ持っていけよ」と声がかかったものだという。藪なら倒しても剣鉾の痛みが少ないからである。

鉾祭りの次第

宿の飾りは、祭り前日に四区集会所に祭壇を作り、剣鉾を中心に飾る。また町内の清涼寺の東側と六道の辻に齋竹を立てる。

還幸祭が終わると、その日のうちに宿の飾りと齋竹、提灯が片づけられる。清涼寺近くの竹は、清涼寺東側の公園内の建物(西井頭自治会の会館)に片づけられる。

鉾差し

現在、四区で祭礼にかかわるのは鉾差しの方と役員である。四区の鉾差しは、希望者で行っている。役員に関しては小淵↓井頭↓西井頭の順で年番が回ってくるため、回ってきた町の自治会長が幸領となる。町の役員は会長、副会長一名、



四区集会所での菊鉾の飾り (佐藤直幸, 平成 23.5.27)



四区集会所に残る、かつての青年会の旗 (佐藤直幸, 平成 23.5.27)

会計の四名であり、年番の町から吹散持ちや巡行責任者を出す。

その他の役割では、劍鉾を倒す際に鉾を支えたり、鉾差しをする際に鉾が倒れたりしないようにするための小さなサスマタ状の道具の「オニ」を持つ人もいる。先が二又に分かれ、形状がオニの角のようであるため、そう呼ばれている。

鉾の差し方については、四区は中院町、大門町に似ていると地元では認識されている。四区ではサシカワを「オビ」と呼ぶことが多い。

近年は後継者の育成のため、子供の頃から鉾に触れ、練習をしてもらえれば、という意図で地元の小学校に鉾を寄付している。ただし、女子の参加についてはまだ禁止している。

その他

四区の名称は西井頭町、井頭町、小淵町の三町が「嵯峨村第四区青年会」の区域であったことに由来する。当時の青年会の旗が四区集会所に残っている。四区

集会所の場所には、元々古い建物があり、水車で米を搗いていたという。現在の集会所には昭和五十二年（一九七七）の上棟式の札がかかっている。

(佐藤直幸)

概要

牡丹鉾 (嵯峨天龍寺瀬戸川町・嵯峨天龍寺龍門町・嵯峨天龍寺角倉町)

牡丹鉾は、嵯峨天龍寺瀬戸川町・嵯峨天龍寺龍門町・嵯峨天龍寺角倉町の三町（平成二十三年現在、総戸数約二百四十戸）が共同で管理する劍鉾である。牡丹鉾の管理は、三町内が一年ごとに担当することになっている。担当する町を年番と称している。平成二十二年（二〇一〇）は角倉町が年番であり、平成二十三年（二〇二一）は瀬戸川町が年番を務めた。さらに、平成二十三年は、先述したように鉾順位が第五年の年であり、牡丹鉾が年番（大年番ともいう）の年であった。年番になると五本ある鉾のなかで先頭に立って巡行することになる。牡丹鉾は五年に一度年番になり、次の年から四年間は最後尾につくことが慣例である。

劍鉾は新旧の二基を護持している。祭礼の巡行に供する新しい方の鉾を本鉾と称し、鉾差しの練習に用いる古い鉾を練習鉾と称している。ただし、練習鉾は祭りの日に特定の場所へ飾るため、飾り鉾とも呼んでいる。

本鉾は、銚に牡丹に唐獅子を左右シンメトリックにあしらった意匠が施されている。瀬戸川町に位置する毘沙門堂に祀られている毘沙門天像（総高約五センチメートル）を、銚立ての際に本鉾の銚受（額）に取りつけることが慣わしである。毘沙門天像の背面の突起を、銚受の丁字穴に差し込んで固定する。銚受の裏には「大正拾年五月／発起／天竜寺青年會」の銘がある。銚受の表裏とも縁には毘沙門天の使いとされる百足が描かれている。受金には一面に十六弁菊紋、反対の面に三つ葉葵紋をそれぞれ三個ずつ付けている。

飾り鉾は、銚の一面に菊に蝶の意匠が施されているが、反対の面には蝶が四匹彫られているのみである。銚受の表には本鉾と同様に毘沙門天像が取り付けられるようになっており、裏には「寛政九丁巳稔／奉納吉田姓」の銘がある。受金に



牡丹鉦（本鉦）の裏面（青江智洋，平成24.5.27）



牡丹鉦（本鉦）に取り付けられた毘沙門天像（福持昌之，平成24.5.12）

は裝飾がみられない。銘文の年紀に従うと、飾り鉦の方が古く、本鉦の方が新しいということになる。飾り鉦の鋳の意匠が牡丹ではないことが気に掛かるところである。

牡丹鉦の吹散には、上から転法輪、鳳凰、白色牡丹、赤色牡丹の意匠が施されている。

鈴の紐の素材は麻で、自分たちで綯ったものを使用している。

なお、毘沙門天像は祭礼が終わり次第、すみやかに元の場所へ返却することになっている。

鉦祭りの次第

鉦差しの練習は、ゴールデン・ウィーク明けから始め、祭礼の前々日を練習の最終日としている。最終日には練習鉦ではなく、本鉦を使う。最終日の夕方、鉦を保管している倉庫（三町それぞれに特定の倉庫を持っている）から鉦を出し、軽トラックに乗せて町内の広場（平成二十三年は角倉町の八木兵商店駐車場を使用した）へと運び、都合のつく関係者約十五名が集合して、鉦を差し

ながら町内を練り歩く。これを「仕上げ」と呼ぶ。仕上げは、練習中に迷惑をかけた地域の方々への御礼と練習の成果を町内へ披露する意味を込めて行われる。角倉町から龍門町へ北上し、瀬戸川町までの各所で鉦を差しながら歩く。ハイライトはJR嵯峨嵐山駅のロータリーで鉦を差しながら周回するところである。

練習の成果を披露した後、倉庫へ戻って打ち上げとなる。二時間ほど飲食をした後、幸領から二日後の本番の心構えなどについて挨拶がある。その後、本番で鉦差しを行う者の名前が発表され、該当者には浴衣が配られる。浴衣をもらった者は本番で鉦を差すことができる。一生懸命練習してもまだ周囲が認めてくれないと本番で鉦を差すことはできない。

浴衣を受けた者のうち数名が先輩に向けて「二週間ありがとうございました。ほんまにみなさんのおかげで、事故もなく怪我なくこれだと思います。本番は頑張りますので、よろしくお願いします」という挨拶をする。最後に自治会長の挨拶で打ち上げはお開きとなる。

還幸祭の前日は、午後から差し手だけの食事を行う程度で特変わった行事はない。

平成二十三年（二〇二一）の還幸祭当日は、午前六時三十分に関係者が倉庫へ集合し、軽トラックに鉦を載せて御旅所まで運ぶ。午前七時ごろ、御旅所の鳥居前で「鉦立て」を行う。結ぶ紐は鉦差しが使う帯を使用する。鉦立てが終わると一度帰宅する。

午前八時二十分、野宮神輿方がハナカンを持って練り歩きながら町内へやって来るので、ハナカンとともに鉦方も御旅所へ向かう。

御旅所での祭典後、午前十時ごろに巡幸開始となる（この年は朝から大雨であったため、巡行の一部が短縮された）。



浴衣を受け鉦差しをするようになった若者の挨拶（青江智洋，平成23.5.22）



牡丹鉾の鉾差し（青江智洋，平成24.5.27）

午前十一時三十分、五基の鉾が大覚寺前庭に到着するとそれぞれを境内に立て、鉾方は昼休憩となった。天候が回復してきたので、牡丹鉾の幸領の判断によって午後からは鉾差しを行うことが決まった。

十二時四十分、大覚寺を出発。観空寺町を通り新丸太町へ出て、JR嵯峨嵐山駅西側の線路を南に越え、造道町を経て保津川左岸を上り、時雨殿の南東の集結所へ至る。ここで他の鉾と同様に約二十分間の休憩をとった。休憩後、御旅所へ向けて出発する。集結所前から御旅所までの巡行路では鉾を差し続ける。午後四時に御旅所へ到着し、拝殿まわりを行ったのちに倉庫へ戻って鉾を解体した。平成二十三年（二〇二一）は六月三日に「受け渡し」の行事を行った。また、年番を務めた瀬戸川町は翌年番を務める龍門町へ「送り状」を出した。牡丹鉾の場合、三町の輪番で鉾を管理しているためである。

鉾差し

鉾差しの練習は例年ゴールデン・ウィークが明けてから始める。平成二十三年は五月七日から始めた。日曜日以外は毎晩八時から十時ごろまでを練習時間とし



牡丹鉾のトウヤ飾り（青江智洋，平成24.5.27）

いると全く重さを感じないが、少しでも傾くとかなり重く感じる。鉾を次の者へ送る差し替えの時は、きちんと重心をとっておかないと差し替えられないという。足の運びや腰の振りが早いと鈴の鳴るリズムが速くなる。鉾をゆっくり振るのはしんどいのでどうしても速くなってしまいが、ゆっくり振ったほうが趣のある音になると好まれている。また、ゆっくり振ると鈴の紐が棹に巻き付かないが、速く振り回すと棹に紐が巻き付くことがあるという。

牡丹鉾を護持する地区の鉾差しは、鉾を差す時に足が擦り足になっている。この差し方を「送り足」と呼んでいる。他地区の鉾差しは、足を高くあげる「振り足」で鉾を差すが、牡丹鉾の鉾差しだけ「送り足」で鉾を差すのが特徴である。ただし、関係者のなかには、「送り足」は本来の差し方ではないという人もいる。鉾を差す時の視線は、前か足下を見るようにする。ベテランになると視野が広くとれるようになるという。東山地域では鉾を扱う時に鉾の上部を見てバランスを確認しているが、嵯峨野地域ではそのような慣わしはない。

トウヤ飾り

平成二十三年は瀬戸川町内の個人宅に祭壇を設けて劍鉾を飾った。二十四年は毘沙門堂内に祭壇を設けて劍鉾を飾った。劍鉾を飾る場所は年番の町内に任せ

ている。練習には練習鉾を使用するが、還幸祭の日が近くなると本鉾で練習をするようにしている。

牡丹鉾は町内の倉庫で管理している。瀬戸川町の場合、鉾差しの練習は倉庫前の広場に簡易な櫓（鉾を立てかける木組みのこと）を組んで行っている。

鉾差しは中学生から参加する者もいるが、牡丹鉾は重量があるため高校生くらいになつてからでないとうまく扱うことはできない。鉾を持った時、重心がちゃんと取れて

ている。祭壇には「野宮大神」と「愛宕大神」の軸を掛け、その前に劍鉾を配置し、町内から奉納された御神酒などを供える。

かつて還幸祭の翌日を後宴（アシアライとも）と称していた。後宴では町内の関係者が集まって酒盛りをすることになっていた。当時は、後宴の時に宰領と世話役が祭礼記録簿と小旗を次の年番のところへ持つていく「申し送り」をした。最近では、還幸祭の一週間後にアシアライとして反省会と食事を催している。

その他

鉾差しの際に腰に巻く布はオビ（帯）と呼ばれている。これは町内の者が手作りで製作したものである。

本鉾の棹は平成二十三年（二〇一一）に新調したばかりの白木製である。白木の方が漆塗りの棹に比べて滑りにくいという。しかし、やはり汗で手がすべってしまうことがある。平成二十三年は午前中に雨が降ったこともあり、棹の下端部分（グリップ部分）に松ヤニをつけて滑り止めとした。

宰領は紋付き袴姿である。鉾差しが着用する半纏は紫地で背中に転法輪（輪王）の紋が入っている。帯は紺地に金色の転法輪が描かれている。襷は水色・白・赤の入り混じった模様になっている。足には白足袋をして草履を履いている。

牡丹鉾の鉾差しは、それぞれ自分用の手甲（朱色）を身につけている。手甲には鉾差しを始めた年を刺繍している。鉾差しを引退した者は引退した年も記すことにしている。これは牡丹鉾のメンバーが独自に始めたものである。

（青江 智洋）

③ その他の鉾

琵琶鉾 不明

概要

琵琶鉾は先述の通り、「嵯峨祭年番巡回記録」明治十六年条（一八八三）に鉾組中の一つとして記されているものの、その後の記録にはまったく出てこなくなる。

その代わり、明治二十年（一八八七）からは牡丹鉾が記載されるようになる。ならぬかの事情によって琵琶鉾から牡丹鉾に変わった可能性がある。近年まで琵琶鉾の部品が地域に残されていたという情報があったので、調査にあたり関係者に搜索してもらったが、結局発見することはできなかった。

（青江 智洋）

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

藤岡謙二郎・西村睦男『北白川と嵯峨野』（地人書房、一九六八年）

藤原春雄『嵯峨野の祭り行事』『洛味』第三百五十九集、一九七四年）

財団法人嵯峨教育振興会編『嵯峨誌』平成版（一九九八年）

『郷土の今昔』正・続（嵐山学区郷土誌研究会、一九七九年・二〇〇二年）

岡田莊司・加瀬直弥編『現代・神社の信仰分布―その歴史的経緯を考えるために』（國學院大學21世紀COEプログラム研究センター、二〇〇七年）

古川修『嵯峨祭の歩み―その起源・構造・変遷―』（京都新聞出版センター、二〇〇八年）

劍鉾祭礼記録・古文書

「嵯峨祭年番巡回記録」（明治十六年から現在までの記録）

「鉾係覚帳」（昭和五年から昭和三十一年までの記録。中院町所蔵）

「牡丹鉾道具員数帳」（昭和五十四年から現在までの記録）

嵯峨学区中院町青年会会長「鉾係覚帳」（昭和五年から昭和三十一年まで）

ほかの古文書・古記録については古川修『嵯峨祭の歩み』の巻末に史資料一覧があるので、そちらを参照していただきたい。

（青江 智洋）

秋の劍鉾のまつり

三嶋神社 神幸祭

毎年九月第三日曜日

三嶋神社

京都市東山区渋谷通東大路東入上馬町

① 祭礼と由緒

地域の概要

三嶋神社は渋谷通の北側に鎮座しており、三嶋明神などとも呼ばれた。『京都府地誌』には、祭神は大山祇命・火瓊々杵尊・木之花咲耶姫の三柱で、祭日は九月十六日と記されている。『京都坊目誌』によると、後白河天皇の中宮建春門院（平滋子）が摂津三嶋鴨社に祈念して高倉天皇を出産したことから、永暦元年（一一一六）六月に後白河天皇が平重盛に命じて愛宕郡朝岡山の地に社殿を造営させ祀ったのに始まるとされる。その後、炎上と再建を繰り返すものの、江戸時代には上・下両馬町の鎮守となり、「京都御役所向大概覚書」は氏子の境を「西ハ石塔町土橋限、東ハ清閑寺村限、南北ハ町筋南側限」と記している。

現在の三嶋神社の氏子地域は、東は清閑寺池田町と接し、西は渋谷通にある土橋、南は京都女子大学附属小学校の南側、北は五条通（五条バイパス）を境としている。氏子によって「咲耶会」という氏子組織が組織されており、祭礼の運営などにあたっている。

祭礼次第

三嶋神社の神幸祭は、毎年九月第三日曜日に行われる。前日である土曜日には宵宮祭があり、午後五時から神事が営まれるとともに、五時半から八時半にかけて咲耶会による子供向けの露店が出店される。

神幸祭当日には、午後一時より三嶋神社本宮にて神事が斎行される。祭典終了後、まずは子供神輿が出発し、続いて劍鉾が巡行を始める。大神輿はやや遅れて、

午後一時半ごろに巡幸を開始する。途中、劍鉾が子供神輿を追い越して先頭となり、渋谷通を東へと向かっていく。行列は正林寺の前から北東に分かれる道を進んで御旅所に到着し、二十分ほどの休憩の後、渋谷通を西に戻る。三嶋神社を過ぎて、劍鉾と子供神輿は市立白河支援学校東山分校へ入り、子供神輿はここで解散となる。大神輿はさらに西進して馬町交差点を渡り、大和大路通手前まで巡幸してから来た道に戻る。馬町交差点での辻回し後、東山分校に入り休憩する。校内で待機していた劍鉾も加わって、再び行列を組んで渋谷通を東進し、午後三時四十五分ごろには三嶋神社に帰還する。

宮司によると、平成二十四年から劍鉾も馬町交差点での辻回しを行うようになり、神輿は豊国神社まで巡幸するようになったという。

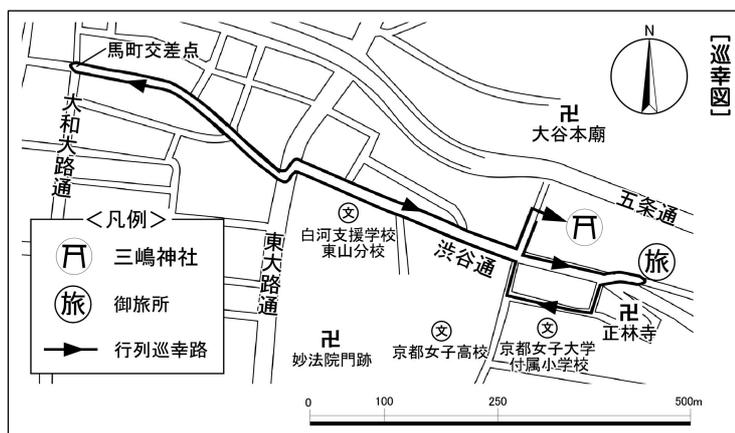
三嶋神社到着後、劍鉾は鉾差しによりすぐに解体され、木箱などに収納される。本宮での神事が終わると神輿の解散となり、大神輿・子供神輿も飾りが外されて社務所などに片付けられる。

行列次第

幟と太鼓を載せた軽トラックを先頭に、一面と衣装を着け、鉾を持った猿田彦が続く。その後ろに神職、劍鉾一基（鉾差し三基）、子供神輿、大神輿、神職が行列をなす。

由緒と歴史

三嶋神社における祭礼が、いつの時代まで遡ることができるかについては詳ら



かでない。現宮司の友田重臣氏によると、昭和四十年（一九六五）ごろに、それまで出ていなかった神輿が祭礼行列に加わるようになり、昭和五十六年（一九八一）から子供神輿も加わったという。

② 劍鉾と組織

菊鉾・獅子牡丹鉾・松鉾（三嶋神社）

概要

三嶋神社の所有する劍鉾は三基あり、それぞれの鋳の意匠から、菊鉾・松鉾・獅子牡丹鉾と呼ばれている。なかでも「一の鉾」とも呼ばれる菊鉾は、妙法院門跡御寄附と伝えられ、古くから神社が所有してきたものとされる。菊鉾のものとされる鋳受には元禄十六年（一七〇三）と記されており、その製作年代がうかがわれる。また、鋳受や鋳などを収める箱の書付から、安政四年（一八五七）に修復されたと推測される。

松鉾と獅子牡丹鉾は、本来、氏子である上馬町・下馬町両町が護持していたものと考えられる。獅子牡丹鉾は、劍の茎に刻された銘から、宝暦五年（一七五五）に作られたことがうかがわれる。

かつては差されて巡幸に加わっていたと伝えられるが、それがいつまでのことかは詳らかでない。現宮司によると、大正生まれという先々代宮司からも鉾を差していたとは聞いたことがないというので、それ以前のことと推測される。現在のように差して巡幸に加わるようになる以前は、御旅所に飾られるだけであった。当時の御旅所はモチマワリソウダイ（持回り総代）の家に設けられていたという。また、米屋や材木屋など敷地の広い家で飾られていたとも伝えられる。

劍鉾が再び差されるようになったのは、平成に入ってからのことである。現宮司が偶然、下嶋神社で藤田圭亮氏ら鉾差しの若手たちの練習風景を目にしたことが契機となった。その後、藤田修氏らの助言を得ながら修復を進め、平成十年から十一年ごろによりやく復活して巡幸に加わるようになった。



獅子牡丹鉾（今中崇文、平成22.9.19）



御旅所（今中崇文、平成22.9.19）

現在、これら三基の劍鉾はいずれも老朽化が激しく、特に松鉾はすぐに差すことのできる状態にはないといわれる。巡幸には、それぞれの部品を集めて構成された一基だけが出ており、もう一基が上馬町の東端に設けられる御旅所に飾られる。

鉾差し

東山で代々鉾差しを行ってきた藤田修氏とその甥の藤田圭亮氏、藤田修氏の長男の藤田隆平氏らの三名で鉾を差していた。しかしここ数年、藤田修氏自身は鉾を差さず、圭亮氏や隆平氏など後進にその役目を譲り、後見役に回っている。

トウヤ飾り

上馬町の東端にある民家前にテントが建てられ、御旅所として飾られる。テント内には劍鉾が一基、棹を外した状態で飾られ、その前に台が設けられ、神饌が供えられる。

（今中崇文）